

27-45  
29-45

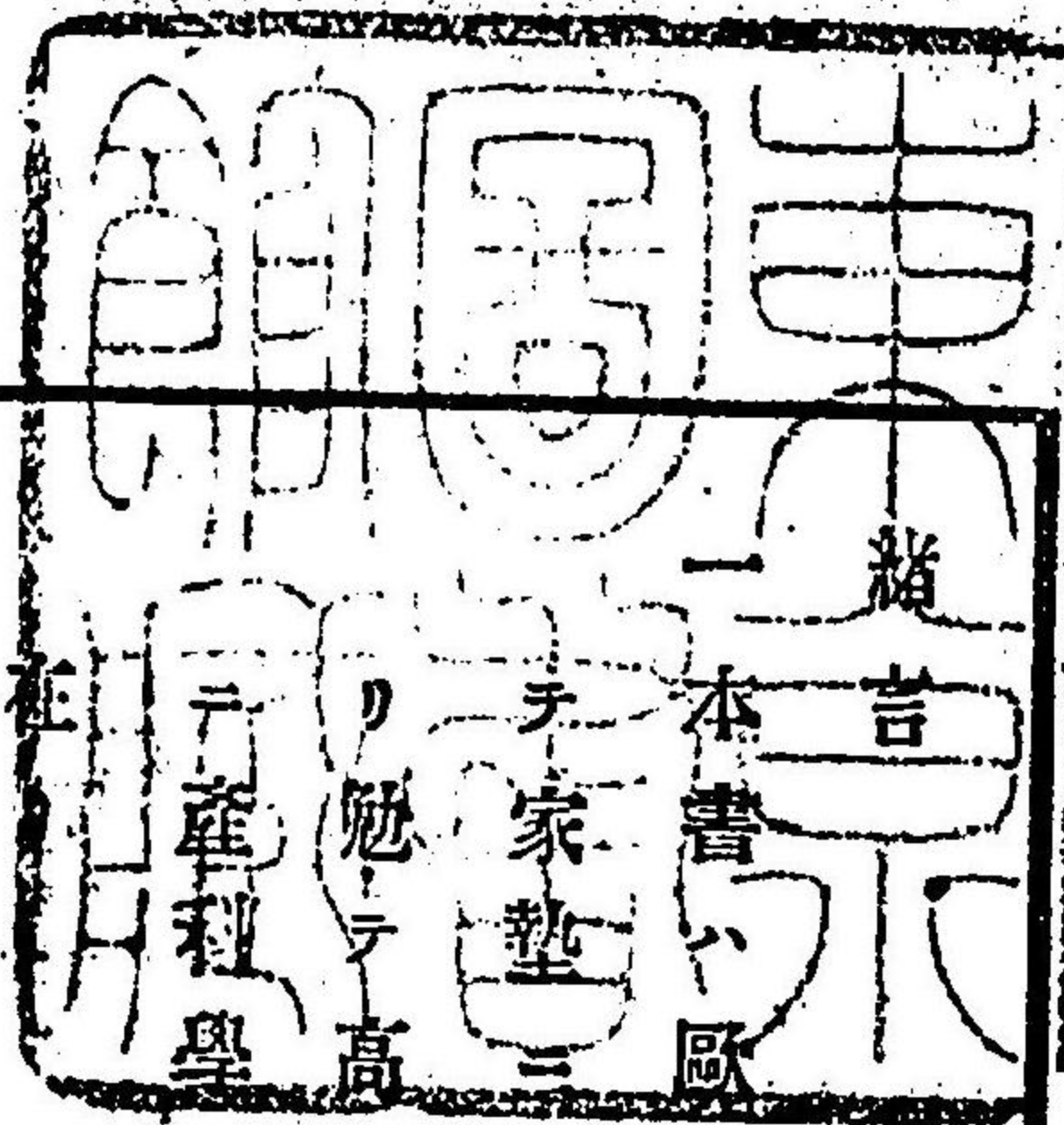
吉田顯三講述

產科學

吉田氏藏







緒言

一 本書ハ歐洲諸家ノ説ト余カ歴驗上得タル所ノ者トチ參酌シテ家塾ニ於テ口述シ生徒ヲシテ隨聽隨錄セシメタル者ニ係リ勉テ高尚ノ理論ヲ省察セリ其主旨タル專ラ初學ヲシテ述テ產科學ノ要領ニ通シ臨床ノ實益ヲ得セシメント欲スルニ在

- 一 骨盤及生殖器ノ解剖ハ唯其產科ニ切要ナル者ノミチ摘載スルチ主トシ普通解剖學ニ於ケルガ如ク精密ノ記載ヲ省ク
- 一 胎生論ハ實際產科ニ裨益スル所少キチ覺フ故ニ唯其一斑ヲ示スノミ
- 一 產科學上未タ論理ノ確定セサル者ハ姑ク諸家ノ所論ヲ畧示シテ讀者ノ參考ニ供フ



一 産科器械ハ其數固ヨリ枚舉スルニ暇アラサレドモ本書ハ余カ  
自ラ實際ニ便益アリト信認スル者ノミチ掲ク  
一 本書ハ説ノ稍陳腐ニ屬スル者ト雖也間之ヲ記載ス蓋シ産科  
學ノ沿革ヲ示サント欲スルノ意ニ出ツルナリ  
一 名詞ハ勉テ前人ノ襲用スル所ニ從フト雖也余カ鄙見ヲ以テ  
撰定スル所亦少シトセス  
一 書中説ク所或ハ簡約ニ失スルカ如キアリ或ハ煩冗ニ涉ルカ  
如キアリテ其体裁頗ル整然タラス加フルニ職務執掌ノ餘暇  
ヲ以テ訂正スル者ナレハ恐クハ遺漏脱誤モ亦尠カラサルヘ  
シ讀者幸ニ之ヲ諒セヨ

明治十七年十二月

述者 誦

### 産科學

#### 總目

##### 卷之一

- 第一章 骨盤論
- 第二章 生殖器論
- 第三章 月經論
- 第四章 受胎論
- 第五章 孕卵子ノ發育
- 第六章 胚胎ノ發育
- 第七章 胚胎附屬器
- 第八章 子宮粘膜炎ノ變化
- 第九章 胎盤及臍帶



- 第十章 各器ノ發育
- 第十一章 胎兒ノ血液循環
- 第十二章 初生兒ノ循環系變化
- 第十三章 胎兒發育ノ度

卷之二

- 第十四章 妊娠中子宮ノ變化
- 第十五章 分娩後子宮ノ變化
- 第十六章 妊娠ノ徵候
- 第十七章 胎兒死亡ノ徵候
- 第十八章 妊娠日數
- 第十九章 双胎及三胎等
- 第二十章 重胎

- 第二十一章 子宮外妊娠

卷之三

- 第二十二章 胎兒ノ諸病
- 第二十三章 妊婦ノ諸病
- 第二十四章 流産

卷之四

- 第二十五章 分娩ノ原因
- 第二十六章 分娩ノ徵候
- 第二十七章 分娩ノ機力
- 第二十八章 順産ノ所置
- 第二十九章 順産ノ機轉
- 第三十章 變産ノ機轉



卷之五 ○第三十一章 臍帶脫

○第三十二章 產前出血即前置胎盤

○第三十三章 產後出血

○第三十四章 子宮內翻

○第三十五章 子宮破裂

○第三十六章 子癇

卷之六

○第三十七章 骨盤ノ變形

○第三十八章 母體軟部ノ違常ニ起因スル分娩ノ障礙

障礙

○第三十九章 兒體或ハ其附屬器ノ違常ニ起因ス

卷之七 ○第四十章 子宮怠慢及分娩過速

ル分娩ノ障礙

○第四十一章 廻轉術

○第四十二章 產科鉗子

○第四十三章 產科槓杆

○第四十四章 挽引帶

○第四十五章 產科鈎

○第四十六章 墮胎術及早產術

○第四十七章 穿顱術

○第四十八章 截胎術

○第四十九章 子宮切開術



- 第五十章 剖腹術
  - 第五十一章 耻骨縫合切離術
- 卷之八
- 第五十二章 產褥ノ狀況
  - 第五十三章 初生兒ノ所置
  - 第五十四章 產后白腫
  - 第五十五章 產褥狂
  - 第五十六章 產褥熱
  - 第五十七章 骨盤內腹膜炎等

總目終

產科學卷之一

目次

○ 第一章 骨盤論

○ 畸形骨盤論  
 ○ 畸形骨盤論  
 ○ 諸關骨節  
 ○ 薦骨  
 ○ 尾骨  
 ○ 尾骨運動  
 ○ 各骨  
 ○ 骨盤論  
 ○ 諸關骨節  
 ○ 薦骨  
 ○ 尾骨  
 ○ 尾骨運動  
 ○ 各骨  
 ○ 骨盤論  
 ○ 諸關骨節  
 ○ 薦骨  
 ○ 尾骨  
 ○ 尾骨運動  
 ○ 各骨

○ 第二章 婦人生殖器論

○ 前庭生殖器  
 ○ 尿道口  
 ○ 陰唇  
 ○ 小陰唇  
 ○ 陰核  
 ○ 子宮  
 ○ 子宮體  
 ○ 子宮頸  
 ○ 子宮口  
 ○ 子宮位置  
 ○ 子宮傾斜  
 ○ 子宮畸形  
 ○ 子宮位置  
 ○ 子宮傾斜  
 ○ 子宮畸形







○第十章

各器ノ發育

○脊椎○頭蓋○腦脊髓○顔面○眼○聽器○心  
○動脈○靜脈○消化器○臍及唾腺○肺臟○心  
○泌尿器○ウオル氏體○ミユル氏管  
○副腎○膀胱○外生殖器  
○子宮及膻○卵巢○睪丸○副睪○喇  
○腎臟○子宮及膻○外生殖器

○第十一章

胎兒ノ血液循環

○臍帶動脈○臍帶靜脈○靜脈道○卵圓道○動  
脈道○血液循環ノ方向

○第十二章

初生兒循環系ノ變化

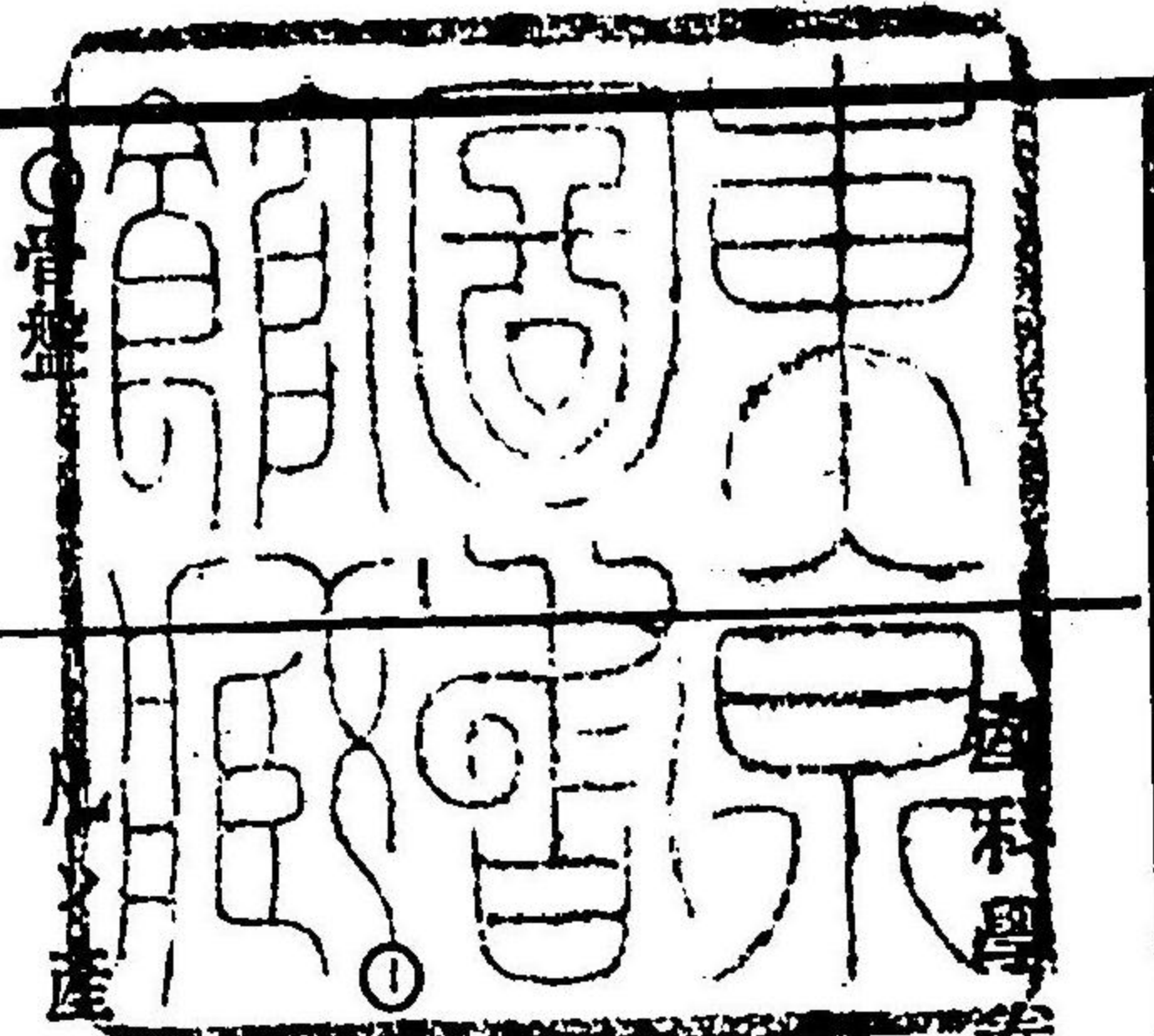
○臍帶動脈ノ収縮○卵圓孔ノ閉鎖  
○動脈道ノ収縮

○第十三章

胎兒發育ノ度

○受胎後第三週ヨリ滿月ニ至ル身長重量及各  
器發育ノ順次○各骨化骨ノ時期





東洋醫學卷之一

第一章

骨盤論

骨盤ノ解剖ニ通曉スルヲ要ス抑骨盤ナル者ハ不齋巨大ノ骨輪ニシテ上ニハ脊柱ヲ載セ下ニハ下肢ヲ懸ケ内部ニハ生殖器官ヲ貯ヘ且ツ泌尿器及消化器ノ一部ヲ藏シ外部ハ筋肉アツテ附着ス而シテ婚期ニ至レハ四骨ヨリ成ル即チ二個ノ無名骨薦骨及尾骶骨是ナリ

吉田顯三講述  
門人筆記



○無名骨

○無名骨

無名骨ハ左右各一個アリ相合シテ骨盤ノ前壁及側壁ヲ造  
 成ス小兒ニ在テハ三個ノ別片ヨリ成リ脾臼ニ於テ湊合シ  
 Y字形軟骨之レヲ維持ス成人ニ在テハ其別片全ク癒合シ  
 着シテ不齊ノ一大骨ト成ル然レモ今腸骨坐骨及耻骨ノ三  
 部ニ區別シテ之ヲ論セントス

○腸骨

(一)腸骨 脾臼ノ上後方ヨリ起リ上外後方ニ向ヒ擴張セル  
 者ニシテ稍三角形ヲ呈シ二面三縁ヲ有ス 外面ハ突隆シ  
 テ其前半ハ前外方ニ向ヒ其後半ハ後外下方ニ向フ而シ此  
 面ハ專ラ髌筋ノ附着スル所トス 第一圖(ホ) 内面ハ内上方ニ向  
 テ前後二部ニ分レ前部ハ陷凹シテ滑澤ナリ之ヲ腸骨窩 第二  
 圖(ホ)ト謂フ腸骨筋之ニ着ク此窩ノ下際ニ一條ノ隆起線ア

(第一圖)

無名骨ノ外面ヲ示ス

- (イ) 前上棘突起
- (ロ) 前下棘突起
- (ハ) 後上棘突起
- (ニ) 後下棘突起
- (ホ) 腸骨外面
- (ヘ) 坐骨棘
- (ト) 大薦坐截痕
- (チ) 小薦坐截痕
- (リ) 坐骨結節
- (ヌ) 耻骨縫合
- (ル) 腸耻隆起
- (ヲ) 脾臼
- (ワ) 鎖閉孔





リ腸骨ト耻骨トノ分界ヲナス之ヲ腸耻線全圖ト謂フ此面  
 ノ後部ニ耳形ノ粗糙面アリ全圖新鮮骨ニ在テハ纖維軟骨  
 之ヲ被ヒ薦骨ノ側面ト關節ス 前縁ハ二個ノ突起ヲ有ス  
 上ナル者ヲ前上棘突起第一圖及第二圖ト謂ヒポーパルト氏鞵  
 帶之ニ附ク下ナル者ヲ前下棘突起兩圖ト謂ヒ股直筋ノ腱  
 之ニ着ク 後縁モ亦二個ノ突起ヲ有ス一ヲ後上棘突起兩圖  
ノト謂ヒ一ヲ後下棘突起兩圖ト謂フ俱ニ鞵帶及筋肉ヲ着  
 シ後下棘突起ノ下ニ一大截痕アリ之ヲ大薦坐截痕兩圖ト  
 謂フ 上縁ハ弓狀ヲナス一ニ腸骨櫛ト名シ腹壁及背部ノ  
 諸筋之ニ着ク而シテ其前端ハ前上棘突起ニ終リ後端ハ後上  
 棘突起ニ終ル

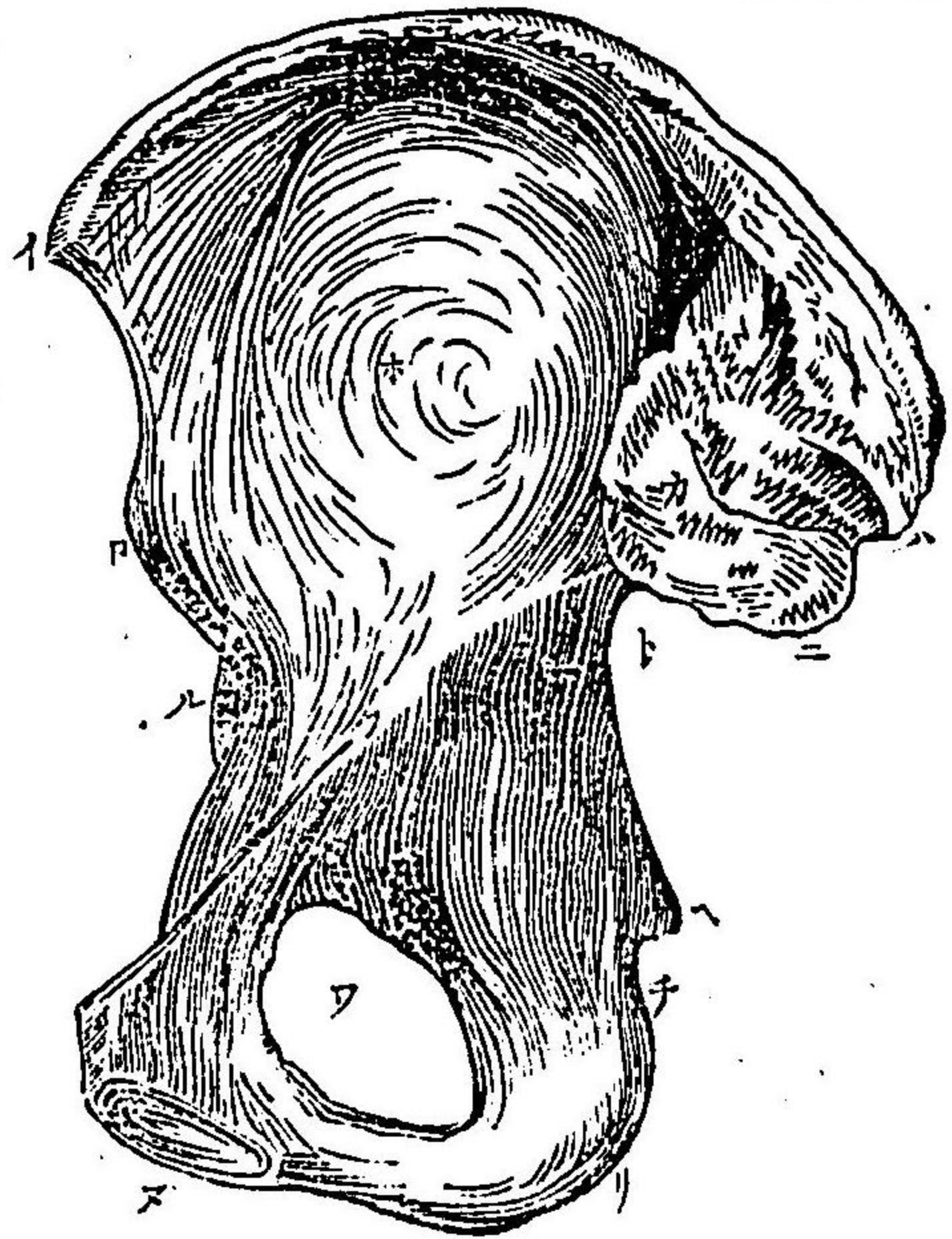
○坐骨

(二)坐骨 無名骨ノ後下部ヲ占メ骨體結節及上行枝ノ三部

(第二圖)

無名骨ノ内面ヲ示ス

- (イ) 前上棘突起
- (ロ) 前下棘突起
- (ハ) 後上棘突起
- (ニ) 後下棘突起
- (ホ) 腸骨窩
- (ヘ) 坐骨棘
- (ト) 大薦坐截痕
- (ナ) 小薦坐截痕
- (リ) 坐骨結節
- (ヌ) 耻骨縫合
- (ル) 腸耻隆起
- (ヲ) 腸耻線
- (ワ) 鎖閉孔
- (カ) 關節面





ニ分ル 骨體ハ殆ト三角形ニシテ三面三線チ有ス外面ノ上方ハ髌臼ノ一部チ成シ下方ハ溝狀チ呈シテ外鎖閉筋ノ腱チ通ス内面ハ滑澤ニシテ眞骨盤ノ側壁チ造成シ上ハ腸耻線前圖ニ由テ腸骨窩ヨリ分界セラル後面ノ上方ハ廣クシテ腸骨外面ニ連リ下方ハ狹クシテ結節ニ終ル後線ニ三角形ノ突起アツテ後外方ニ向フ之チ坐骨棘ト謂フ兩圖此棘ノ上下ニ截痕アリ上ナル者ハ大ニシテ所謂大薦坐截痕是ナリ下ナル者ハ小ニシテ之チ小薦坐截痕兩圖ト謂フ結節ハ坐骨ノ最下部チ占メ筋肉之ニ附着ス人ノ着坐スル時直ニ床上ニ接スル所トス 上行枝ハ結節ヨリ起テ上方ニ進ミ耻骨下行枝ニ連接シ外面ハ筋肉チ附ケ内面ハ骨盤前壁ノ一部内縁ハ骨盤下口ノ一部外縁ハ鎖閉孔内縁ノ

○耻骨

一部チ造成ス

(三)耻骨 無名骨ノ前部チ占メ分レテ平行枝一名及下行枝ノ二部トナル 平行枝ハ二端四面チ有シ外端ハ髌臼ノ一部チ成ス其上方ニ一個ノ隆起アリ之チ腸耻隆起兩圖ト謂フ内端ハ橢圓面チ有シ對側ノ同端ト相合シテ耻骨縫合二圖ノチナス上面ハ三角形ニシテ外廣ク内狭シ而シ一條ノ隆起線アリ外方ニ走ル即チ所謂腸耻線第二圖ニシテ骨盤上縁ノ一部チ成ス此線ノ内端ニ一個ノ結節アリ之チ腸耻棘ト謂ヒ此棘ト内端トノ間チ腸耻櫛ト謂フ下面ハ鎖閉孔ノ一部チ成シ外面ハ粗糙ニシテ筋肉之ニ附着シ内面ハ骨盤ノ前壁チ成ス 下行枝ハ外下方ニ向テ走り坐骨上行枝ニ連ル内面ハ滑澤ニシテ骨盤内腔ニ向フ外面ハ筋肉チ着



ノ丙線ハ粗糙ニシテ稍外翻シ婦人ニ於テ陰核脚ヲ附シ外  
縁ハ鎖閉孔ノ一部ヲナス

○薦骨

薦骨ハ三角形ノ大骨ニシテ骨盤ノ後壁ヲ成シ上ハ第五腰  
椎ヲ承ケ下ハ尾骶骨ヲ懸ケ兩側ハ腸骨ニ接ス而メ四面二  
端ヲ有ス 前面ハ陷凹シテ其上部著シク前方ニ突出ス之  
ヲ薦骨岬ト謂フ此面ハ四條ノ横線第三圖ヲ具フ蓋シ此骨  
元來五個ノ別骨ヨリ成ルヲ以テ其適合ノ痕形ヲ示スナリ  
又四對ノ圓孔アリ各線ノ兩端ニ位ス全圖之ヲ薦骨前孔ト  
謂フ薦骨神經ノ前枝及血管ヲ通ス 後面ハ頗ル凹凸不平  
ニシテ其中線ニ四五個ノ結節アリ脊椎骨ノ棘狀突起ト其  
類ヲ同ラヌ又四對ノ圓孔アリ之ヲ薦骨後孔ト謂フ薦骨神

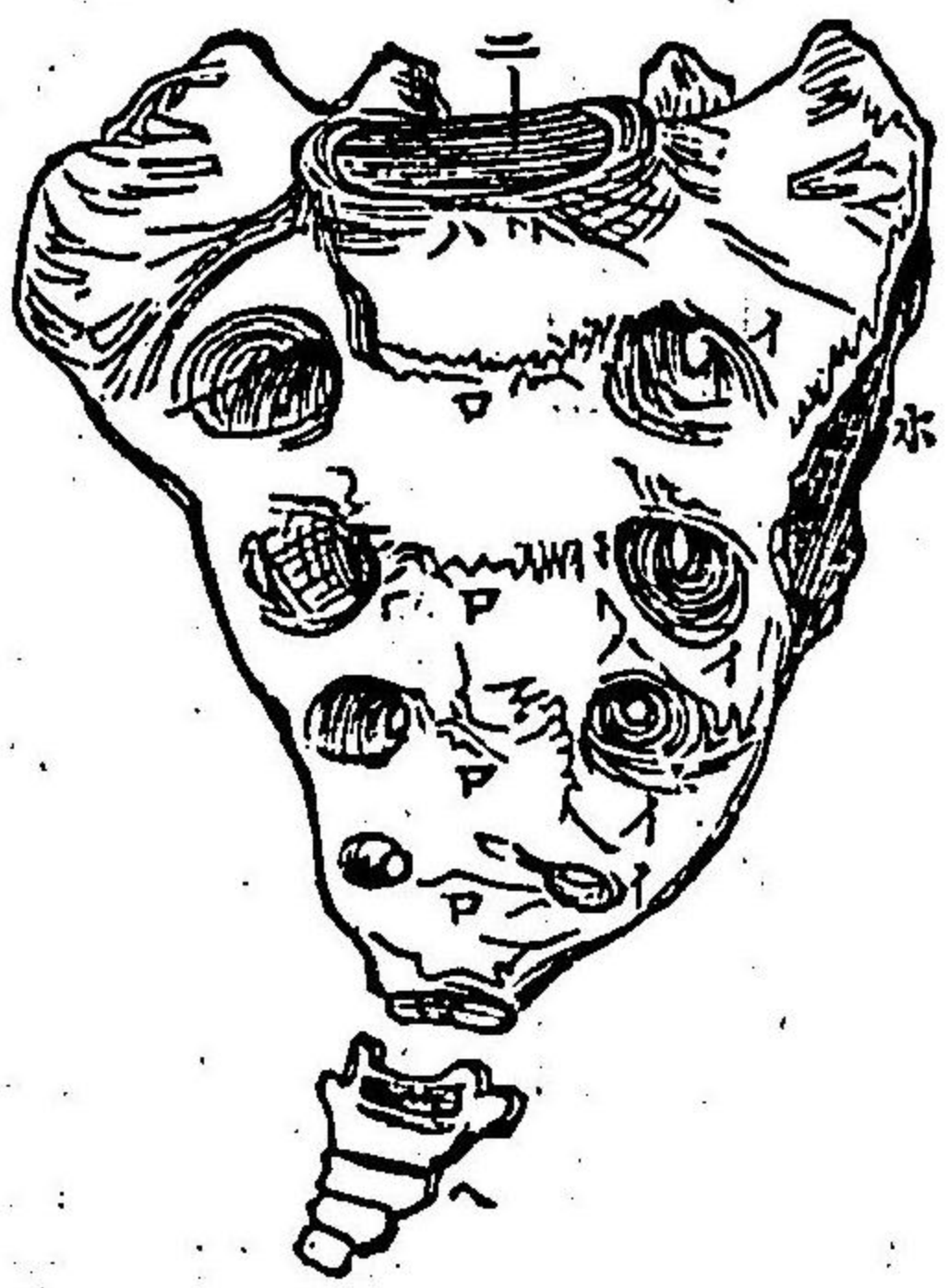
○薦骨

經ノ後枝及血管ヲ通ス此面ノ下部ニ三角形ノ一孔アリ之  
ノヲ薦骨管ノ下口トス薦骨ハ内部ニ空洞ヲ有ス之ヲ薦其  
左右ニ結節アリ之ヲ薦骨角ト謂フ尾骶骨角ト關節ス 側  
面ノ上方ハ廣ク耳形ノ關節面ヲ有シテ腸骨ニ接シ下方ハ  
狭クシテ大小薦坐鞞帶ヲ着ク又最下部ニ深キ截痕アリ尾  
骶骨ト相合シテ一孔ヲ成シ第五薦骨神經ヲ通ス 上端即

第三圖

薦骨及尾骶骨ヲ示ス

- (イ) 薦骨前孔
- (ロ) 横線
- (ハ) 薦骨岬
- (ニ) 上關節面
- (ホ) 側關節面
- (ヘ) 尾骶骨





チ基底ハ廣クシテ前上方ニ向ヒ中央ニ楕圓形ノ關節面アリ第五腰椎骨體ノ下面ヲ承ク此面ノ後部ニ三角形ノ大孔アリ之ノチ薦骨管ノ上口トス其兩側ニ關節突起アリ腰椎ノ下關節突起ニ接ス又關節面ノ左右ニ三角形ノ滑面アリ外方ニ延長シテ腸骨内面ニ連ル下端ハ下前方ニ向ヒ卵形ノ關節面ヲ有シテ尾骶骨ニ接ス

○尾骶骨

尾骶骨ハ通常四個ノ別片相合シテ成ル前面ハ少シク陷凹シ三條ノ横線アリ以テ別片ノ連合部ヲ示ス後面ハ稍隆起シ亦三個ノ横線ヲ有ス此面ノ上部ニ二個ノ突起アリ上方ニ突出ス之ヲ尾骶骨角ト謂フ薦骨角ト關節ス側縁ハ薄クシテ大小薦坐鞞帶ヲ着ク上端ハ卵形面ヲ具ヘ薦

○尾骶骨

骨下端ニ連ル下端ハ圓形ニシテ肛門括約筋ヲ着ク

尾骶骨ノ別片ハ幼時ニ於テハ多少運動スレド大人ニ在テハ癒合固結シテ一骨ト成ル加之男子ニ在テハ薦尾關節モ亦同變ヲ受クルコト多シ然レド婦人ニ在テハ斯ノ如キ強直ヲ致スコト極メテ少シ大抵尾骶骨ハ能ク前後ニ運動スルカ故ニ分娩時ニ於テハ下後方ニ反張シテ骨盤下口ノ前後徑線ヲ延長スルコト大約一應トス若シ不幸ニシテ薦骨ト尾骶骨ト癒合固着シテ運動セサレハ分娩甚ク困難ニシテ必ス骨傷ヲ致スベシ然ル者ニ在テハ務テ其傷所ノ癒合ヲ防禦スルヲ要ス否ヲサレハ將來復ク分娩ノ困難ヲ免ルベカラズ

○諸骨變形

骨盤ノ諸骨ハ間々變形ヲ存スルコトアリ而メ其變形タルヤ



或ハ一骨ニ止ル者アリ或ハ數骨ニ存スル者アリ或ハ一部ニ局スル者アリ例之薦骨ノ前面甚タ扁平ナルヲアリ或ハ薦骨岬頗ル前方ニ突出スルヲアリ或ハ耻骨弓狹クシテ銳角ヲナスヲアリ或ハ左右坐骨結節互ニ近接スルヲアリ或ハ坐骨棘過長ナルヲアルカ如シ若シ斯ノ如キ變形アレハ骨盤ノ徑線ヲ短縮スルヲ以テ胎兒ノ産出ヲ障礙スルヲ必セリ〔尙ホ骨盤變形條下ニ詳論スヘシ〕

○骨盤諸關節

(耻骨縫合) 耻骨ハ骨盤ノ前部ニ於テ左右相會シ纖維軟骨ヲ以テ連接セラレ且ツ上下前後ニ靱帶アリテ之ヲ固持ス 此縫合ハ妊娠末期ニ至レハ少ク弛緩シ分娩時ニハ稍離開スルカ如シ然レモ其離開スルヤ甚タ僅少ニシテ敢テ

○骨盤諸關節

著シク骨盤ノ徑線ヲ増スニ非ス

(薦腸關節) 薦骨ノ側面ト腸骨内面ノ後部トハ骨盤ノ兩側ニ於テ相會シ亦纖維軟骨ヲ以テ連接セラレ且ツ前後ニ靱帶アリテ之ヲ固持ス 此關節ハ極メテ僅微ノ運動ヲ爲ス者トス

(薦尾關節) 薦骨下端ト尾骶骨上端トノ間ニハ纖維軟骨アリ以テ兩端ヲ連接シ更ニ前後ニ靱帶ヲ以テ之ヲ固持ス 此關節ハ小兒及婦人ニ在テハ能ク運動スレモ男子ニ在テハ癒合固着シテ運動セサル者トス若シ婦人ニ於テ斯ノ如キ變化アレハ分娩必ス困難ナリ

(尾骶骨別片ノ癒合) 尾骶骨ハ前條既ニ述ルカ如ク四個ノ別片ヨリ成リ纖維軟骨及前後ニ靱帶ヲ以テ連接セラル然



ノヒ大人ニ在テハ別片悉ク癒合固着シテ一骨ト成ル  
 (薦坐靱帶) 左右各大小二條アリ 大薦坐靱帶(第五圖ハ腸  
 骨ノ後下棘突起薦骨及尾骶骨ノ側縁ヨリ起テ坐骨結節ノ  
 内縁ニ連リ以テ大薦坐截痕ヲ化シテ同名孔トナシ且ツ骨  
 盤下口側界ノ一部ヲナス 小薦坐靱帶(第五圖ハ薦骨及尾  
 骶骨ノ側縁ヨリ起テ坐骨棘ニ連リ小薦坐截痕ヲ變シテ同  
 名孔トナス  
 (腰薦關節) 第五腰椎體ノ下面ト薦骨上端ノ橢圓面トハ織  
 維軟骨ヲ以テ連接セラル而シ此軟骨ハ楔狀ヲ呈シ前部ハ  
 厚クシテ後部ハ薄シ 其他薦骨ノ關節突起ハ第五腰椎ノ  
 下關節突起ト連合シ囊狀靱帶ヲ以テ固持セラル

○諸關節ノ運動

○諸關節ノ運動

骨盤ノ諸關節ハ多少運動セサルハナシ然レヒ耻骨縫合及  
 薦腸關節ノ運動ハ分娩時ニ於テ緊要ナルヤ否ヤニ至テハ  
 諸家其説ヲ同フセス蓋シ此關節ノ運動スルヤ極メテ僅微  
 ナルヲ以テ骨盤入口ノ徑線ヲ増加スルモ亦極テ些少ナリ  
 之ニ反シテ尾骶骨ハ能ク後下方ニ伸展シテ下口ノ前後徑  
 線ヲ延長シ薦坐靱帶ハ著シク弛緩シテ此部ノ斜徑線ヲ増  
 加スルヲ以テ兒頭ノ産出ヲ障礙スル者ハ唯左右ノ坐骨ノ  
 ミナリ然レヒ兒頭已ニ骨盤底ニ至レハ其縦長徑線ハ骨盤  
 ノ前後徑線ト一致シ其最短徑線ハ骨盤ノ横徑線ト一致ス  
 ルヲ以テ敢テ甚シク其産出ヲ障礙セス

○骨盤ノ區別

○骨盤ノ區別

骨盤ハ不齊巨大ノ骨輪ニシテ四骨ヨリ成ル即チ前壁及側

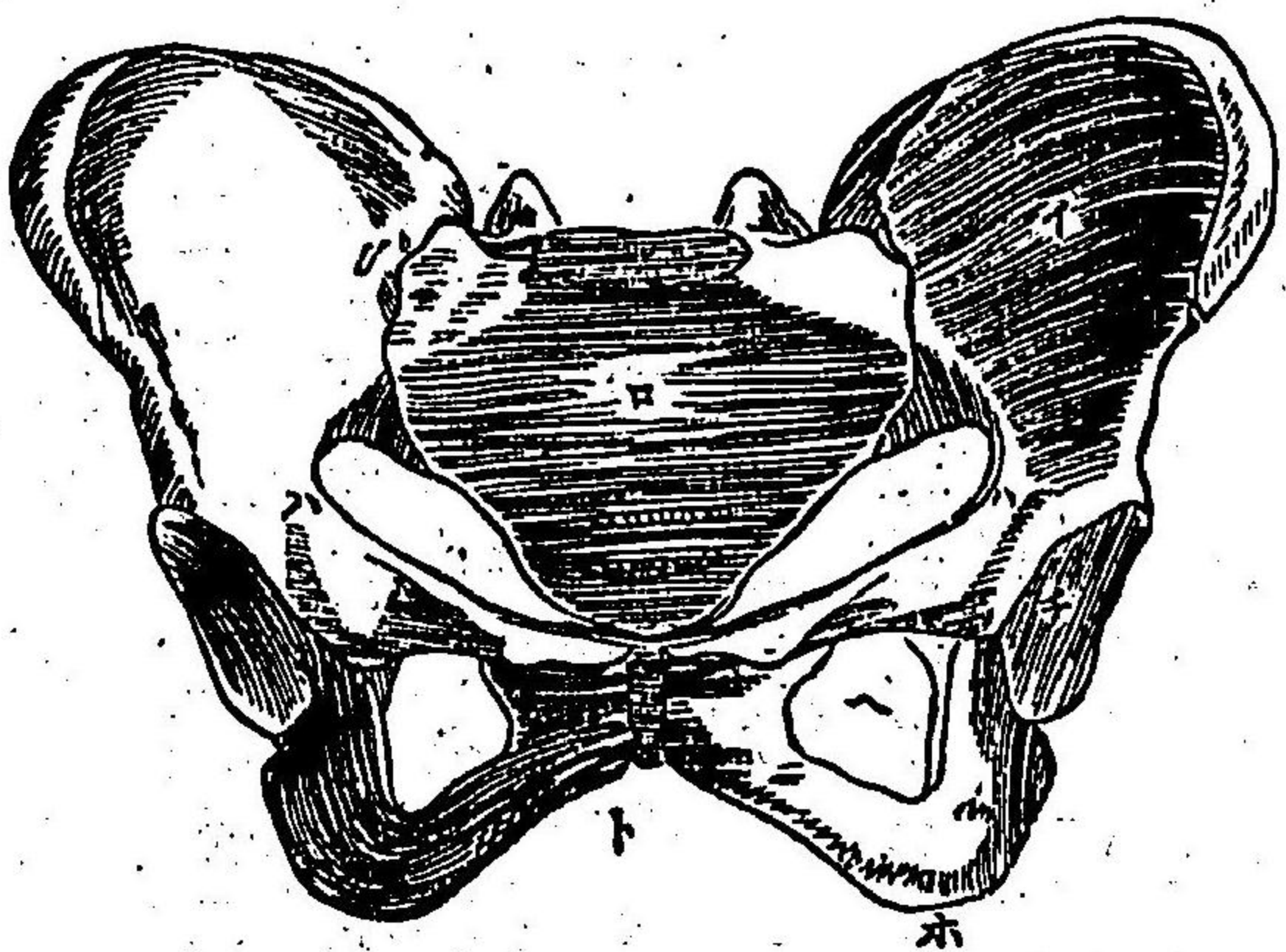


壁ハ左右ノ無名骨ヨリ成リ後壁ハ薦骨及尾骶骨ヨリ成ル

(第四圖)

婦人骨盤ノ全形ヲ示ス

- (イ) 腸骨窩
- (ロ) 薦骨前面
- (ハ) 腸耻線即骨盤縁
- (ニ) 耻骨縫合
- (ホ) 坐骨結節
- (ヘ) 鎖閉孔
- (ト) 耻骨弓
- (チ) 髌臼



○假骨盤

而ノ無名骨ノ腸耻線之ノ上下二部ニ區分ス即チ上部ヲ假骨盤ト謂ヒ下部ヲ眞骨盤ト謂フ

(假骨盤一名大骨盤) 寛大ニシテ上外方ニ擴張シ專ラ腸骨ヨリ成リ腹壁及背部ノ諸筋ヲ附ケ内臓ヲ載ス然レモ産科ニ緊要ナラサルカ故ニ精密ノ記載ヲ要セズ

○眞骨盤

(眞骨盤一名小骨盤)

以下單ニ骨盤ト呼フ 産科ニ於テ極テ緊要ナル者ニシテ之ヲ論スルニハ三部ニ分ツチ便ナリト

ス即チ入口内腔及出口是ナリ 入口一名上口或ハ殆ト心臟形ヲ具ヘ左右ハ腸耻線ヨリ成リ前部ハ耻骨楯及ヒ其棘ヨリ成リ後部ハ薦骨上端ノ前縁即チ薦骨岬ノ上縁ヨリ成ル而シテ其周圍ハ大約十三四應アリ 内ハ腔四壁ヲ有ス前壁ハ耻骨體ヨリ成リ後壁ハ薦骨及尾骶骨ヨリ成リ側壁



ハ坐骨體ヨリ成ル故ニ前壁ハ淺クシテ大約一應半、後壁ハ深クシテ大約四應半、側壁ハ大約三應半アリ 出口一名ハ

(第五圖)

骨盤ヲ縦割シテ左右ニ分チ其左半ノ内面ヲ示ス

(イ) 前上棘突起  
(ロ) 前下棘突起  
(ハ) 小薦坐鞞帶  
(ニ) 大薦坐鞞帶  
(ホ) 大薦坐孔  
(ヘ) 小薦坐孔  
(ト) 坐骨結節  
(チ) 鎖閉膜  
(リ) 耻骨縫合  
(ヌ) 腸耻隆起  
(ル) 腸耻隆起



甚ク不齊ニシテ後ニ尾骶骨アリ、兩側ニ坐骨結節アリ又三大截痕チ有ス即チ其一ハ前部ニ在リ之チ耻骨弓ト謂フ左右ノ耻骨下行枝及ヒ坐骨上行枝チ以テ成リ其二ハ所謂大薦坐截痕ニシテ薦骨ノ各側ニ位シ後ハ薦骨及尾骶骨ノ側縁ヨリ成リ上ハ腸骨ヨリ成リ前ハ坐骨體ノ後縁ヨリ成ル而シテ此截痕ハ新鮮體ニ在テハ薦坐鞞帶ノ爲ニ變シテ大薦坐孔ト成ル

○骨盤ノ差異

○男女盤骨ノ差異

婦女ノ骨盤ハ男子ノ骨盤ニ比スレハ骨質総テ非薄ニシテ其面滑澤ナリ腸骨ハ甚ク擴張スルチ以テ左右遠ク相距リ薦骨ハ短クシテ廣ク其前面ハ著ク彎入スレハ其岬ハ多ク突出セス坐骨ハ低クシテ其棘ハ短ク左右結節間ノ距



離長ク耻骨縫合モ亦低クシテ耻骨弓ハ廣ク九十度乃至百  
度ノ角ヲ成ス其他入口内腔及出口ノ諸徑線ハ皆長シトス  
故ニ之ヲ約言スレハ男子ノ骨盤ハ狹クシテ深ク女子ノ骨  
盤ハ廣クシテ淺シ

○骨盤ノ軟部

骨盤ハ前ニ膀胱及ヒ尿道ヲ有シ後ニ直腸ヲ貯ヘ中央ニ膈  
子宮、卵巢、喇叭管及廣圓韌帶ヲ藏ス其四壁ハ專ラ硬骨ヨリ  
成レヒ亦軟部アリテ之ヲ全成ス即チ鎖閉孔ハ纖維膜ヲ以  
テ掩ハレ其上部ニ一孔ヲ有シ血管及神經ヲ通シ且ツ外面  
ニハ外鎖閉筋ヲ附ケ内面ニハ内鎖閉筋及舉肛筋ヲ着ク而  
シ分娩時ニ於テハ兒頭之レニ觸レテ下行ス又後壁ニハ梨  
子筋及舉肛筋ノ一部ヲ附ケ血管及神經アリテ通過ス

○骨盤ノ平面

○骨盤ノ平面

骨盤ハ數個ノ想像平面ヲ有スル者ト假定スベシ即チ一ハ  
入口ニアリ一ハ出口ニアリ其他ハ皆内腔ニアリ 各平面  
ノ位置ハ骨盤壁ノ一部ヨリ他部ニ至ルマテ想像直線ヲ畫  
キ以テ之ヲ定ムヘシ即チ薦骨岬ヨリ耻骨縫合ノ上縁ニ至  
ル直線第六圖ハ入口ノ平面ヲ示シ薦骨中線ヨリ縫合後面  
ノ中線ニ至ル數線全圖ノ(ホ)ハ皆内腔ノ平面ヲ示シ尾  
骶骨ノ下端ヨリ縫合ノ下縁ニ至ル直線全圖ハ出口ノ平  
面ヲ示ス而シテ此諸平面ヲ前方ニ延長スレハ縫合ヲ前方ニ  
距ル一二應ノ處ニ於テ相會スルヲ次圖ニ示カ如シ即チ

○骨盤ノ傾斜

試ニ一個ノ骨盤ヲ取テ之ヲ卓上ニ置クハ尾骶骨及兩側

○骨盤ノ傾斜

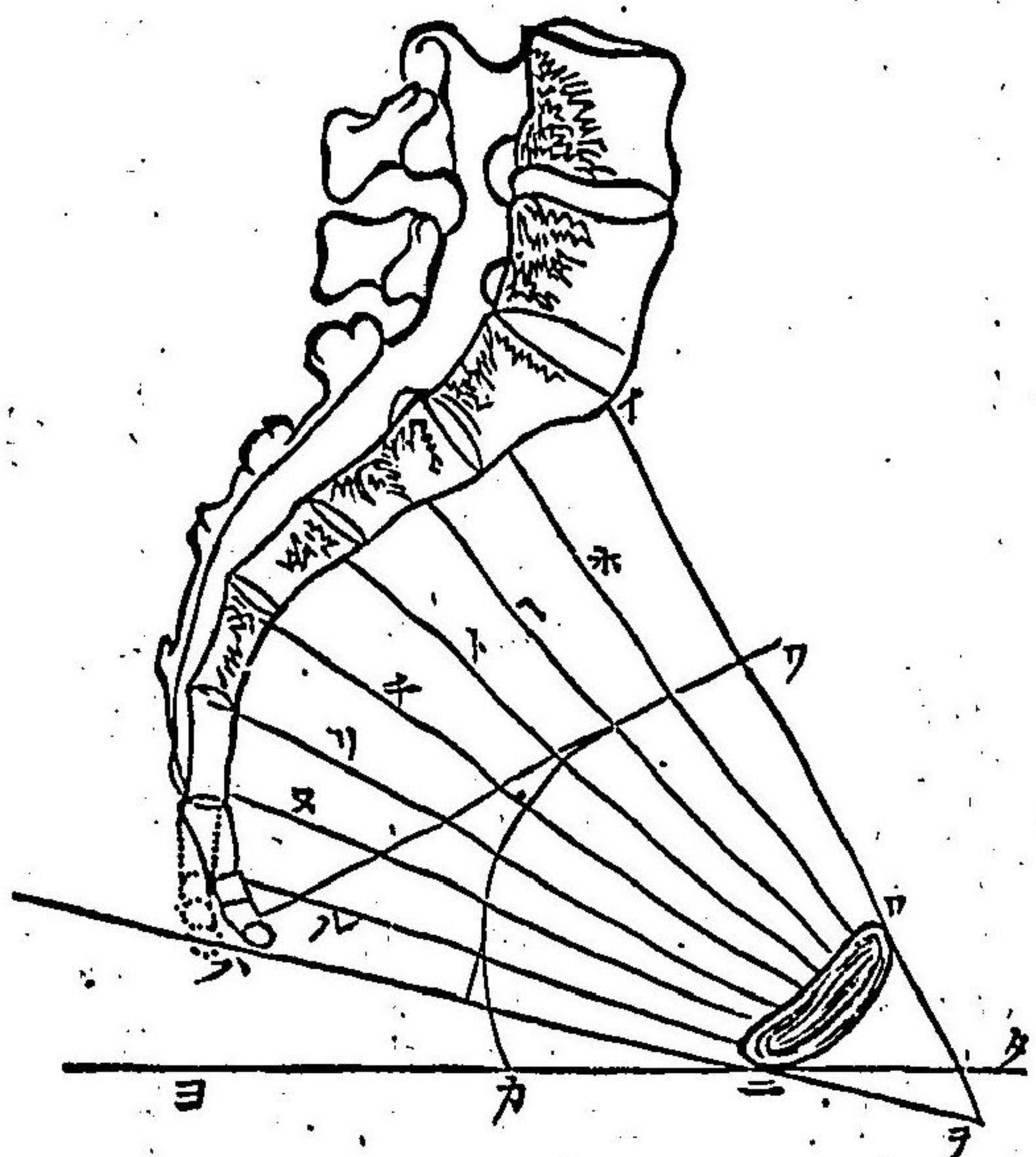


ノ坐骨結節ハ俱ニ桌面ニ接着シ入口ハ上方ニシテ少シツ  
前方ニ向フヘシ 昔時ハ之ヲ以テ自然ノ位置ト爲セリト

(第六圖)

骨盤ノ平面傾斜  
及中軸ヲ示ス

- (イ)(ロ)上口ノ平面
- (ハ)(ニ)下口ノ平面
- (ホ)(ヘ)(ト)(チ)(リ)(ヌ)
- (ル)内腔各部ノ平  
面
- (ナ)諸平面ノ耻骨  
縫合前ニ於テ  
相會スル處
- (ワ)(カ)骨盤ノ中軸
- (ヨ)(タ)水準線



雖此軌今ニ至テ其誤謬ナルヲ發覺セリ 抑婦人直立スル  
 所ハ薦骨岬ハ耻骨縫合上縁ノ水準ヨリ高キヲ三應ト四分  
 ノ三ナルカ故ニ骨盤上口ノ平面ハ水準線(第六圖)ヲ以テ大  
 約六十度ノ角ヲ作り又下口ノ平面ハ此線ヲ以テ大約十一  
 度ノ角ヲ成ス但シ尾骶骨反展シテ後下方ニ向フ所ハ其角  
 度ヲ減スルハ固ヨリ論ヲ俟タス

○骨盤中軸

往昔ハ「カルス氏環線」耻骨縫合後面ノ中央ヲ中心トシ骨盤  
 内腔ノ前後徑線ヲ二分シ其一部ヲ取  
 リ半徑線トシテ畫ノ骨盤内ヲ經過スル部ハ其中軸即チ兒  
 キタル環線ヲ云フ  
 頭經過ノ方向ヲ示ス者トナセシモ方今ニ至テ其説ノ確實  
 ナラサルヲ悟レリ何トナレハ骨盤ハ素ト不齊ノ骨管ナレ  
 ハ斯ノ如キ一個ノ環線ヲ以テ各部ノ中軸ヲ示スノ理ナク

○骨盤ノ中軸

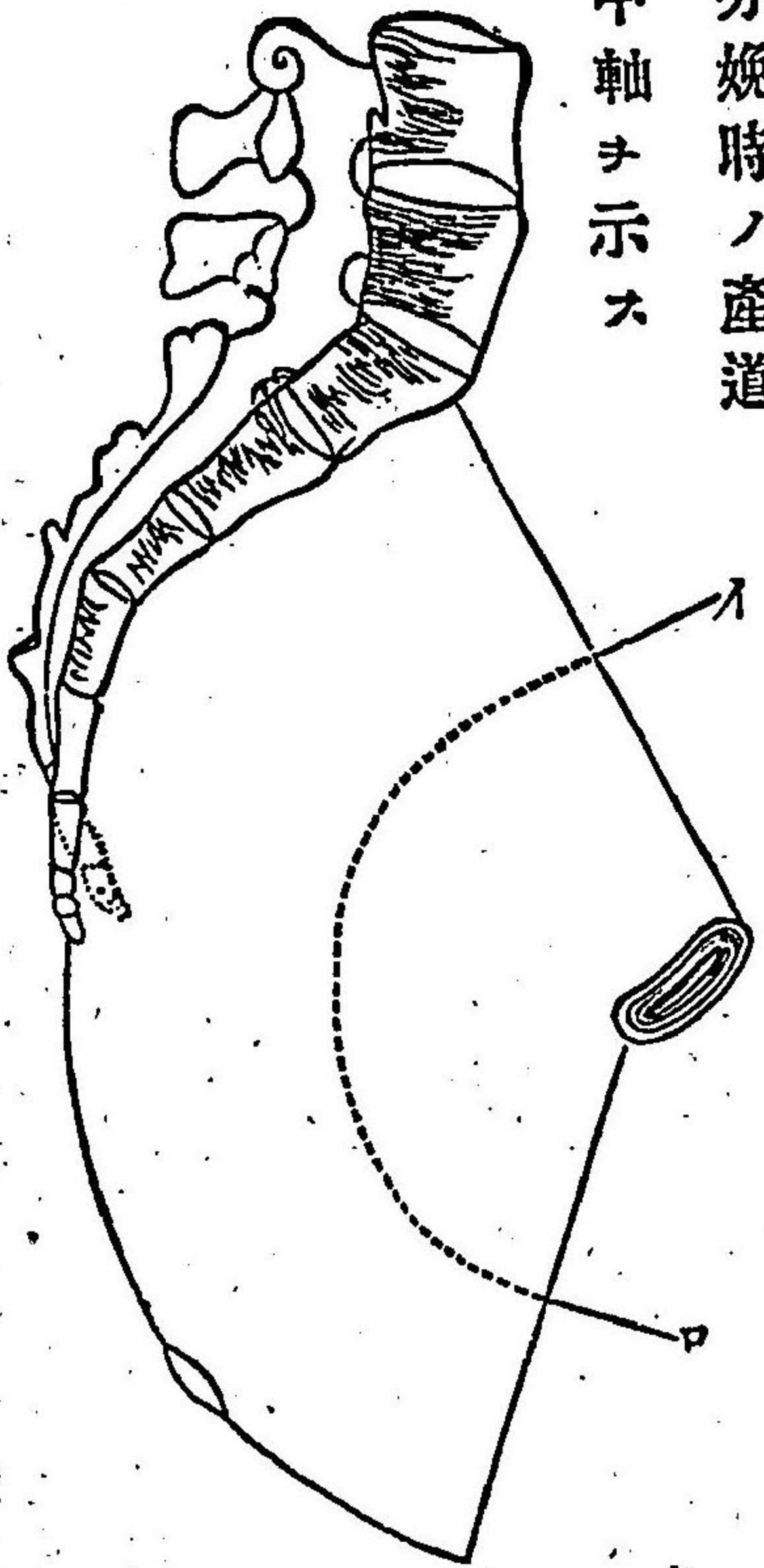


ノハナリ 抑骨盤ノ前壁ハ低クシテ稍前方ニ傾斜シ其後  
 壁ハ高クシテ其面甚ク陥没シ且ツ又前方ニ傾斜ス故ニ  
 其中軸ハ各部ニ於テ自ラ異ナラサルヲ得ス例之其入口ニ  
 在テハ下後方ニ 臍ノ少シク上部ヨリ 向ヒ出口ニ出テハ下  
 方ニ向ヒ少シク前方ニ偏スルカ如シ 薦骨岬ヨリ左右坐骨  
 骨盤各部ノ中軸ハ斯ノ如ク各部ニ於テ同シカラサルカ故  
 ニ之ヲ測知セント欲セハ先ツ入口平面ト出口平面トノ耻  
 骨縫合前部ニ於テ相會スル處(第六圖)ヨリ數線ヲ發シテ薦  
 骨前面ノ中央ニ達スベシ而シテ各線ノ縫合後面ヨリ薦骨前  
 面ニ至ル部ハ内腔ノ平面ヲ示ス者ニシテ今各平面ノ中央  
 ニ鉛直線ヲ畫シキハ則チ其部ノ中軸ヲ得ルナリ  
 若シ各部中軸ト平面トノ交叉スル點ヲ連續セルキハ一個

○兒頭下向ノ  
方向

ノ弓線ヲ得ル之ヲ骨盤ノ中軸トス(第六圖)  
 骨格ニ於ケル骨盤ノ中軸ハ以上述ルカ如クナレトモ分娩時  
 ニ於ケル兒頭經過ノ方向ハ稍之ト異ナリ蓋シ此時ニ當テ  
 ハ尾骶骨ハ後下方ニ反展シ會陰ハ甚ク擴張スルヲ以テ  
(第七圖)

分娩時ノ產道  
中軸ヲ示ス





産道ノ外口ハ全ク前方ニ向ヒ其中軸ハ擴張セル會陰ノ前線ヨリ耻骨縫合ノ下線ニ至ル直線ノ中央ヲ經過シ之レト直角ヲ爲ス者ナリ

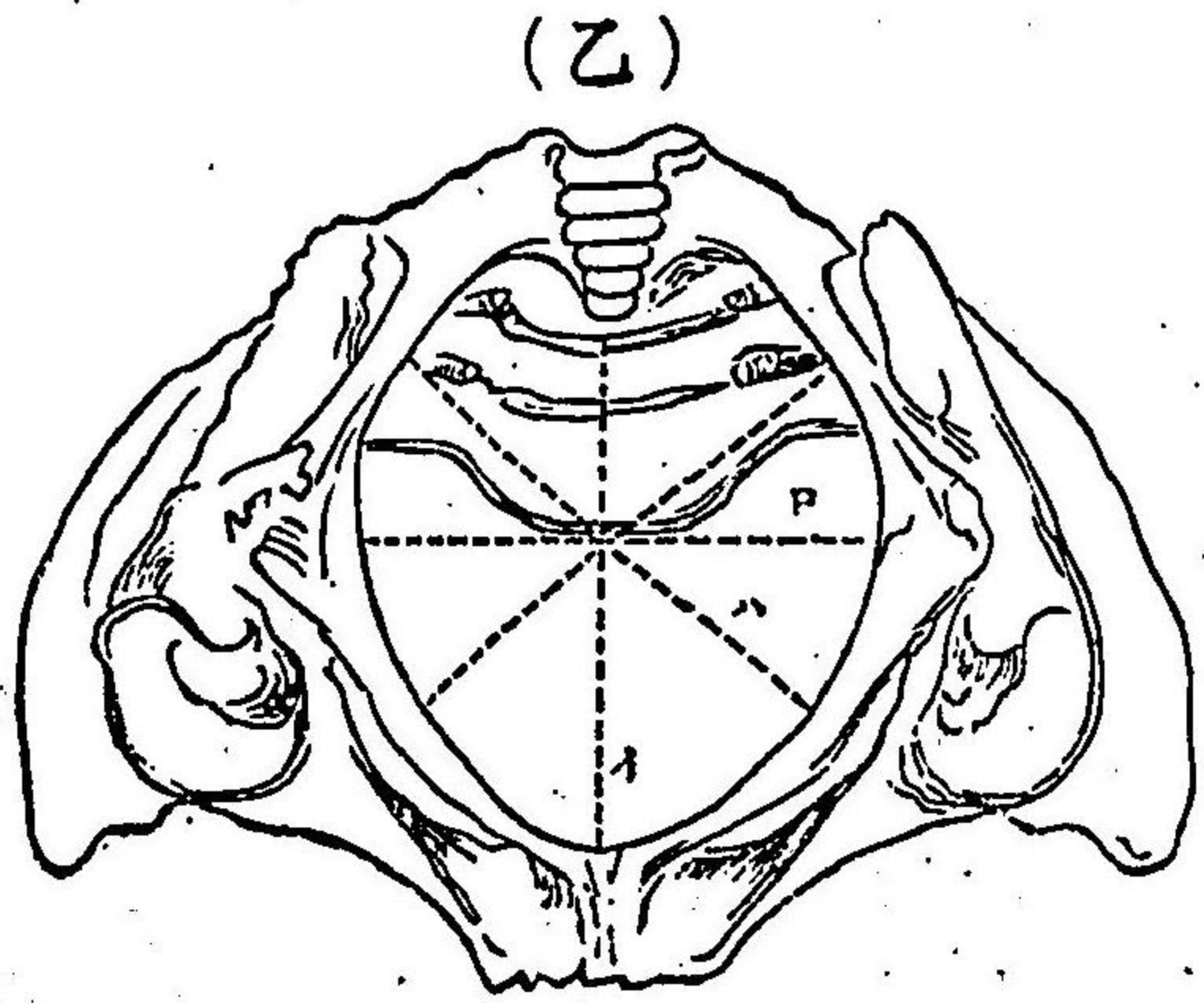
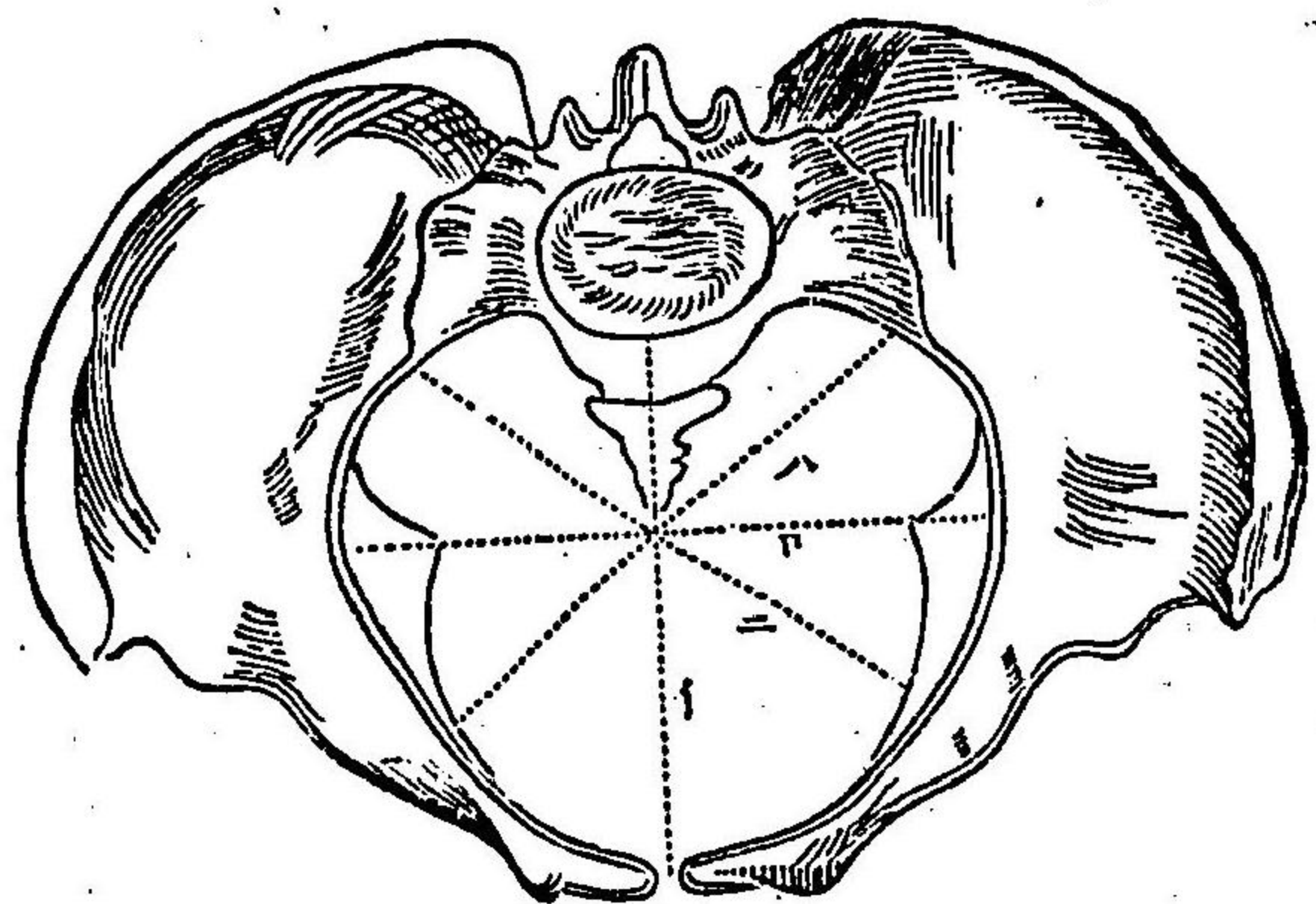
○骨盤ノ諸徑線

(入口ノ徑線) 前後徑線 第八圖ハ薦骨岬ヨリ耻骨縫合ノ上線ニ至ル大約四應ト四分ノ一 横徑線(全圖)ハ一側ノ膈耻線中央ヨリ他側ノ同點ニ至ル大約五應ト四分ノ一 斜徑線ハ左右二條アリ右斜徑線ハ右侧ノ薦腸關節ヨリ左侧ノ腸耻隆起ニ至リ(全圖)左斜徑線ハ左侧ノ薦腸關節ヨリ右侧ノ腸耻隆起ニ至ル(全圖)而シテ此二徑線ハ俱ニ大約四應ト四分ノ三アリ

(内腔ノ徑線) 前後徑線ハ耻骨縫合後面ノ中央ヨリ薦骨前

(第八圖) 骨盤ノ諸徑線ヲ示ス

(甲)ハ入口(イ)前後徑線(ロ)横徑線  
(乙)ハ出口(左)ハ斜徑線(ニ)右斜徑線





面ノ中央ニ至リ大約四應ト三分ノ二 横徑線ハ一側ノ脾  
 白底ノ對部ヨリ他側ノ同點ニ至リ大約四應ト三分ノ一  
 斜徑線ハ左右俱ニ一側ノ鎖閉孔ヨリ他側ノ薦坐截痕ノ中  
 央ニ至リ大約五應ト五分ノ一アリ  
 (出口ノ徑線) 前後徑線ハ尾骶骨下端ヨリ耻骨結合ノ下縁  
 ニ至ル大約四應但シ分娩時ニ於テハ尾骶骨ハ後下方ニ反  
 展スルカ故ニ大約一應ヲ増ス 横徑線ハ左右坐骨結節間  
 ノ距離ニシテ四應ト四分ノ一 斜徑線ハ一側ノ耻骨下行  
 枝ト坐骨上行枝トノ接合部ヨリ他側ノ大薦坐鞞帶ノ中央  
 ニ至リ左右俱ニ大約四應ト三分ノ一アリ  
 (骨盤ノ縱徑線) 上下徑線ハ前後側ノ三部ニ從テ異ナリ  
 後部即チ薦骨岬ヨリ尾骶骨ノ下端ニ至ルノ距離ハ五應乃

至六應 前部即チ耻骨結合ノ上縁ヨリ其下縁ニ至ルノ距  
 離ハ一應半乃至二應 側部即チ骨盤縁ヨリ坐骨結節ニ至  
 ルノ距離ハ三應半アリ  
 以上既ニ骨盤各部ノ徑線ヲ記載シタレハ更ニ左表ヲ掲テ  
 諸徑線ノ差異ヲシテ一目瞭然タラシメントス

骨盤各部ノ徑線ヲ示ス表

	前後徑線	横徑線	斜徑線
入口	四應ト四分ノ一	五應ト四分ノ一	四應ト四分ノ三
内腔	四應ト三分ノ二	四應ト三分ノ一	五應ト五分ノ一
出口	四應但シ分娩時ハ五應	四應ト四分ノ一	四應ト三分ノ二



○外部ノ測量

凡ソ骨盤各部ノ徑線ヲ請記スレハ分娩時ニ於ケル兒頭經過ノ方向ヲ理會スルヲ取テ難カラサルナリ若シ胎兒ノ前頭ハ右方ニ向ヒ後頭ハ左方ニ向テ横ニ上口ニ入ルキハ下降スルニ從テ先ツ前額ハ右側ノ大薦坐孔ニ向テ進ミ後頭ハ左側ノ鎖閉孔ニ向テ行ク而シテ産機尙ホ進ムキハ後頭ハ左側ノ鎖閉孔及耻骨下行枝ト坐骨上行枝トノ内面ヲ過キ終ニ耻骨弓下ニ達シ前額ハ小薦坐鞞帶ノ内面ヲ過キ薦骨ノ前面ニ移ルキ以テ兒頭ノ最長徑線ハ骨盤出口ノ前後徑線ト一致スルキ得ルナリ

(骨盤外部ノ測量) 生體骨盤ノ變形ヲ檢察スルニ其外部ヲ測量シテ内狀ヲ推知スルコトアリ例之外前後徑線ヨリ三應ヲ減スレハ零ホ内前後徑線ヲ示スカ如シ此法固ヨリ信據

スルニ足ラスト雖モ亦檢斷ノ一助ト爲ルベケレハ左ニ一  
二ノ要點ヲ示ス可シ

- (一) 耻骨縫合前面ト薦骨棘狀突起トノ距離七應乃至八應
- (二) 左右腸骨楯ノ距離ハ十三應乃至十六應
- (三) 左右前上棘突起ノ距離ハ十應乃至十二應
- (四) 一側ノ大轉子ト他側ノ薦腸關節トノ距離ハ大約九應

○第二章

婦人生殖器

○婦人生殖器

婦人生殖器ハ之ヲ二部ニ區分ス曰ク外生殖器曰ク内生殖器是ナリ



○外生殖器

〔甲〕外生殖器

外生殖器ハ處女膜ノ前ニ存スル諸器ヲ總稱ニシテ陰阜大陰唇小陰唇陰核前庭處女膜及ミルヲ樹櫟肉皆之ニ屬ス尿道及會陰ハ其實生殖器ニ非サレトモ産科ニ緊要ナルカ故ニ假ニ其中ニ算入シテ之ヲ論シ乳腺ハ外生殖器ニ屬スレトモ記載ノ便ニ從ヒ之ヲ本章ノ末條ニ讓ル

○陰阜

陰阜ハ耻骨總合ノ前ニ位スル隆起部ニシテ上ハ腹壁ニ連リ下ハ大陰唇ニ移リ左右ハ鼠蹊ニ達ス其質ハ蜂窩織ヨリ成リ多量ノ脂肪ヲ含ミ其皮膚ハ脂腺ニ富ミ婚期ニ至レハ陰毛ヲ生ス

○大陰唇

○陰阜



欠

MISSING



ナ稍鶏冠ニ類シ長サ大約一應半 上端ハ分岐シテ内外二  
 脚トナル 内脚ハ陰核ノ下縁ニ連ル之ヲ陰核繫帶ト云フ  
 外脚ハ陰脚ノ上部ニ於テ對側ノ同脚ト相合シテ陰核ヲ  
 蓋フ之ヲ陰核包皮ト云フ 下端ハ大陰唇内面ノ粘膜中ニ  
 消滅ス 小陰唇ハ蜂窩織ヲ有シ血管ニ富ムト雖モ脂肪ヲ  
 含マス

○陰核

結節狀ノ小體ニシテ陰裂ノ前端ノ内側ニ位シ其形ナ小ナ  
 リト雖モ二個ノ空洞體二條ノ脚一個ノ龜頭一條ノ繫鞞帶  
 及二條ノ勃張筋ヨリ成リ其構造能ク陰莖ニ類ス唯尿道及  
 海綿體ヲ有セサルヲ異ナリトスルノミ 陰核ハ知覺最モ  
 鋭敏ニシテ色情發動スルキハ勃興スルヲ猶ホ陰莖ニ於ル

○陰核



カ如シ

○前庭

左右小陰唇ノ間ニ存スル三角面ニシテ尖端ハ前方ニ向ヒ陰核ハ此部ニ位ス基底ハ後方ニ向ヒ膣ノ上壁ニ連ル此面ノ殆ント中央方ニ偏ス下ニ尿道口アリ其周圍少シク隆起シテ紅色ヲ呈ス

○處女膜

粘膜ノ皺襞ニシテ膣口ニアリ通常半月形ヲ呈シ凹縁ハ上ニ耻骨縫合ニ向テ穿孔ヲ有シ凸縁ハ膣壁ニ連ル此膜ハ種々ノ畸形ヲ呈スルコトアリ即チ圓形ニシテ中央ニ一孔ヲ穿テ或ハ數孔ヲ有シテ篩狀ヲ呈シ或ハ全ク膣孔ヲ閉鎖シテ經路ヲ絶テ或ハ全ク缺如スルコトアリ又時トシテ其質

○處女膜

甚タ肥厚強韌ニシテ切開ヲ要スルコトアリ此膜一タヒ破裂スレハ収縮シテ數個ノ圓形或ハ三角形ノ皺襞トナル之レヲ「ミルチ」樹様肉ト謂フ一説ニ據レハ此「ミルチ」樹様肉ハ敢テ處女膜ト關係ナキ者ナリト云フ

○尿道口

前庭ノ中央ヨリ稍後方ニ偏シテ位シ陰核ヲ後下方ニ距ルコト大約一應其周縁ハ粘膜少シク隆起シテ紅色ヲ呈ス尿道ハ長サ大約一應半ニシテ上後方ニ向テ進ミ膀胱ニ達ス

○會陰

會陰ハ大陰唇ノ後端合ヨリ肛門ニ至ル間ノ軟部ニシテ其長サ一應乃至一應半專ラ蜂窠織ヲ以テ成リ一説ニ據レハ黄色纖維ニ富ムト頗ル彈性ヲ有ス故ニ分娩時ニ於テハ擴張シテ四應乃

○會陰

○尿道口



至五應ニ及フ者トス

○外生殖器ノ諸腺

○外生殖器ノ諸腺即チ脂腺、粘液腺及バルトリニ

外生殖器ハ脂腺及粘液腺ニ富ム。脂腺ハ陰阜、大小陰唇及陰核ニ多シ、殊ニ小陰唇ハ此腺ニ富ミ、常ニ脂油ヲ分泌シテ此部ヲ濡シ以テ癒着ヲ防キ知覺ヲ助ケ尿ノ刺戟ヲ禦シ、粘液腺ハ處々ニ散在スト、雖モ前庭尿道口ノ近部及陰口ノ兩側ニ於テハ相集テ群ヲナス。其他緊要ナル一對ノ腺アリ之レチ「バルトリニ」氏腺ト云フ、陰口各側ノ淺筋膜下ニ在リテ其功用ハ男子ノ「コウペル」氏腺ニ類シ其結構ハ唾腺ノ如クニシテ各腺一條ノ總管ヲ具ヘ處女膜ノ外小陰唇ノ内面ニ開口ス。此部ニ小紅點アリ此腺ハ婚期ニ至レハ甚シク發生シ交媾及分娩ノ時ニ當テ其作用大ニ亢進シ粘滑液

ヲ迸出シテ以テ此部ヲ滋潤ス

(乙) 内生殖器

○内生殖器

内生殖器ハ處女膜ノ内ニ位スル諸器ノ總稱ニシテ、陰、子宮、卵巢、喇叭管、廣韌帶及圓韌帶之レニ屬ス

○陰

○陰

陰ハ一大膜管ニシテ處女膜ヨリ子宮頸ニ至ル其形狀少ク前後ニ扁平ニシテ稍前方ニ彎曲ス故ニ上端ハ上方ニ向ヒ下端ハ下前方ニ向フ。前壁ハ厚クシテ短ク其長サ大約四應アリ蜂窠織ヲ以テ尿道及膀胱頸ニ密接ス。後壁ハ長クシテ五應乃至六應アリ專ラ直腸ニ連接スレモ其上部ト直腸トノ間ニ腹膜ノ下降反展シテ囊狀ヲ成ス者アリ之レチ「ドイグラス」氏窩ト稱ス。側壁ハ舉肛筋ノ一部ト關係ス



下端ハ全管中最モ狹ク括約筋ニ由テ圍擁セラレ  
甚タ廣クシテ子宮頸ヲ脚接ス子宮頸ト前壁トノ間ヲ前穹  
窿ト謂ヒ子宮頸ト後壁トノ間ヲ後穹窿ト謂フ甲ハ狹クシ  
テ淺ク乙ハ深クシテ廣ク囊底狀ヲ呈シ其後ニ「ドーグラス」  
氏窩アリ

○腔ノ造構

腔ハ三枚ノ膜ヨリ成ル 外層ハ纖維膜ニシテ許多ノ黃色  
纖維ヲ含ム 中層ハ滑平筋纖維ヨリ成リ内外二層ニ分ル  
而シテ内層筋纖維ハ横走シ外層ハ縱走ス 内層ハ粘膜ニシ  
テ扁平上皮ヲ被ヒ且ツ許多ノ粘液腺ヲ有シ交媾時妊娠中  
及分娩時ハ多量ノ粘液ヲ分泌シテ腔内ヲ滑利ナラシム  
滋潤ナルハ妊娠ノ一徵ナリ蓋シテ妊娠 又粘膜ハ前後二壁ノ  
中ハ此腺ノ分泌増加スルカ故ナリ 中線ニ於テ縱隆線ヲ呈ス之ヲ腔柱ト云フ許多ノ横襞之ヨ



欠

MISSING

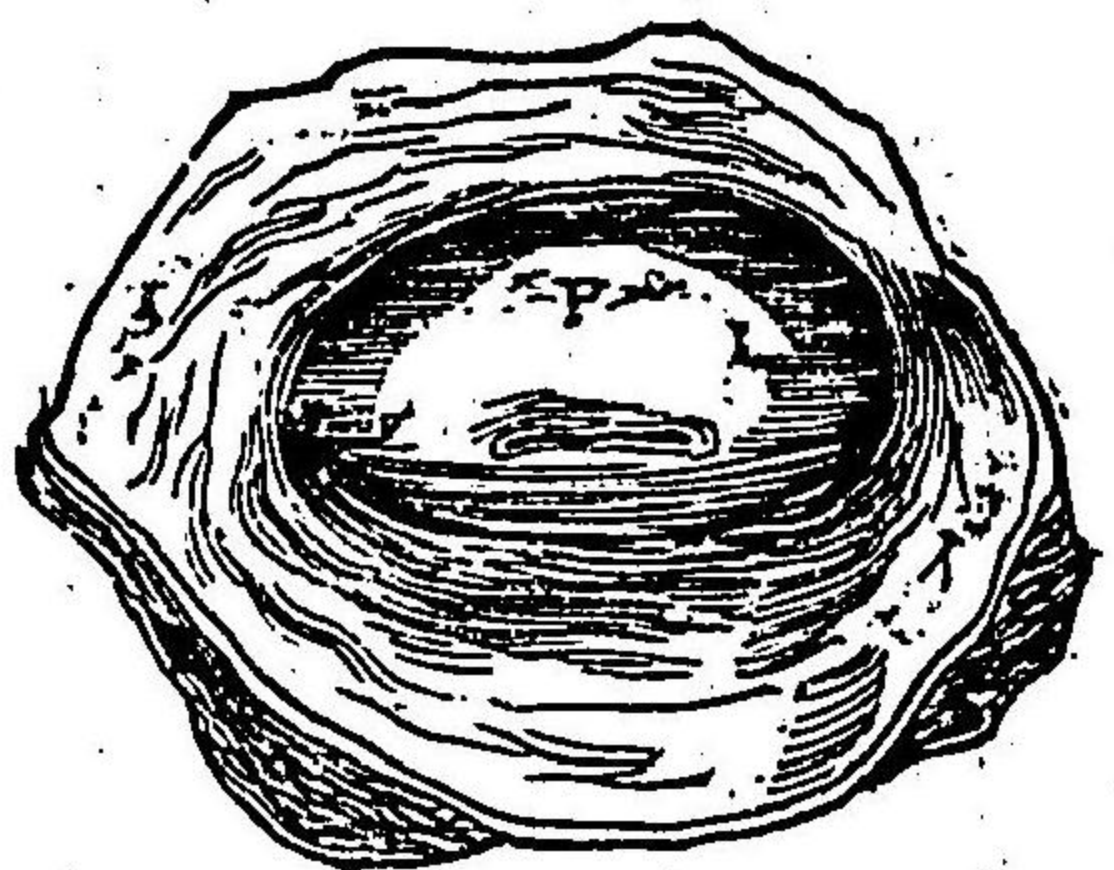


二在リテ前ハ膀胱ニ接シ後ハ直腸ニ觸レ上ハ小腸ヲ載セ下  
ハ腔内ニ突出シ兩側ハ喇叭管ヲ生シ且ツ卵巢ニ隣ス加之  
固有ノ韌帶ヲ有シテ其位置ヲ維持スト雖ニ隣接諸器ノ盈  
虚弛張ニ從テ能ク移動スル者ナリ 子宮ハ未産婦ニ在テ  
ハ其形狀扁平ナル無花葉ヲ倒懸スルカ如ク上ハ大ニシテ  
下ハ小ナリ而シテ大ナル部ヲ體ト謂ヒ小ナル部ヲ頸ト云フ  
體ハ頸部ヨリ稍長ク其上端ハ隆凸ス之ヲ底部ト謂ヒ上前  
方ニ向フ 頸ハ體ヨリ稍短ク下後方ニ向ヒ上下二部ニ區  
別ス上部ハ粘膜ヲ以テ被ハル、カ故ニ腔ヨリ見ル可ラス  
下部ハ圓錐狀ヲ成シ腔底ニ突出スルヲ以テ腔部ト稱ス其  
下端ニ一個ノ横孔アリ之ヲ子宮外口第十一圖ト謂フ書中  
子宮外口ト呼フ者前後二唇ヲ有ス前唇ハ長ク後唇ハ短シ而  
ハ此外口ヲ指ス



(第十一圖)

未産婦ノ子宮外口ヲ示ス



(イ) 膈壁  
(ロ) 子宮腔部

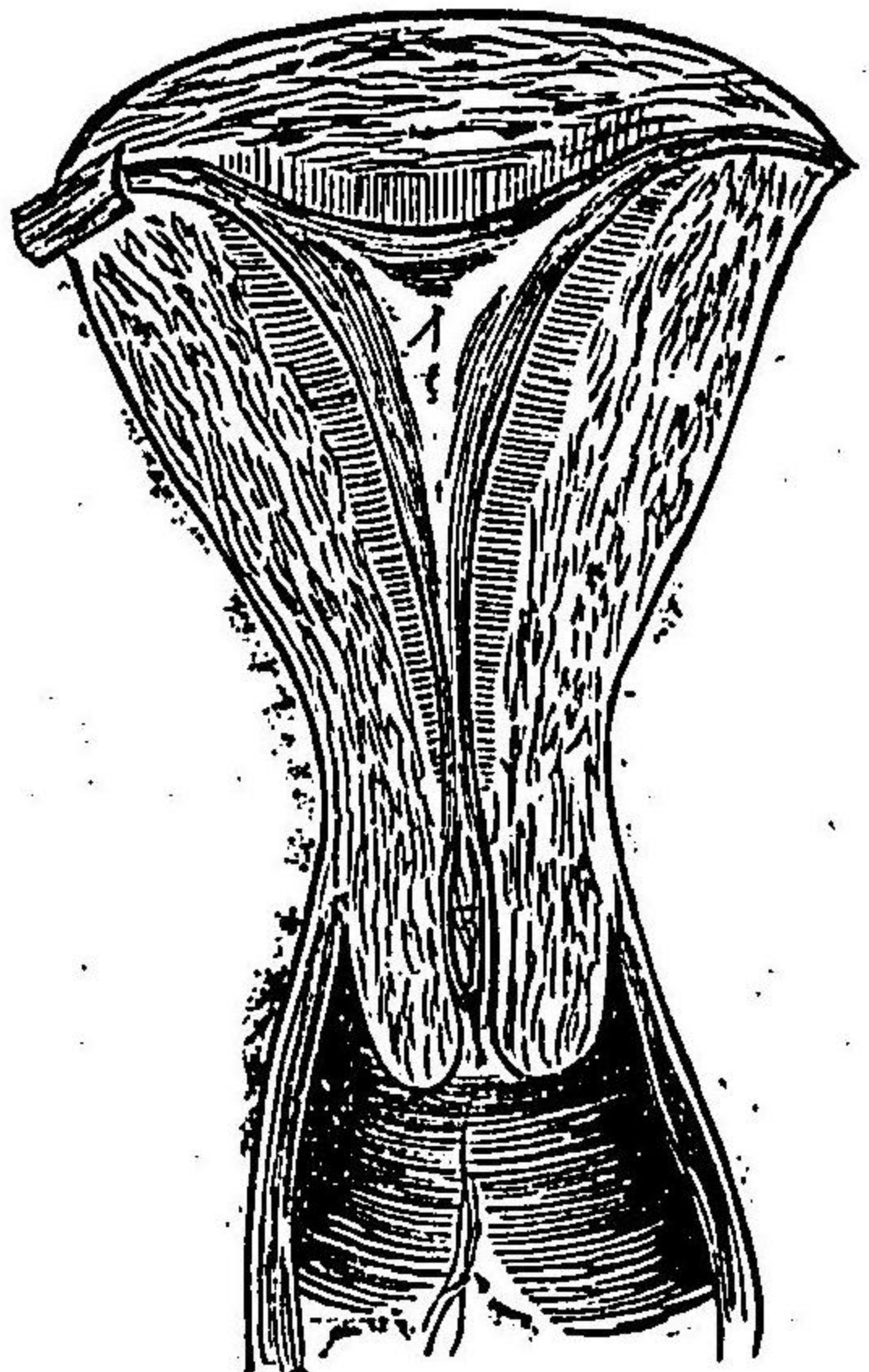
其面ハ俱ニ滑澤ナリ然レド既産婦ニ在テハ其外口大ニシテ指頭ヲ容ル可ク且ツ兩唇ニ罅裂アリ爲ニ甚タ不齊ヲ呈ス 子宮ノ重サハ大約十二錢 其長サ大約三應 其厚サ大約半應 前後二壁ノ厚サヲ合スレハ一應

○子宮内腔

其幅ハ大約二應アリ  
子宮内腔ハ通常少シク前方ニ彎曲スル者トス然レド「ヒ」氏ハ之ヲ正直ナル者トセリ 此内腔ハ上下二部ニ分ル上部ヲ體腔ト云ヒ下部ヲ頸管ト謂フ二部相連ル處ハ最モ

(第十二圖)

子宮ヲ縱割シテ前後ニ分チ其内腔ヲ示ス



(イ) 體腔  
(ロ) 頸管  
(ハ) 腔

アリテ頸管ニ通シニハ基底ノ兩側ニ在リテ喇叭管ニ通ス内面ハ平滑ニシテ無數ノ暗紅點ヲ見ハス即チ子宮腺口ナリ頸管ハ紡錘狀ヲ呈シ前後ニ壓平セラレ上下兩端ハ狭ク中

狭ク之ヲ内口ト謂ヒ頸管ノ腔内ニ通スル部ヲ外口ト謂フ 體腔ハ三角形ニシテ前後ニ扁平ナリ而シテ基底ハ上方ニ向ヒ尖端ハ下方ニ向フ腔内ニ三孔アリ一ハ尖端ニ

○頸管



部ハ廣シ而シテ上端ハ内口ニ由テ體腔ニ通シテ下端ハ外口ニ由テ腔内ニ通ス 前後壁ハ各其内面ノ中線ニ縱隆起線ヲ有シ其各側ヨリ六條乃至九條ノ橫隆起線ヲ生ス此線ハ外上方ニ向テ走り更ニ分岐スルヲ以テ其狀恰モ樹幹ヨリ枝別ノ生スルカ如シ故ニ名ケテ活樹ト云フ 頸管ノ粘膜ハ甚々粘液腺ニ富ミ且ツ間々胞狀ノ小體ヲ有スルコアリ之ヲ「ナボサ」氏卵ト云フ蓋シ粘液腺口ノ閉塞シテ其下部ノ膨脹スル者ニ係ル

○子宮中軸

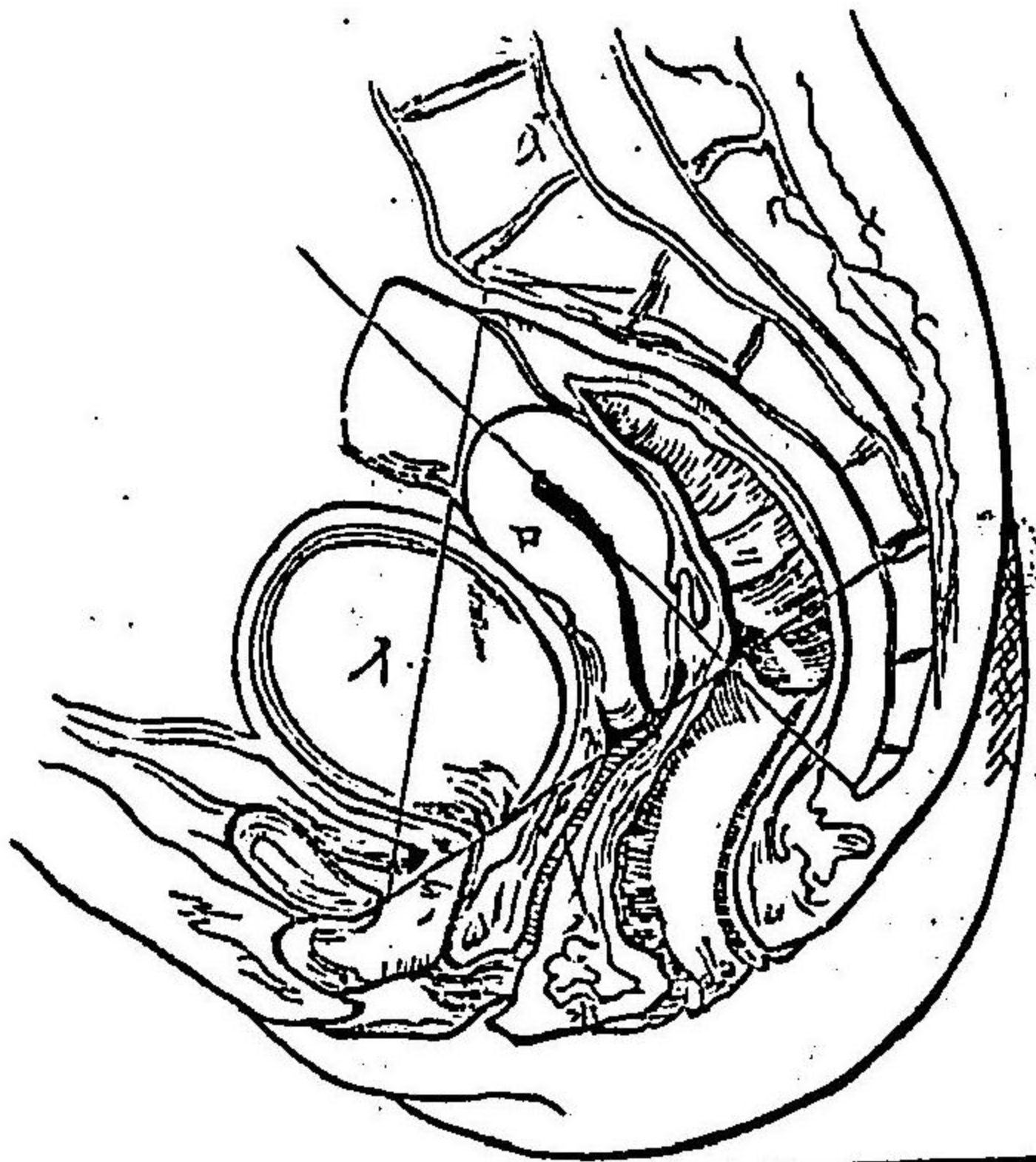
子宮ノ中軸ハ通常骨盤入口ノ中軸ト一致スル者トス故ニ臍ノ少シク上部ヨリ尾骶骨ノ下端ニ至ル直線ハ子宮ノ中軸ヲ示スナリ然レトモ膀胱及直腸ノ盈虚ニ從テ多少其方向ヲ變ヒサルヲ得ス 「コルラウシ」氏及「フアル」氏ノ說ニ據

(第十三圖)

骨盤内諸器ノ關係特ニ

子宮ノ常位ヲ示ス

- (イ)膀胱
- (ロ)子宮
- (ハ)膈
- (ニ)直腸
- (ホ)會陰



レハ膀胱及直腸俱ニ適宜ニ充張スルルハ子宮底ハ上前方ニ向ヒ其頸ハ下方ニ向ヒ少シク後方ニ傾ク而シテ耻骨縫合ノ下縁ヨリ薦骨岬ニ至ルノ直線ハ子宮底ニ觸レ又同點ヨ



○子宮構造

リ薦骨第四片ノ下端ニ至ル直線ハ子宮外口ニ接スル者ト  
 ス  
 子宮ハ外中内ノ三層ヨリ成ル 外層ハ腹膜ノ一部ニシテ  
 子宮ノ前面底部及後面ノ上三分ノ二ヲ被ヒ側部ニ於テハ  
 前後ノ二板相合シテ廣韌帶ヲ形成シ骨盤ノ側壁ニ連ル  
 中層ハ甚々厚クシテ專ラ滑平筋纖維ヨリ成リ僅ニ蜂窠織  
 ナ混ス此層ハ三枚ニ區別シ得ヘシ外層ハ薄クシテ縱横二  
 種ノ纖維ヨリ成リ子宮ノ表面ヲ被ヒ其纖維ハ廣圓二韌帶  
 卵巢韌帶及喇叭管ニ達ス中層ハ最モ厚ク其纖維ハ諸方ニ  
 走リテ相交錯シ且ツ血管ヲ圍繞ス内層ハ輪狀纖維ヨリ成  
 リ喇叭管ノ周邊ヲ圍繞シ體部及頸部ヲ環行ス 内層ハ厚  
 キ粘膜ノ一ヲ領スト云フニシテ粘膜下組織ヲ有セス直チ

○子宮腺

ニ中層ニ密着シ内面ニ茸毛上皮ヲ被フ但シ頸管ノ粘膜ハ  
 而シ此粘膜ハ專ラ無數ノ細管即チ子宮腺ノ集積シテ成ル  
 者トス

子宮腺ハ細管ニシテ頗ル紆曲シ内端ハ粘膜面ニ開口シ外  
 端ハ盲狀ヲ成シテ中層ニ達シ内面ニハ圓柱狀上皮ヲ被フ  
 此腺ノ横徑ハ二百五十分應ノ一乃至五百分應ノ一ナレド  
 其長ハ未タ詳ナラス何トナレハ單腺ヲ分離スルヲ甚々難  
 ク且ツ紆曲スルカ故ニ之ヲ細檢スルヲ能ハサレハナリ  
 此線ハ妊娠中及月經時ニハ太々肥大スル者トス

○子宮血管

子宮ハ血液ヲ二源ヨリ受ク即チ子宮動脈及卵巢動脈是ナ  
 リ 子宮動脈ハ内腸骨動脈ノ分枝ニシテ廣韌帶ノ層間ヲ  
 過キ子宮頸ニ達シ先ツ一枝ヲ分テ膾部ニ輸リ本幹ハ體側



ニ沿テ紆曲上行シ其末端ハ卵巢動脈ト吻接ス。此脈ハ體傍ニ於テ十二枝乃至十八枝ヲ生ス是レ皆子宮壁ニ入り彎曲シテ螺旋狀ヲ爲シ頻ニ細枝ヲ發シテ頻ニ吻接シ末枝ハ粘膜ニ達シテ子宮腺間ヲ過キ膜面ニ至リ網狀ヲ爲シテ腺口ヲ圍繞ス。卵巢動脈ハ腹大動脈ノ分枝ニシテ下リテ廣韌帶ノ層間ニ入り紆曲彎行シテ卵巢ニ近キ之ニ小枝ヲ分與シ尙ホ進テ子宮ニ達シ子宮動脈ト吻接ス。以上ニ動脈ノ廣韌帶層間ニ於テ紆曲進行シ且ツ其分枝ノ子宮壁中ニ於テ螺旋狀ヲ呈スル者ハ妊娠中子宮ノ増大スルニ當テ其緊張ヲ防キ口徑ヲ減セシメサル自然ノ預備ニ出ル者ノ如シ。子宮靜脈ハ著大ニシテ其數多シ子宮壁中ニ在テハ頻ニ吻接シ且ツ妊娠中ハ擴張シテ所謂靜脈竇ヲ成ス既ニ子

○子宮神經

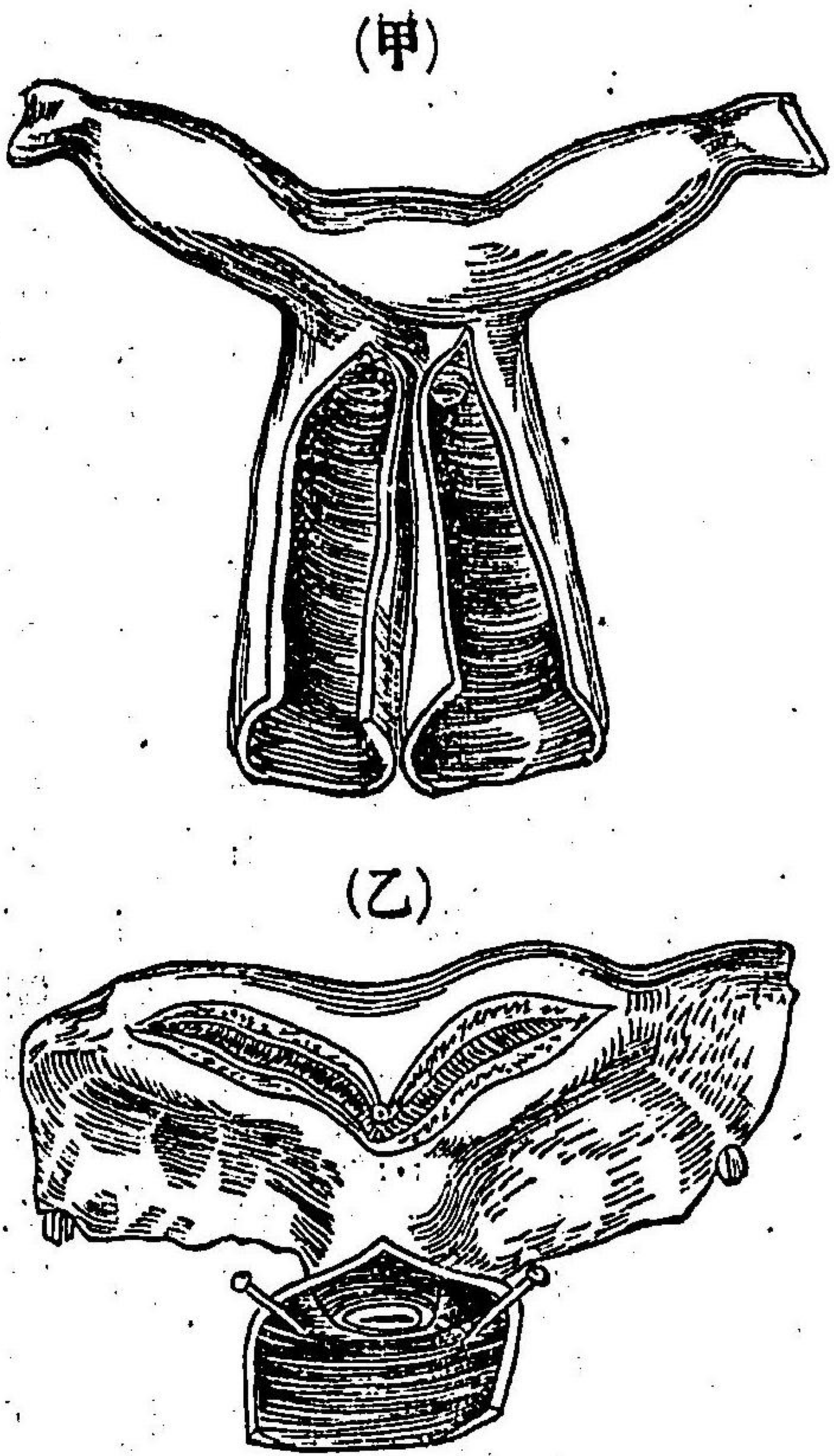
宮ヲ出レハ其傍ニ於テ相集合シテ靜脈叢ヲ成シ遂ニ湊合シテ二條ノ靜脈幹ト爲ル即チ子宮靜脈及卵巢靜脈是ナリ。子宮ハ許多ノ水脈ヲ有シ妊娠中ハ殊ニ著明ナリトス。子宮神經ハ專ラ交感神經ニ係ル然レモ一説ニ據レハ薦骨神經ノ枝別亦之ニ分布スト云ヘリ頸部ハ最モ神經ニ乏シ故ニ知覺甚ク遲鈍ナリ一説ニ曰ク膈部ハ絶テ神經ヲ有セズト此説果シテ真ナルヤ否ヤ未ク詳ナラス。生來子宮ナキ者アリ或ハ極メテ細小ナル者アリ或ハ畸形ヲ存スル者アリ前ノ二症ニ於テハ膈及喇叭管ハ全備スルコアリ或ハ唯痕迹ノミヲ存スルコアリ然レモ卵巢ニハ異狀ナキヲ常トス。子宮ノ畸形ハ種々一ナラス或ハ一角ハ充分ニ發成シ一角ハ全ク缺如スル者アリ或ハ双膈及双子

○子宮ノ畸形



宮チ有スル者アリ或ハ子宮體分岐シテ二枝トナリ隨テ二腔チ有シ頸管及腔ハ單一ナル者アリ或ハ子宮内腔ニ縱隔  
(第十四圖) 子宮ノ畸形ヲ示ス

(甲)ハ双腔双子宮ヲ示ス  
(乙)ハ子宮ノ一頸管ニ體腔チ有スル者ヲ示ス



○子宮靱帶

アリテ左右二室ニ分ル、者アリ而シテ此縱隔ハ延テ腔内ニ及フコアリ或ハ頸管ノミニ局シテ體腔ニ之ナキコアリ時トシテハ生後體腔ノ前後壁癒合スルコアリ是レ殊ニ老人ニ多シトス蓋シ之ヲ以テ先天ノ畸形ト混同スベカラス子宮ハ四對ノ靱帶チ有ス曰ク後靱帶曰ク前靱帶曰ク廣靱帶曰ク圓靱帶是ナリ 前靱帶一名膀胱及後靱帶一名子宮ハ俱ニ腹膜ノ小襞ニシテ各々二條アリ甲ハ膀胱後面ノ下部ヨリ起リ子宮前面ノ下際ニ達シ乙ハ子宮後面ノ下部ヨリ起リ直腸ニ連ル乃チ「ド」グラス「氏」窩底ノ側界チナス廣靱帶ハ子宮ノ前後二面チ被覆スル腹膜ノ子宮各側ニ於テ相合シ一廣膜トナリ骨盤ノ外壁ニ達スル者ニシテ其層間ニハ卵巢喇叭管圓靱帶血脈神經及蜂窩織チ含ミ且ツ筋纖維チ



有ス圓韌帶ハ纖維織ヲ以テ成リ索狀ヲ呈シ長サ大約五應  
ニシテ子宮上角ニ於テ喇叭管ノ前下部ヨリ起リ外前方ニ  
走テ腹壁ニ達シ鼠蹊管ヲ過キ耻骨縫合ノ前面ニ連ル

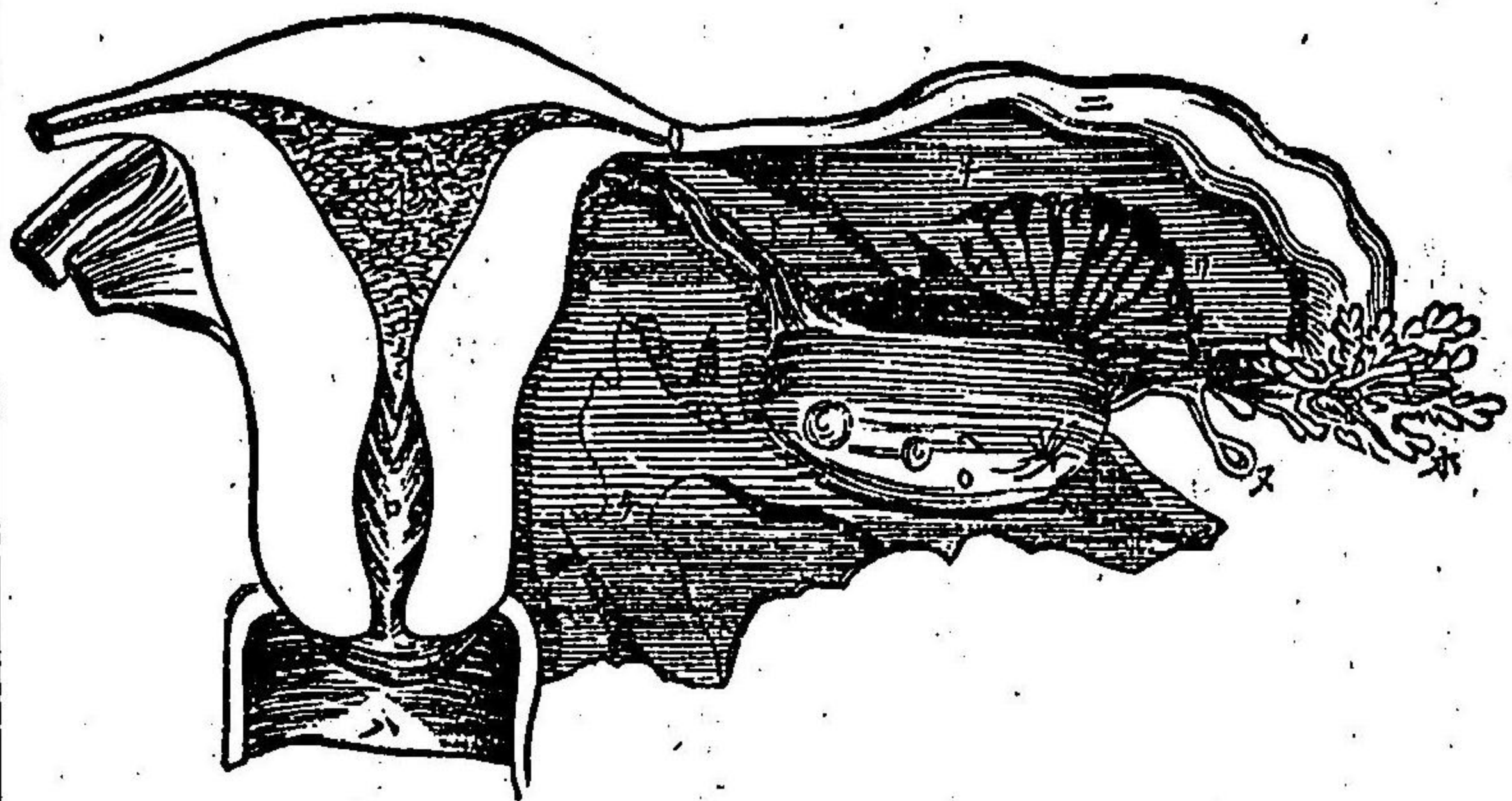
○喇叭管

○喇叭管  
喇叭管一名卵管ハ二個ノ膜管ニシテ横ニ子宮底ノ外側ニ  
着キ其長サ三四應内端ハ小角ヲ以テ子宮體腔ノ上角ニ通  
シ其末端ハ漸ク擴大シテ喇叭狀ヲ呈シ腹膜腔内ニ通シ其  
周縁ハ分裂シテ數條ト爲ル之ヲ剪線ト云フ而シ其中一條  
ハ卵巢ノ外端ニ連ナレモ他ハ皆游離ス 此管ハ内外二層  
ノ筋纖維 内層ハ横纖維ヨリ成リヨリ成リ外面ハ腹膜ヲ以  
テ被ハレ内面ハ粘膜炎ヲ布シ但シ粘膜炎ハ茸毛上皮ヲ具ヘ且  
ツ數條ノ縱裂ヲ有ス

(第十五圖)

子宮ノ後壁ヲ割去シ  
テ其内腔ヲ露出シ且  
ツ子宮、喇叭管及卵巢  
ノ關係ヲ示ス

- (イ) 子宮體腔
- (ロ) 全頸管
- (ハ) 腔ノ上部
- (ニ) 喇叭管
- (ホ) 全剪線
- (ヘ) 卵巢
- (ト) 卵巢韌帶
- (チ) 廣韌帶
- (リ) 副卵巢
- (ヌ) モルガグニ氏胞





○卵巢

○卵巢

卵巢ハ左右二個アリ俱ニ廣韌帶ノ層間ニ在リテ其後面ヨリ突出シ子宮ヲ距ルコト一應乃至一應半ナレトハ兩器ノ間ニ一條ノ纖維索アリ之ヲ卵巢韌帶ト謂フ卵巢ハ卵形ヲ呈シ少シク上下ニ扁平ニシテ長サ一應半幅四分應ノ三厚サ半應重サハ大約二錢 前縁ニ小横裂アリ血管及神經之レヨリ出入ス 後縁ハ游離シテ腹膜腔内ニ突出ス 内端ハ稍狭ク卵巢韌帶之ヨリ生ス 外端ハ圓ク喇叭管剪糸ノ一條ヲ着ク 童女ノ卵巢ハ其面滑平ナレトハ婚期以後ハ漸ク粗糙トナル是レ「グラーフ」氏胞破綻シテ癥痕ヲ殘スニ因ルホナリ

○卵巢構造

卵巢ハ專ラ蜂窠織ヨリ成リ許多ノ小胞ヲ含ミ纖維膜之ヲ

○グラーフ氏胞

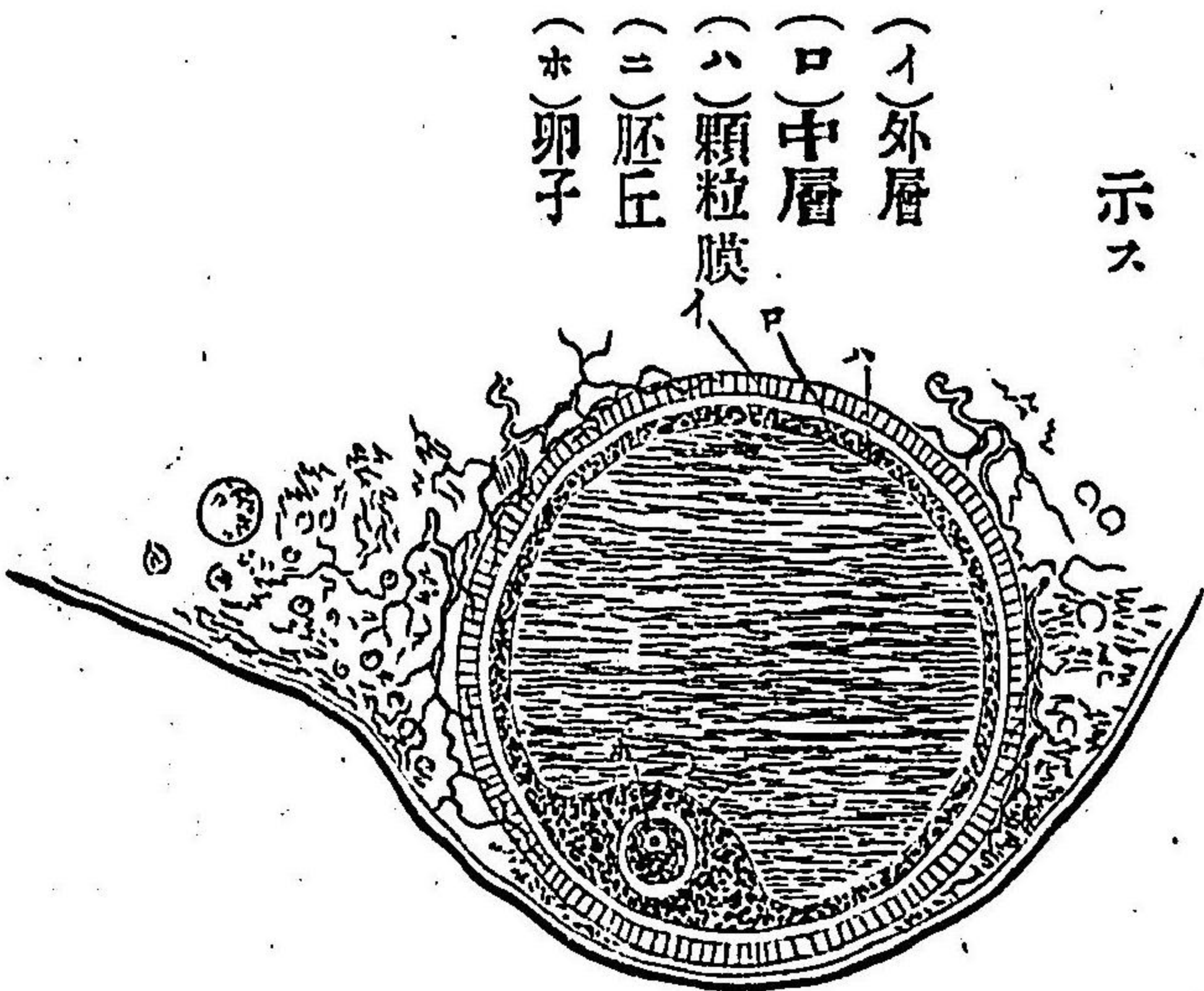
被ヒ腹膜復タ其表面ヲ覆フ 纖維膜ハ一ニ白膜ト名シ帶黃白色ニシテ實質ニ密着シ時トシテハ其面ニ著シキ癥痕アルヲ見ル蓋シ「グラーフ」氏胞破綻ノ痕迹ニ係ル 實質ハ鬆疎ニシテ海綿狀ヲナシ纖維紡錘狀細胞橢圓形細胞及圓形細胞ヲ以テ成リ頗ル血管ニ富ミ且ツ許多ノ小胞ヲ有ス之ヲ「グラーフ」氏胞ト謂フ各一個ノ卵子ヲ含ム

各卵巢ハ三十個乃至二百個ノ「グラーフ」氏胞ヲ有ス然レトハ發生ノ度ニ從テ其大小同シカラス 此胞ノ充分ニ熟成スル者ハ大サ豌豆ノ如クニシテ三層ヨリ成リ内ニ澄液ヲ充テ卵子ヲ藏ス 外層ハ纖維ヨリ成リ卵巢ノ實質ニ密着シ血管ヲ分布ス 中層ハ極微ノ纖維及有核細胞ヲ以テ成リ許多ノ脂肪球ヲ含ミ黃色ヲ帶フ 内層ハ專ラ有核細胞ヨ



(第十六圖)

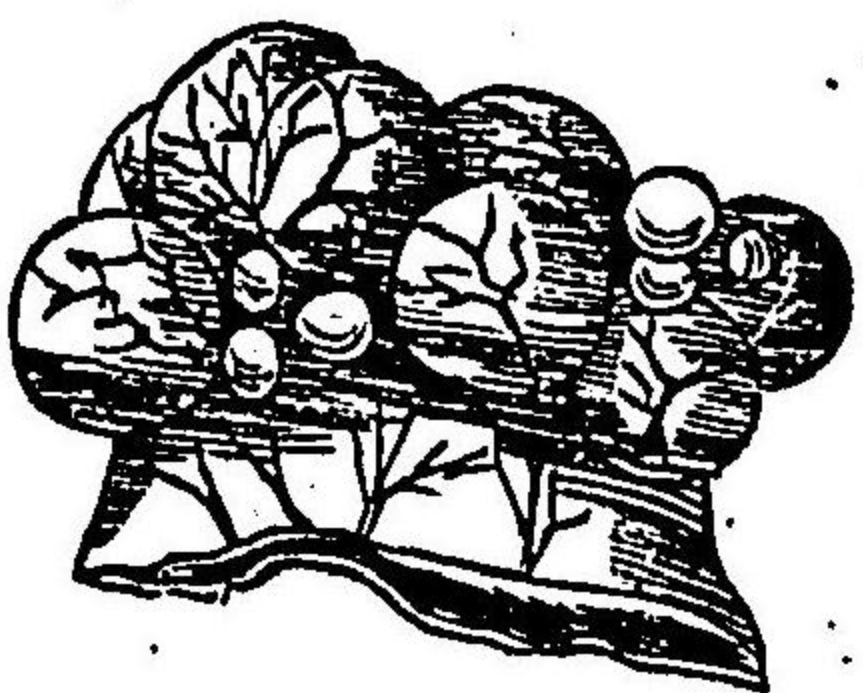
成熟セル「グラーフ」氏胞ヲ示ス



リ成ル故ニ之ヲ顆粒膜ト謂  
 フ卵子既ニ熟成スレハ此膜  
 ニ接シ許多ノ細胞アリテ之  
 ナ周匝ス此部ヲ名ケテ卵丘  
 ト謂フ 内容液ハ透明ニシ  
 テ蛋白質ヲ含ミ且ツ許多ノ  
 顆粒ヲ浮フ 「グラーフ」氏胞  
 ハ初メ卵巢ノ外邊ニ生シ漸  
 ク中部ニ移レヒ其發生スル  
 ニ從テ復々漸ク外面ニ近ツ  
 キ遂ニ其面ニ突出ス而シテ  
 ニ此期ニ至レハ其壁ハ愈脈

管ニ富ミ管ニ其内ニ漿液ヲ滲出スルノミナラス脈管自ラ  
 破裂シテ血液ヲ溢出シ全胞愈緊張シ遂ニ破綻シテ卵子ハ  
 内容液及顆粒膜ノ一部ト俱ニ喇叭管ニ入ルナリ 「グラ  
 フ」氏胞將ニ破綻セントスル時ニ當テ其表面ニ突出スヲ檢ス  
 レハ多條ノ血管ヲ絡ヒ之ヲ按スレハ少シク波動アリ又時  
 (第十七圖) トシテハ外膜ヲ隔テ胞内ニ溢血アルヲ

家猪ノ「グラーフ」氏胞ヲ示ス  
 透見スルコトアリ 熟成セル「グラーフ」氏  
 胞ヲ截開シテ其内容物ヲ去リ内部ヲ檢



スレハ内面ハ著シク皺襞ヲ生シ且ツ鮮  
 黄色ヲ呈スルヲ見ル蓋シ胞壁ニ許多ノ  
 脂肪球アルニ由ル時トシテハ胞壁甚シ  
 ク血管ニ富ミ爲メニ其黄色ヲ陰蔽スル



○黃體

「グラーフ」氏胞既ニ破綻シテ此内容物ヲ排出シ了レハ胞壁愈収縮シテ皺襞愈著明トナリ漸ク空胞内ニ突出シテ之ヲ充填シ遂ニ星形ノ黃斑ヲ生ス名ケテ黃體ト謂フ 此黃體ノ發現スルヤ孕不孕ニ從テ一樣ナラス 婦人若シ孕マサルハ空胞ノ外層ハ甚シク収縮シテ内層ハ許多ノ皺襞ヲ生シ速ニ星形ヲ呈ス但シ胞内ニ凝血ノ存スルアレハ自ラ縮小シテ星形斑ノ中心ヲ領ス而シテ此斑初メハ著シク黃色ナレト速ニ變シテ無色トナリ六個月ヲ經レハ殆ト全ク消失ス 之ニ反シテ婦人若シ孕ムハ全生殖器ノ血行大ニ充進シ從テ卵巢モ亦多量ノ血液ヲ受クルカ故ニ空胞ノ變化甚ク遲慢ナリ即チ此胞ノ外層ハ特別ノ變化ヲ爲サレレト

其内層 專ラ中層ヲ指スハ漸ヤク肥厚シテ皺襞ハ愈著明トナリ其色ハ愈鮮黃ヲ呈スト雖ト空胞久シク充填セラレサル者トス 受胎第四月ニ至テ卵巢ヲ檢スレハ全體甚シク變大シ空胞ハ殆ト全巢四分ノ一ヲ領シ外層 空胞ノハ著シキ變化アルヲ見サレレ内層ハ太ク肥厚シテ其色大ニ加リ更ニ内面ニ白色ノ新層アルヲ認ム蓋シ初メ溢出セシ血液ノ變化セル者ナラン 受胎第四月以後ハ全胞漸ク縮小シ胞壁自ラ近接シ彼白色ノ新層モ亦非薄トナリ内層ト俱ニ皺襞ヲ生シ分娩時ニ至レハ唯黃色ノ斑中一點ノ白痕アルヲ見ルノミ而シテ産後數月ヲ經レハ全ク消失シテ復タ其形跡ヲ見サルニ至ル 第十八圖ハ月經后及受胎后ノ黃體ヲ示ス者ナレハ讀者宜シク上下ヲ比較シ其差異ヲ見ルベシ

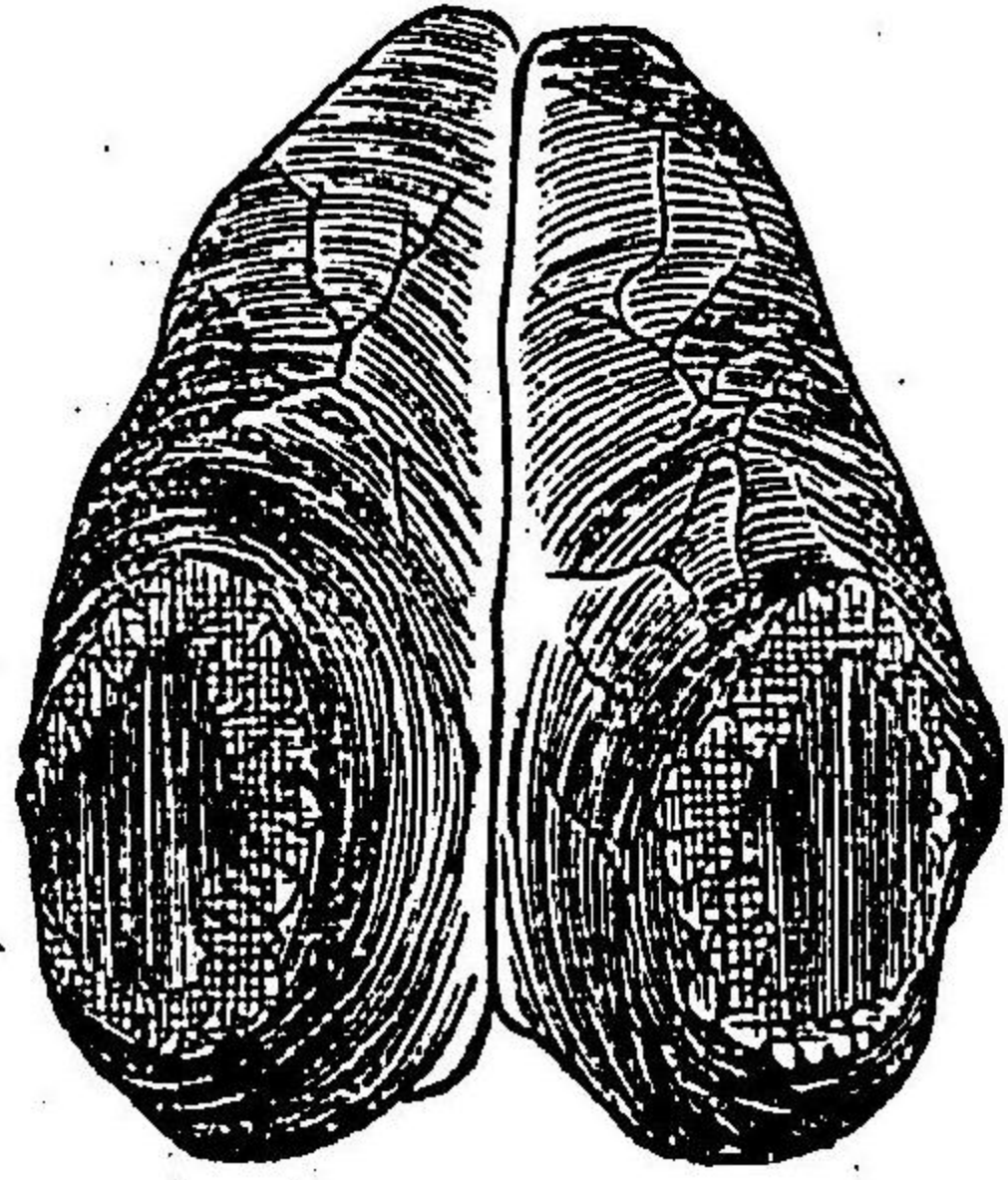


(第十八圖)

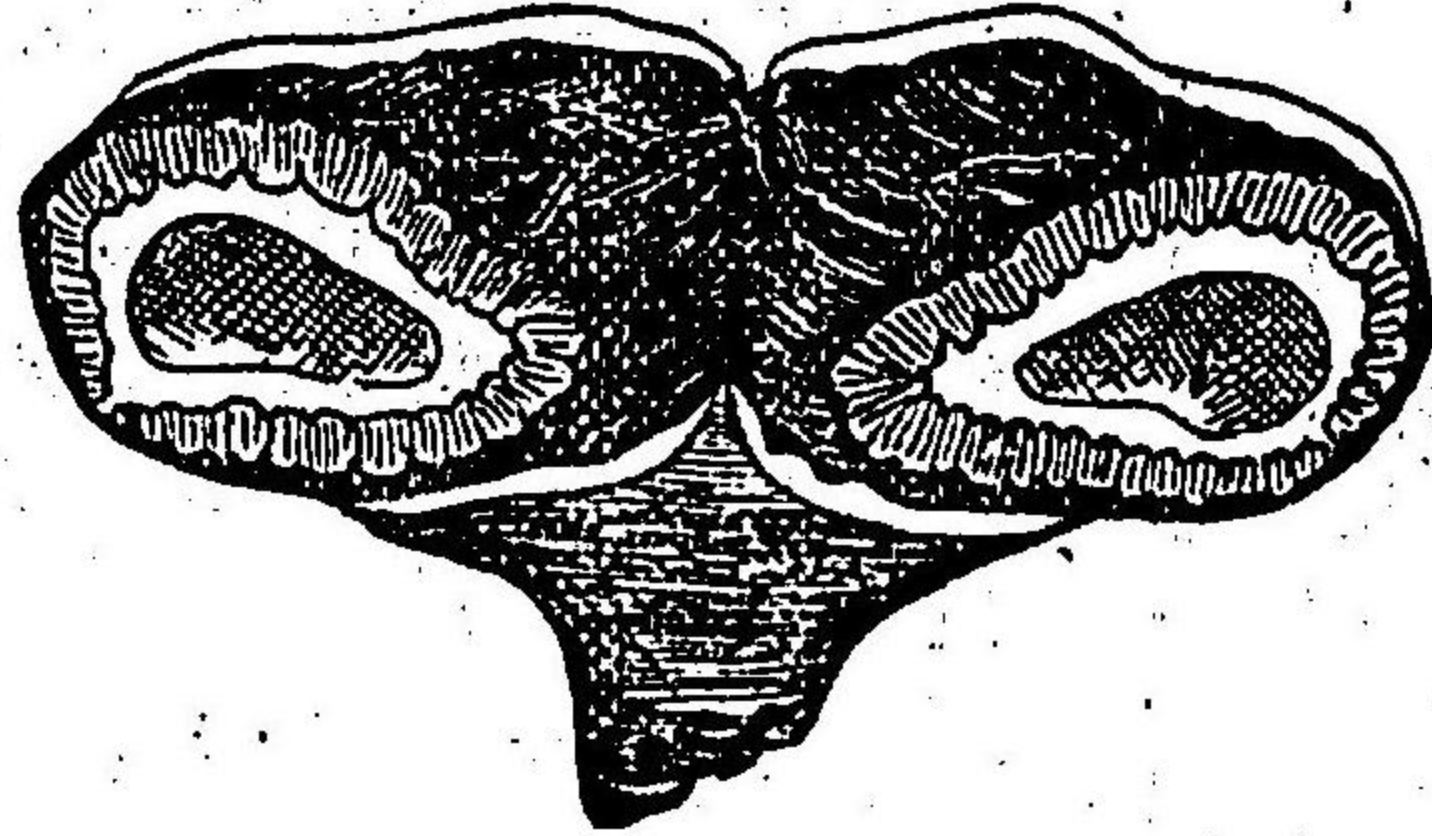
卵巢ノ黄体ヲ示ス

(一)(二)(三)不孕婦即チ月経后ノ黄体ヲ示ス  
(壹)(貳)(參)孕婦即チ受胎后ノ黄体ヲ示ス

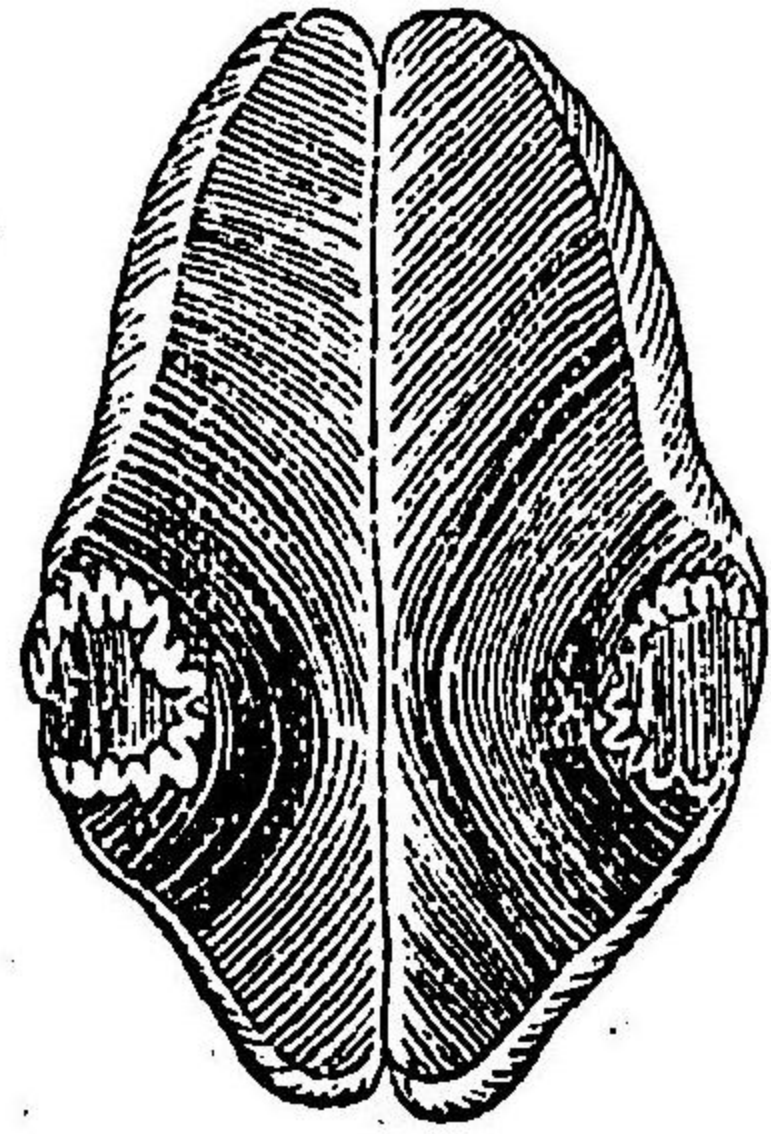
(一) 月経后  
三週ヲ  
經タル  
者



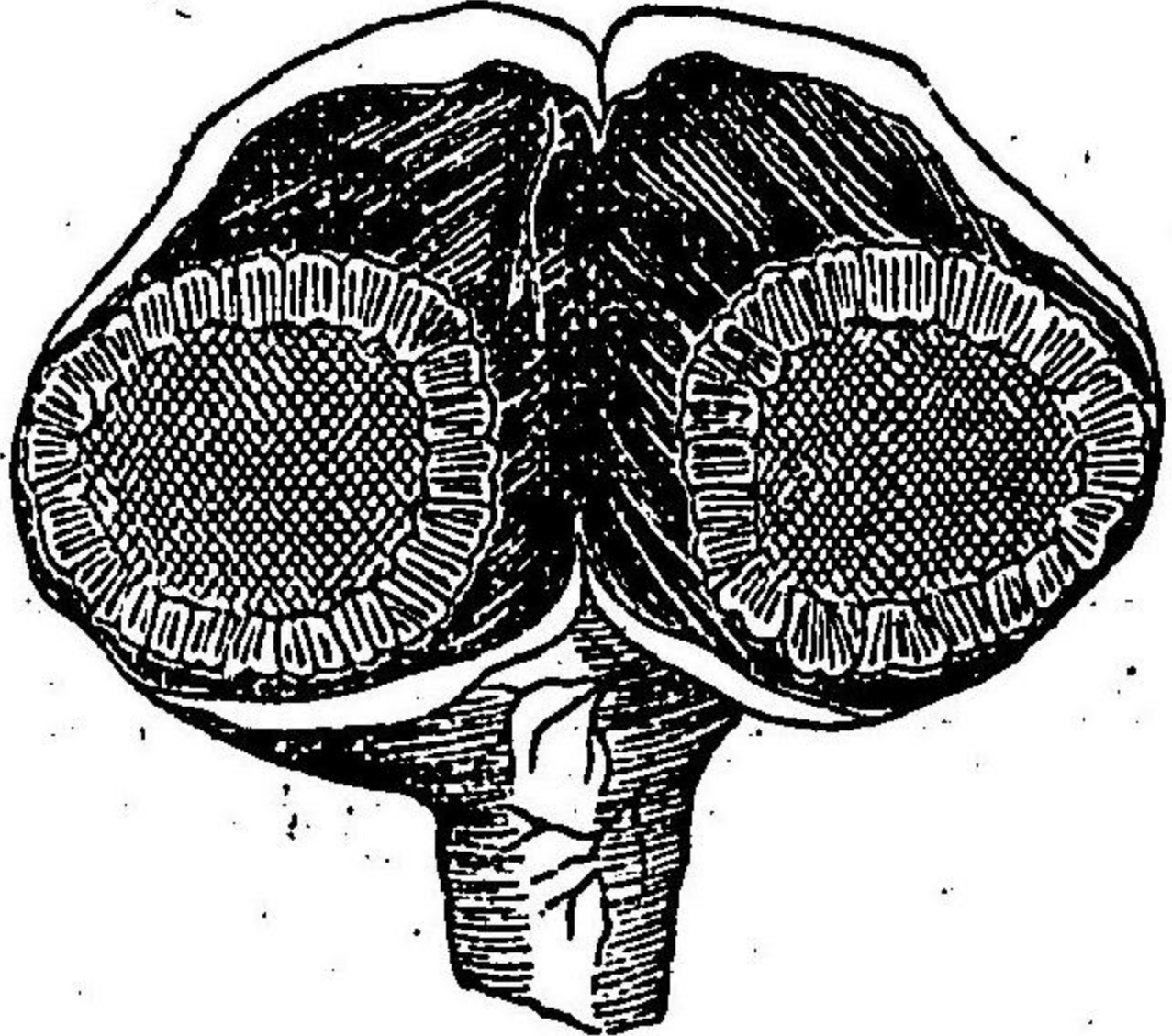
(壹) 受胎后  
三週ヲ  
經タル  
者



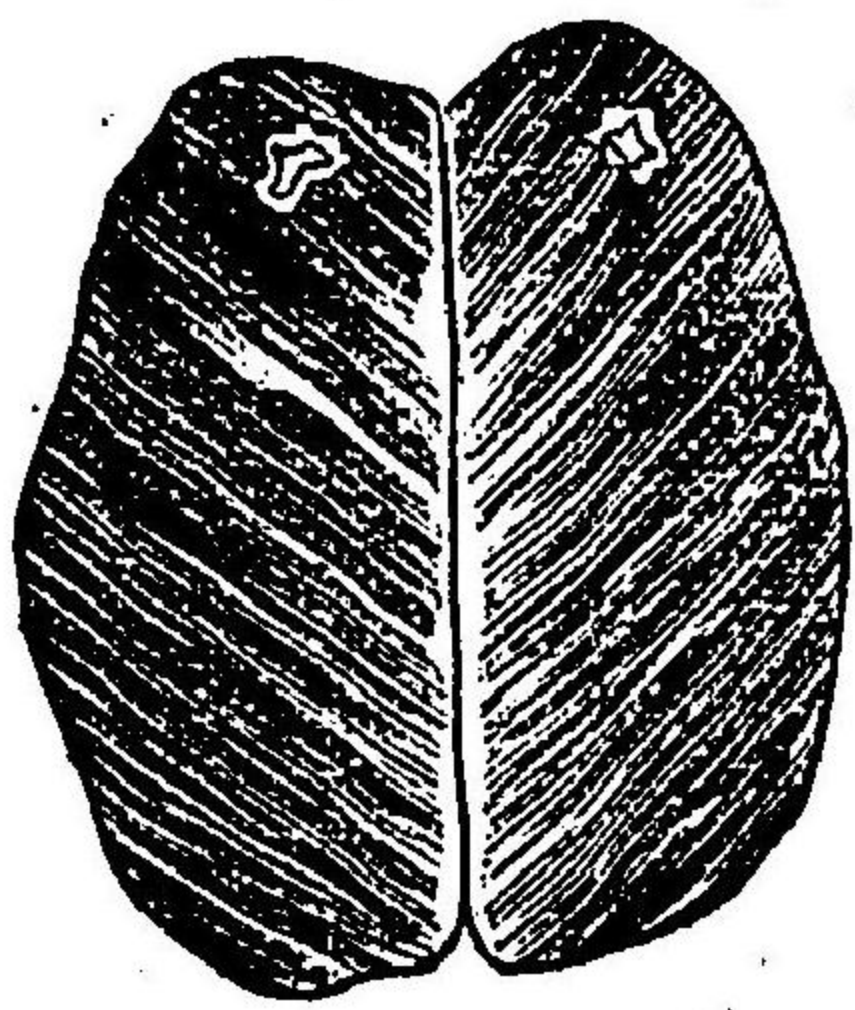
(二) 月経后  
一個ヲ  
經タル  
者



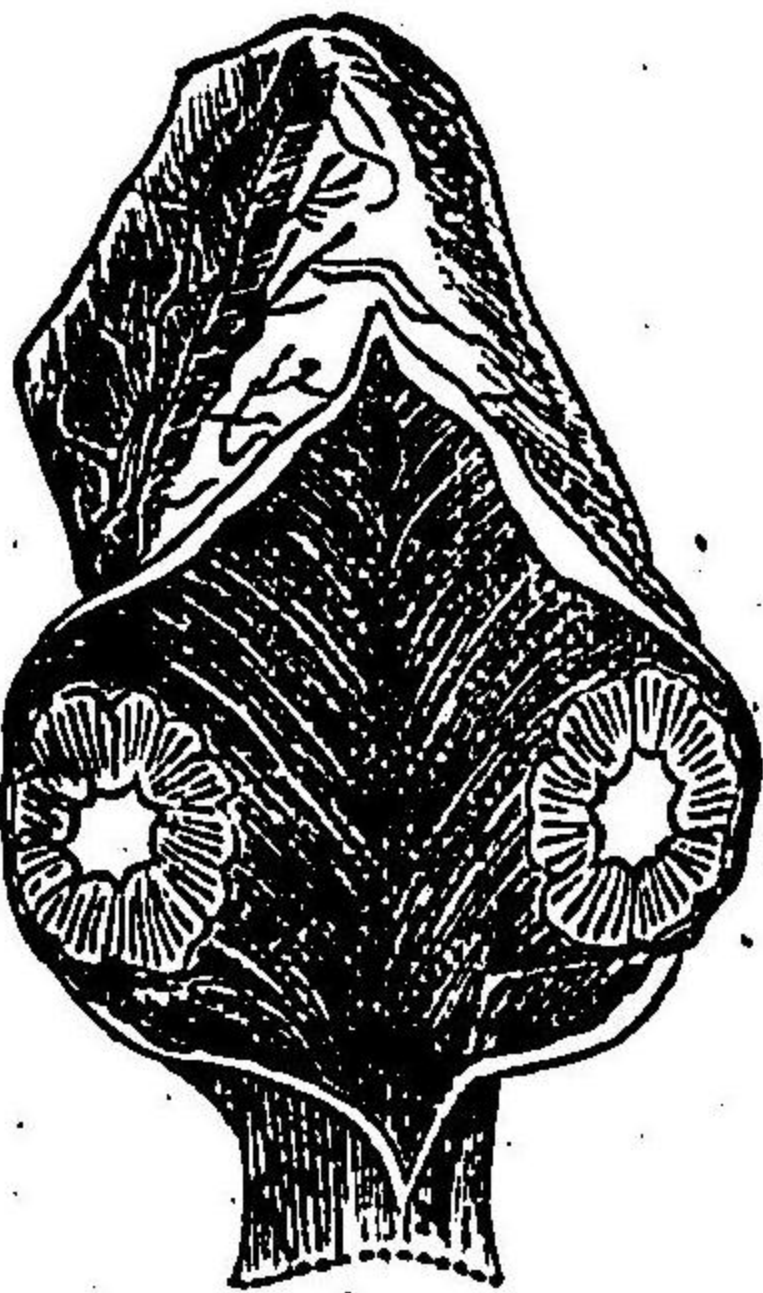
(貳) 受胎后  
一個ヲ  
經タル  
者



(三) 月経后  
六個ヲ  
經タル  
者



(參) 受胎后  
六個ヲ  
經タル  
者





○乳腺

○乳腺

乳腺ハ素ト外生殖器ニ屬ス而シテ小兒ノ養育ニ緊要ナルノミナラス妊娠中諸般ノ變化ヲ呈スルヲ以テ之ヲ鑑別スルニ方リ殊ニ此腺ニ注意スルヲ要ス 抑乳腺ハ充分ニ發育スレハ上ハ第三肋骨ヨリ下ハ第六肋骨ニ至リ内ハ胸骨外縁ヨリ外ハ腋窩ニ達ス而シテ左乳腺ハ右乳腺ヨリ大ナルヲ常トス 乳頭ハ第四肋骨ニ對シテ前方ニ突出シ暗紅色ヲ呈ス而シテ其周圍ノ皮膚モ亦暗紅色ヲ帶ビ輪狀ヲナス之ヲ乳暈ト謂ヒ其面ニ許多ノ細隆起アリ之レヲ細腺ノ外口トス 乳頭ハ血管ニ富ミ結締織及滑平筋纖維ヲ含ミ其面ニ十五個乃至二十個ノ小孔アリ之ヲ乳管口トス又許多ノ細乳嘴アリテ知覺甚ク鋭敏ナリ故ニ輕ク之ヲ刺衝スレ

○乳腺ノ構造

ハ少シク勃起シ且ツ少シク快美ノ感アリ

乳腺ハ數葉集合シテ成リ葉間ニ許多ノ脂肪ヲ有ス故ニ乳腺全體ノ大小ハ專ラ脂肪ノ多少ニ關ス 各葉更ニ分レテ小葉トナリ各一條ノ細管ヲ有ス而シテ許多ノ細管相合シテ稍大ナル管ト成リ此管復々相合シテ十五條乃至二十條ノ大管トナリ乳暈皮下ニ輻湊シ遂ニ乳頭ヲ穿テ其面ニ開口ス此管ヲ名クテ乳管ト謂フ 乳管ハ乳暈皮下ニ於テ膨脹シテ紡錘狀ヲ爲シ内ニ乳汁ヲ貯ヘ小兒ノ吸吮ヲ俟テ排出ス 小葉ハ細管ノ集合ヨリ成リ其狀葡萄ニ似タリ而シテ胞壁ハ血脈ニ富ミ内面ニ上皮ヲ具ヘ乳汁ヲ分泌ス 乳管ハ結締織及縱横二種ノ黃纖維ヲ以テ造爲セラレ内面ニハ至薄ノ粘膜ヲ有ス



○乳汁

乳汁ハ細嚢上皮ヨリ分泌セル白色ノ液ニシテ亞兒加里性  
 或ハ中性ノ反應ヲ有シ其異重ハ大約一〇三〇アリ 顯微  
 鏡ヲ以テ照檢スレハ圓形或ハ橢圓形ノ小体アリテ稍不透  
 明ノ液中ニ浮フヲ見ル 此小体ヲ名ケテ乳球ト謂フ其大  
 小一萬二千七百分應ノ一乃至三千四百分應ノ一アリ 乳  
 球ハ油質物ヨリ成ル而シテ一説ニ據レハ其表面ニ蛋白質ノ  
 一層ヲ被フ者トス 其他乳中ニ極微ノ球体アリ能ク「エー  
 テル」ニ溶解スルヲ以テ是亦恐クハ油質物ヨリ成ル者ナラ

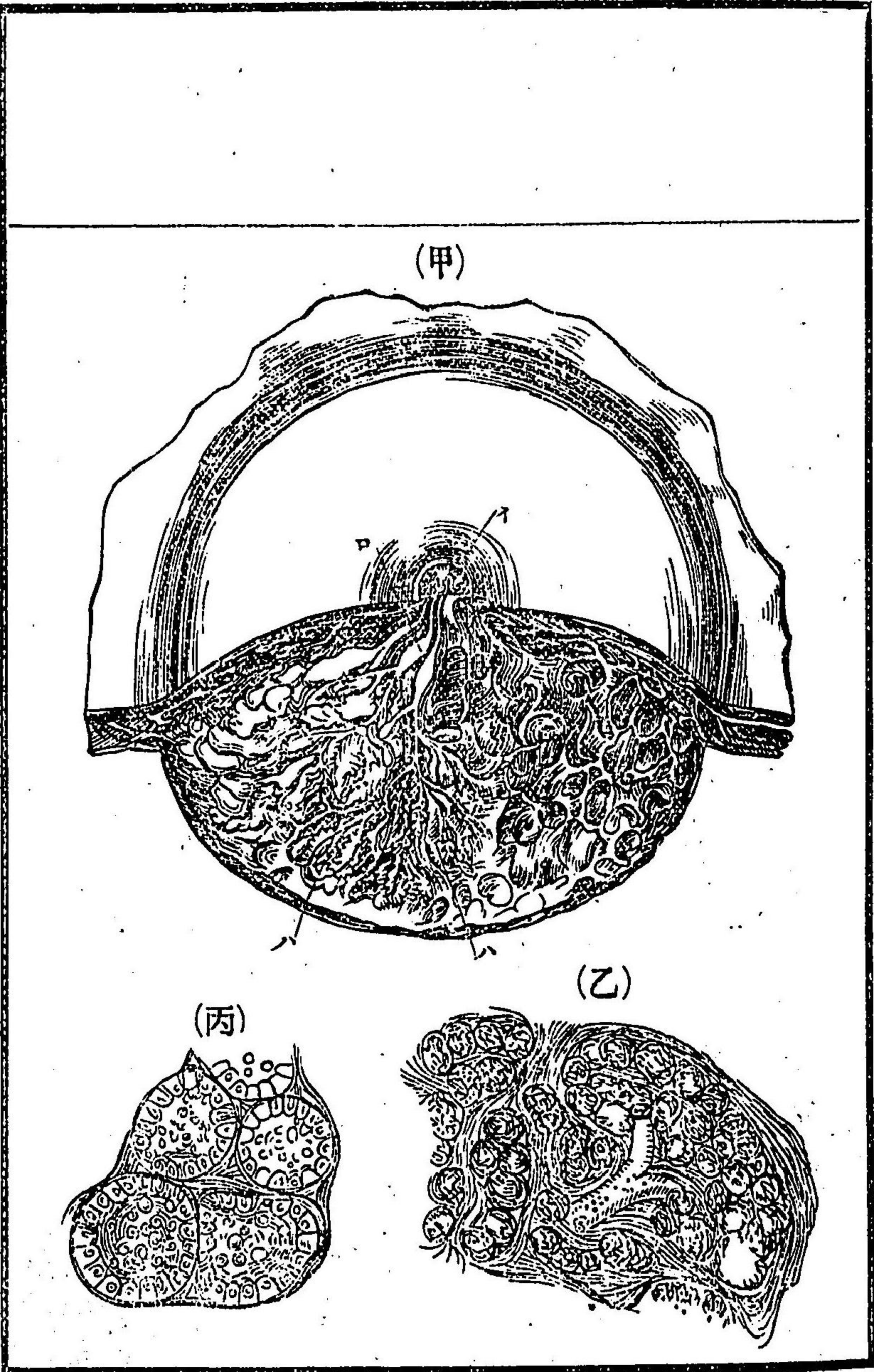
(第十九圖)

乳腺ノ構造ヲ示ス

(甲)乳腺ノ下半ヲ解剖シテ其構造ヲ示ス

(イ)乳頭 (ロ)乳管ノ膨脹部 (ハ)小葉

(乙)小葉ノ構造ヲ示ス (丙)分泌細嚢ヲ横割シテ其内狀ヲ示ス





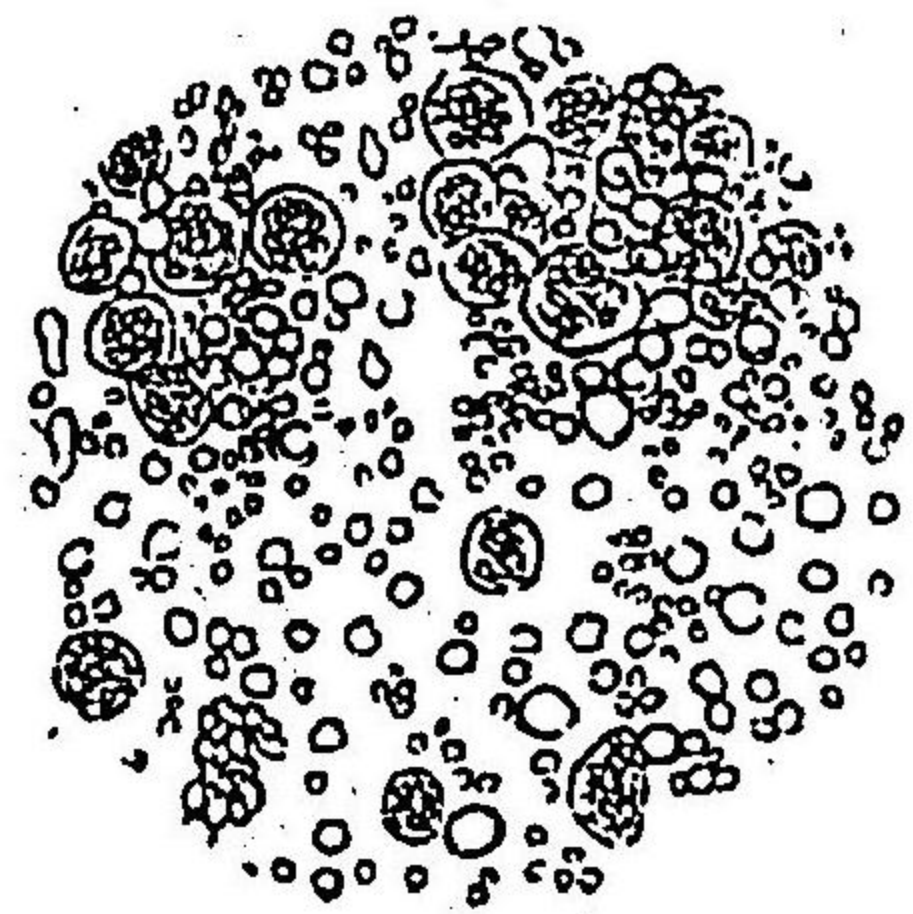
○コロストリ  
ユム

ソト云へリ

分娩後七日以内ニ分泌セル乳汁ヲ「コロストリユム」ト謂ヒ  
固形分ヲ含有スル「尋常ノ乳汁」ヨリ多ク又顕微鏡ヲ以テ  
照檢スルニ管ニ尋常ノ乳球ヲ有スルノミナラス他ニ一種  
ノ大ナル顆粒体ヲ含ムヲ見ル 此体ハ所謂「コロストリユ  
ム」細胞ニシテ其大サ五百分應ノ一乃至百六十分應ノ一アリ

(第二十圖)

人乳ノ「コ  
ロストリ  
ユム」胞  
含有スル  
者ヲ示ス



此物恐クハ乳腺上皮ノ  
脂肪性變質ヲ受ケタル  
者ナラン「コロストリ  
ユム」ハ稍々刺戟ノ力ア  
リ故ニ初生兒之ヲ服ス  
ルハ胎糞ノ排泄ヲ促

進シ且ツ消化機能ヲ喚起スルノ効アリ然レモ其之ヲ服ス  
ル「度」ニ過クシハ腸胃ヲ害シ吐乳或ハ下利ヲ發シ爲ニ衰  
弱ヲ來ス者ナリ

「トルマトシーフ」氏ハ曾テ「コロストリユム」及尋常ノ乳汁ノ  
固形分ヲ分析比較セリ其表左ノ如シ

産后 四日	全 六日	全 十五日	全 卅六日	年齢	乾酪及蛋白	油質物	糖 分
一三三	一一二	一一二	三四	四一、八八	二四、七一	四三、三	
二〇、五	二〇、七七	二〇、七七	一〇、〇四	三一、七七	二九、三九	五七、六	
一七、一三	一七、一三	一七、一三	一七、一三	六二、六	六二、六	六二、六	

此表ニ就テ見ルルキハ分娩后日子ヲ經ルニ從テ乾酪及蛋白  
ハ次第ニ減少シ之ニ反シテ糖分ハ順次ニ増加スルヲ證ス



乳汁諸成分ノ比量ハ年齢體質及飲食等ニ從テ差異ナキヲ得サレドモ今其大概ヲ示セハ左表ノ如シ

人乳ノ成分	
水	八九〇
乾酪	三五
乳脂	二五
乳糖及越幾斯分	四八
鹽類	二
合計	一〇〇〇

○第三章

月經論

○月經

月經トハ毎月一回期ヲ定メテ子宮ヨリ血液ヲ漏出スルヲ謂フナリ蓋シ月經ト卵子ノ成熟下降トハ相俟テ起ル者アルカ故ニ處女初テ月經ヲ見ルキハ既ニ可孕ノ時期ニ達スルヲ察スヘシ 凡ソ月經時ニハ生殖器一般ノ充血ヲ發シ且ツ他ニ緊要ナル變化ヲ致ス左ニ先ツ月經時ノ變化ヲ述ベントス 乳房ハ充血腫脹シ時トシテハ鈍痛ヲ發スルアリ 陰唇及陰ノ粘膜ハ充血シテ著シク腫脹シ粘液ノ分泌ヲ增加シ且ツ其部ノ溫度稍昇進スルヲ見ル 子宮ハ一般ニ充血變大シ其重量増加シテ少シク墜下シ殊ニ粘膜ハ變厚軟化シテ皺襞ヲ生シ内腔ニ突出シテ殆ト之ヲ充填シ

○月經時内變



且ツ鮮紅色ヲ呈ス而シテ子宮腺口及之ヲ周繞スル細血管ノ如キハ殊ニ著明ト爲ル者トス 卵巢ノ變化ハ殊ニ緊要ナリトス抑月經時ニハ卵巢内ニ一二個ノ「グラーフ」氏胞成熟シテ中央ヨリ外位ニ近ツキ表面ヨリ突出シ遂ニ破綻シテ其内容物液ヲ及血ヲ排出シ其空胞ハ變シテ黃體ト爲ル卵條下ニ

○剪線ノ作用

喇叭管ノ剪線ハ「グラーフ」氏胞ノ破綻ニ先ツテ卵巢ヲ抱攝シ其破綻ヲ俟テ卵子ヲ承ケ之ヲ子宮ニ輸ス但シ人類ニ在テハ剪線ハ卵巢ノ全體ヲ抱攝スルヲ能ハサルカ故ニ唯其一部即チ「グラーフ」氏胞ノ突出部ヲ選テ之ヲ抱攝スルノミ 喇叭管ハ何ニ由テ斯ノ如キ妙用ヲ營ムヤ未タ詳ナラスト雖ニ輓今ニ至テ子宮廣韌帶中ニハ滑平筋纖維アリテ其

○卵子下降

作用ニ由テ卵巢球及蔓狀靜脈ヲ勃起セシメ以テ剪線ヲシテ卵巢ニ近接セシムル者トス 卵子既ニ喇叭管ニ入レハ專ラ其内面ニ存スル茸毛ノ作用ニ由テ子宮ニ向テ輸送セラルト雖ニ亦此粘膜ハ數條ノ縱襞ヲ有シ爲ニ其内腔分レテ數條ノ管狀ヲ爲スト全管少シク蠕動機ヲ發スルトニ由テ大ニ卵子ノ下降ヲ助クル者トス

○下降ノ時間

卵子ノ喇叭管ヲ下降スル時間ハ未タ一定セサレニ必ス數日ヲ要スヘシ一説ニ據レハ七八日ヲ要スト云フ 「グラーフ」氏胞破綻シテ卵子既ニ喇叭管ニ入レハ剪線ハ速ニ卵巢ヲ離レ或ハ暫時尙ホ之ヲ抱持シテ胞内ヨリ漏出スル所ノ血液ヲ受ケテ之ヲ子宮ニ輸ルナリ若シ剪線速ニ卵巢ヲ離



○婚期ノ徵候

ル、キハ血液ヲシテ腹膜腔内ニ流入セシムルノ虞アリ時  
 トシテハ卵子及血液俱ニ喇叭管ニ入ラスシテ腹膜腔内ニ  
 落ルコアリ是レ不孕、腹腔妊娠及腹膜内出血ヲ致ス所以ナ  
 リ  
 凡ソ處女將ニ始メテ月經ヲ見ントスル時ハ身體ニ種々ノ  
 變更ヲ致ス就中最モ著明ナル者ハ左ノ如シ (第一)精神自  
 ラ靜穩トナリテ童戯ノ情止ニ事物ニ畏レ易ク始テ懷春ノ  
 情ヲ催シ男子ヲ見ルキハ羞耻ノ色アリ (第二)聲音一變シ  
 テ語聲自ラ寬裕トナル (第三)乳腺増大シテ脂肪ニ富ミ乳  
 頭勃出シ乳暈其色ヲ増シテ薔薇ノ如シ (第四)骨盤變大シ  
 テ其内徑ヲ増加ス是レ處女此期ニ至レハ其行動ノ狀一變  
 スル所以ナリ (第五)外生殖器ハ俄ニ發育シテ陰阜及大陰

○モリミナメ  
 ソストリユ  
 エーシヨニ  
 ス

唇ハ毛ヲ生シ粘膜ハ從來ノ薔薇色ヲ失ヒ變シテ暗赤色ヲ  
 呈ス 初次ノ月經將ニ來ラントスル時ハ身體ニ變常ヲ發  
 ス之ヲ「モリミナメ」ソストリユエーシヨニス」ト云フ乃チ全  
 身不和ヲ訴ヘ下腹部ニ壓重或ハ充滿ヲ覺ヘ腰部ニ疼痛ヲ  
 發シテ鼠蹊及大腿ニ波及シ尿意頻數、陰部癢痒、食思缺損、惡  
 心嘔吐、大便秘結及乳腺腫痛等ヲ發シ時トシテハ鬱憂症、舞  
 踏病及其他神經諸症ヲ發スルコアリ 以上ノ諸症ハ數日  
 持續シ粘液及血液ヲ漏泄スルニ至テ自ラ止ム者トス然レ  
 モ各人必ス之ヲ發スルニ非ス或ハ全ク闕如スルコアリ或  
 ハ毎回之ヲ發スルコアリ或ハ之ヲ發スルモ血液ヲ漏出セ  
 サルコアリ或ハ二三個月ハ期ヲ定テ之ヲ發シ後ヲ始テ月  
 經ヲ見ルコアリ或ハ甚タ輕微ナルコアリ



○月經廻歸期

月經ノ廻歸時期即チ前回月經發現ノ日ヨリ次回月經發現ノ日ニ至ル間ノ日數ハ通常二十八日ナリ然レモ各人ノ體質及慣習等ニ從テ長短アリ短キハ十四日ナルコトアリ長キハ四十二日ナルコトアリ故ニ此日數ニ適セサルモ慢リニ疾病ト看做ス可ラス

○月經日數

月經ノ日數モ亦一定セス三日乃至七八日ヲ以テ常準トス「ブリルン」デ、ボイスモン「氏ハ五百六十人ニ就テ月經日數ヲ調査セシニ其最多ノ員即チ百七十二人ハ八日其次ニ三日其次ハ四日ナルヲ驗定セリ同氏ノ說ニ據レハ月經ノ日數ハ都鄙ニ從テ同シカラス乃チ都府ニ於テハ長ク鄙地ニ於テハ短シ又短軀ニシテ薄弱ナル神經家ハ長身ニシテ多血肥滿ノ人ヨリモ長ク安逸放肆ナル者ハ飲食其他攝生ニ

○月經初至

注意シ且ツ力作ヲ執ル者ヨリ長キヲ常トス

女子始テ月經ヲ發スルノ時期ハ敢テ一定セサレモ十四歳乃至十六歳ヲ最多シトス然レモ六七歳甚シキハ滿十二月或ハ三歳ニシテ既ニ月經ヲ見タル者アリ之ニ反シテ二十歳以上ニ達スルモ猶ホ未タ月經ヲ見サル者往々之アリ月經初至ノ年期ハ土地氣候社會及ヒ習慣等ニ由テ異ナリ通常都府ノ人ハ僻陬ノ人ヨリモ早ク熱國ニ住スル者ハ寒地ニ住スル者ヨリ早シトス印度ニ於テハ處女十三歳ニシテ月經ヲ見ルヲ常トス從來同國ニ於テハ八歳乃至十歳ニシテ月經ヲ見ル者多シト稱スレモ「ロベルトン」氏ハ之ヲ誤謬ト爲セリ左ノ表ハ各國ニ於テ調査セル月經初至ノ年齢及人員ノ比較ヲ示ス



各國月經初至ノ年期

年齡	英國	佛國	獨逸	諾威	魯國	日本
以下	一四	一六	〇	〇	〇	〇
自十才	六四	四一	〇	〇	〇	〇
自十一才	一〇三	一三八	〇	〇	〇	〇
自十二才	一七八	二〇九	三	四	〇	〇
自十三才	五九五	二五八	八	四	〇	一六
自十四才	一〇三四	三五五	二二	一三	〇	六六
自十五才	一一七八	四一一	三二	一四	一	七五
自十六才	一三〇七	三四九	二四	二〇	一五	七〇
自十七才	七二四	二八七	二	一三	三五	五三
自十八才	五三一	一九〇	一八	一三	一三	一三
自十九才						六

○月經終止

合計	自十九才	自二十才	自二十一才	自二十二才	自二十三才	自二十四才	自二十五才	自二十六才	自二十七才	自二十八才	自二十九才	以上
六〇七〇	二二三	一〇四	一〇二	一〇二	一三	六	六	六	〇	〇	〇	〇
二四七六	一〇四	六六	八	八	二	二	〇	〇	〇	〇	〇	〇
一三一	一八	三一	一	一	三	一	〇	〇	〇	〇	〇	〇
一〇〇	一七	二二	一	二	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
一〇〇												
三〇五												

月經ノ絶止スルモ亦一定ノ期限アルヲナシ然レモ四十五歳乃至五十歳ニシテ絶止スル者最モ多キニ居ル 時トシテハ四十歳以内ニ絶止シ時アリテハ五十歳以後ニ至テ絶止スル者モ亦尠シトセス罕レニハ三十歳以内ニ絶止シ或ハ二十一歳ニシテ絶止セシ例アリ 之ニ反シテ五十九歳七十歳八十歳八十七歳或ハ九十歳ニ至ルマテ月經尙ホ持續セシ者アリト云フ 抑月經ハ早ク至レハ早ク止リ遅ク



至レハ遅ク止ル者ニシテ初至ヨリ絶止ニ至ル大約三十年  
 間ナリトス例之十五歳ニシテ初テ至レハ四十五歳ニ至テ  
 全ク止ルカ如シ但シクリール氏ハ全ク之ニ反對セル説ヲ  
 主張セリ曰ク卵巢ハ其發育ノ度ニ從テ其作用ヲ爲スノ年  
 期ニ長短アリ故ニ十二歳ニシテ月經始テ至レハ五十歳或  
 ハ五十五歳ニ至ルマテ連綿トシテ持續シ十八歳或ハ二十  
 歳ニ至テ始テ來ル者ハ卵巢ノ發育全カラス其作用モ亦隨  
 テ十分ナラサルヲ示ス者ナレハ四十歳ニ及ヘハ絶止スル  
 ニ至ルト

○經血性狀

月經ハ暗紅色ノ液ニシテ一種ノ臭氣ヲ放テ零ホ菊草ノ香  
 ニ似タリ專ラ血液ヨリ成ルト雖モ純血ノ如ク凝固セサル  
 所以ノ者ハ酸性ノ腔液ヲ混スルニ因ル故ニ子宮内ニ鬱滯

シ或ハ其量過多ナルキハ凝固シテ亞爾加里性ヲ存スホワ  
 イトヘツド氏及ダ子氏ハ月經ノ酸性ナルハ磷酸及ヒ乳酸  
 チ含ムニ因ル者トシマンドル氏ハ月經ノ凝固セサルハ粘  
 液或ハ少量ノ膿ヲ含ムニ因ル者トス 月經ノ最初ニ漏出  
 スル者ハ專ラ粘液ヨリ成リ其内ニ粘液細胞上皮及血球ヲ  
 含ミ中頃ニ漏出スル者ハ專ラ血液及腔液ヨリ成リ其量モ  
 亦多ク且ツ許多ノ血球粘液球及上皮ヲ含メリ而シテ大約三  
 四日間持續スルヲ常トスレニ時トシテハ之ヨリ長ク持續  
 スルヲアリ或ハ數日間閉止スルノ後更ニ多量ヲ漏出スル  
 ヲアリスノ如キハ凝血ノ有無ニ拘ラス皆不良ノ徴トス何  
 トナレハ月經ノ通路ニ障礙ナキキハ時々多少ノ差アルモ  
 初發ヨリ終末ニ至ルマテ連綿トシテ漏出スルヲ常トスレ



○月經ノ量

ハナリ又終末ニ至レハ血球漸次ニ減少シ粘液ハ著シク増加シ其色モ亦變シテ淡紅トナリ後遂ニ粘液ノミテ漏出シ不日ニシテ全ク閉止スルナリ

毎月經時ニ漏出スル分量ハ之ヲ測知スルコト難キカ故ニ古來諸家實檢ノ成績ヲ同フセヌ 大古ヒボクラーテス<sup>ハ</sup>既ニ經量ヲ十八弓ト定メリ此量固ヨリ信ス可ラス輒今ニ至テ「メイグス」氏ハ四弓乃至六弓トシ「デハエソ」氏ハ三弓乃至五弓トシ「フアル」氏ハ二弓乃至三弓トス故ニ每經ノ量ハ大約三四弓ト假定セハ實際上大ナル誤謬ナカルヘシ

經血ノ來源ニ就テハ古來議論紛々久シク一定ノ確説ナシ然ルニ輒今ニ至テ漸ク經血ハ子宮體腔頸管ヲ除クヨリ漏出スル者トシ衆醫ノ疑ハサル所トナレリ何トナレハ經時ニ死

○月經來源

亡セル者及ヒ子宮頸管ノ閉塞セル者ニ於テハ子宮體腔ニ血液ノ鬱溜スルヲ目撃シ且ツ子宮内翻患者ニ在テハ顯然子宮粘膜ヨリ血液ノ漏出スルヲ實檢セシ者アレハナリ然レニ其血液ノ漏出スル方法ニ至テハ或ハ血液殊ニ靜脈血ノ髮細管ヨリ滲出スト云ヒ或ハ血管ニ永久ノ孔アリ血液之ヨリ漏出スト云ヒ或ハ全粘膜若クハ其内層上皮ノミ剝離脫出シテ血管破斷シ爲ニ血液漏出スト云ヒ或ハ專ラ子宮腺ヨリ滲出スト云ヒ或ハ上皮剝離シ内面ノ毛細管破裂シテ血液之ヨリ漏出スト云ヒ未タ一定ノ確論アラスト雖

ニ月經時ニハ子宮ノ粘膜上皮ニ變化アリ妊娠中及月經時ニハ上皮ニ茸毛見ズ且ツ經血ハ毛細管ニ其源ヲ資ルコトハ疑ヒテ容ル可カラス 又時トノハ經血ハ喇叭管或ハ「グラーフ」氏胞ヨリ



○月經ノ原因

漏出スルコアリ  
 月經ノ漏出ヲ誘起スル原因ニ就テハ諸説未ダ定ラズ然レ  
 且卵子ノ成熟ニ伴ヘル卵巢中ノ變化ト子宮内ヨリ血液ノ  
 漏出スルトハ孰レヲ原因トシ孰レヲ成果トスルニ拘ラズ  
 親密ノ關係アル者トス何トナレハ經時ニ死亡セル者ヲ剖  
 驗スレハ必ス卵巢ニ成熟セル卵子ヲ發見スヘシ生來卵巢  
 ナキ者或ハ生後之ヲ切除スレハ月經ヲ見ルコナケレハナ  
 リ「ホット」氏「ガシウ」氏及「オルド」氏ハ各卵巢ヲ切除セシ  
 ニ爾後月經全ク閉止シテ復タ來ラサル者ヲ實檢セリ  
 時トシテハ本然ノ月經ヲ見ルコナクシテ他部ヨリ漏血ス  
 ルコアリ之ヲ襲替月經ト謂フ「ツロ」氏ノ説ニ據レ  
 ハ生理的出血ハ総テ粘膜炎ヨリ起ル者トス子宮粘膜炎其常機  
 ナ失ヒ經血ヲ漏出セサルキハ他部ノ粘膜炎ニ代テ其用ヲ

○襲替月經

營ムナリ通例鼻胃直腸ノ粘膜炎子宮ニ代テ血液ヲ漏出ス  
 ルコ殊ニ多シ是レ月經閉止シテ衄血吐血下血或ハ咯血ヲ  
 發スルコ多キ所以ナリ故ニ鑿若シ此等ノ出血ヲ見ハ月經  
 ノ順否ニ注意シテ之ヲ病的出血ト辨別スルヲ要ス時トシ  
 テハ眼結膜下ニ定期出血ヲ起ス者アリ若シ皮膚ニ於テ襲  
 替月經ノ起ルキハ皮下ニ出血斑ヲ生シ或ハ血液皮面ニ滲  
 出シテ所謂血汗ヲ發スルコアリ又タ或ハ潰瘍面ヨリ出血  
 スルコアリ

○第四章

受胎論



○受胎

受胎トハ精糸ト卵子ト觸接和合シテ一新體ヲ生スルヲ謂フ而シテ通常受胎ノ媒介ヲ爲ス者ハ交媾ナリ 今受胎ヲ講スルニ當テ先ツ交媾ノ機轉ヲ説キ次ニ卵子及精糸ノ何物ナルヲ述ヘ遂ニ本題ニ論及セントス

○交媾

(交媾) 凡ソ男子ノ色情ヲ催スヤ先ツ陰莖勃起シテ膨大延長スルヲ常トス蓋シ此器ヲ構造スル所ノ空洞體及海綿體中ニ血液ヲ充滿スルニ因ル 今若シ陰莖ヲ腔中ニ没入シテ其内面ノ皺襞ニ觸レテ摩擦スルキハ情意愈興奮シテ快美ヲ覺ヘ其極ニ至レハ反射作用ニ由テ輸精管及精囊ノ収縮ヲ起シ精液ハ先ツ精囊ヨリ出テ尿道ニ入り攝護腺液及「コウペル」氏腺ノ分泌液ヲ混シ次ニ空洞球筋及坐骨空洞筋ノ作用ニ由テ尿道ヨリ腔ノ上部及子宮外口ニ向テ射出ス

○卵子

但シ此時ニ方テ精液ノ膀胱内ニ逆流セサルハ鷄冠ノ膨脹シテ尿道ト膀胱トノ通路ヲ填塞スルニ由ル 交媾時ハ女體ニ於テモ生殖器ニ種々ノ反射的機轉ヲ起ス乃チ腔球ハ充脹シ粘液腺及「バルトリ」氏腺ハ滑液ヲ分泌シ以テ此部ヲ潤滑ナラシメ子宮ハ鉛直ノ位置ヲ取りハ少シク勃起スルニ由喇叭管ト俱ニ蠕動起テ發シ精液ノテ此位置ヲ取ル者トス

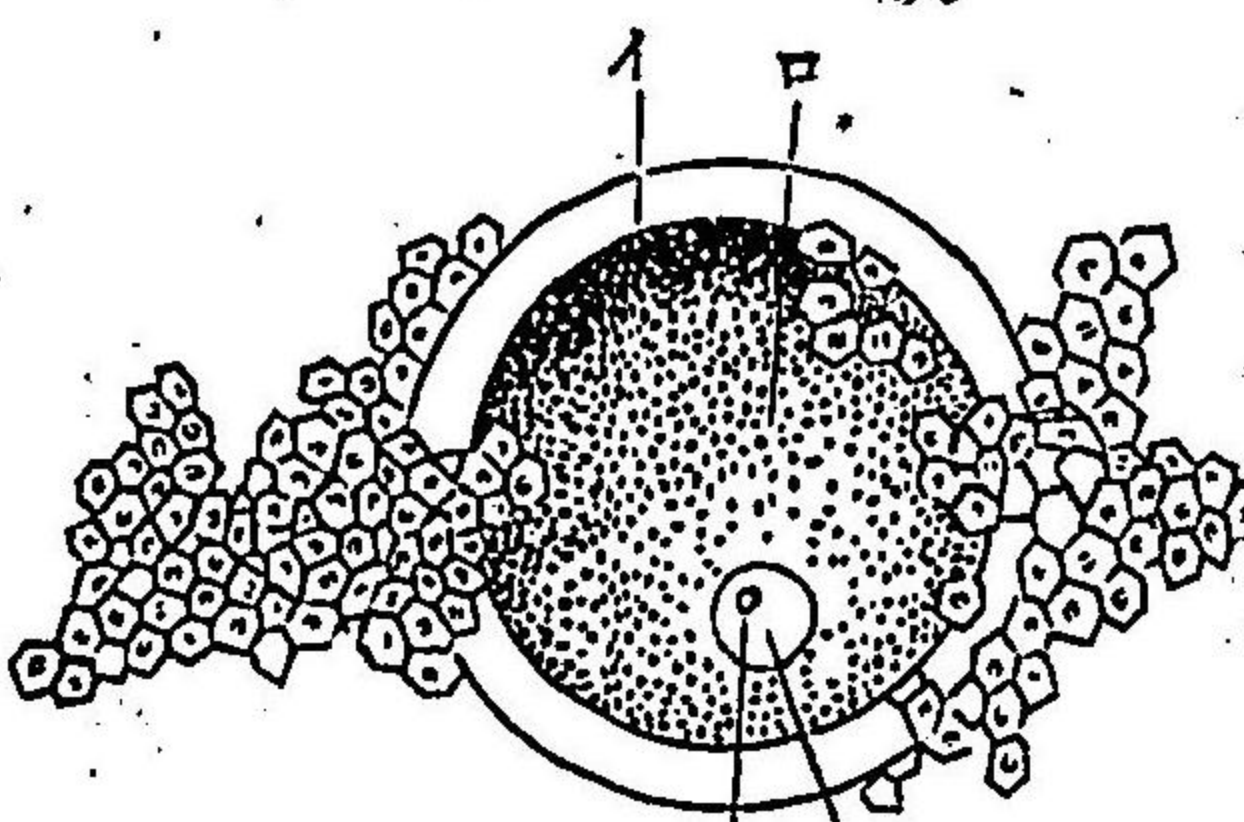
上行ヲ助ク 上文ノ機轉ハ固ヨリ受胎ニ緊要ナレトモ必ス之ヲ要スルニアラス何トナレハ人工ニ精液ヲ腔内ニ注入シ或ハ陰莖ヲ腔中ニ没入セヌシテ精液ヲ陰唇ノ間ニ灌注シ或ハ婦人昏睡中ニ姦淫シテ受胎シタル實例アレハナリ

(卵子) ハ小圓體ニシテ初メ「グラーフ」氏胞ノ中央ニ在レトモ



(第二十一圖)

卵子顆粒膜ノ一部ト  
俱ニ卵巢ヨリ排出セ  
ラレタル状ヲ示ス



其發育スルニ從テ漸ク顆粒膜  
ニ近ツキ透ニ之ニ觸接シテ許  
多ノ細胞ヲ以テ圍擁セラレ、  
丁ニ示ス  
トハ既ニ卵巢條下  
述ルカ如シ 人類ノ卵子ハ甚

ハタ細小ニシテ其直徑二百四十  
分應ノ一乃至三百四十分應ノ  
一ナリ 各卵子ハ外膜蛋質及  
胚胞ノ三部ヨリ成ル 外膜ハ  
其質甚タ透明ナルヲ以テ透

膜ト謂ヒ又直ニ蛋質ヲ包裹スルヲ以テ蛋質膜トモ謂フ  
蛋質ハ鳥卵ノ蛋黃ト類ナ同フスル者ニシテ許多ノ顆粒體

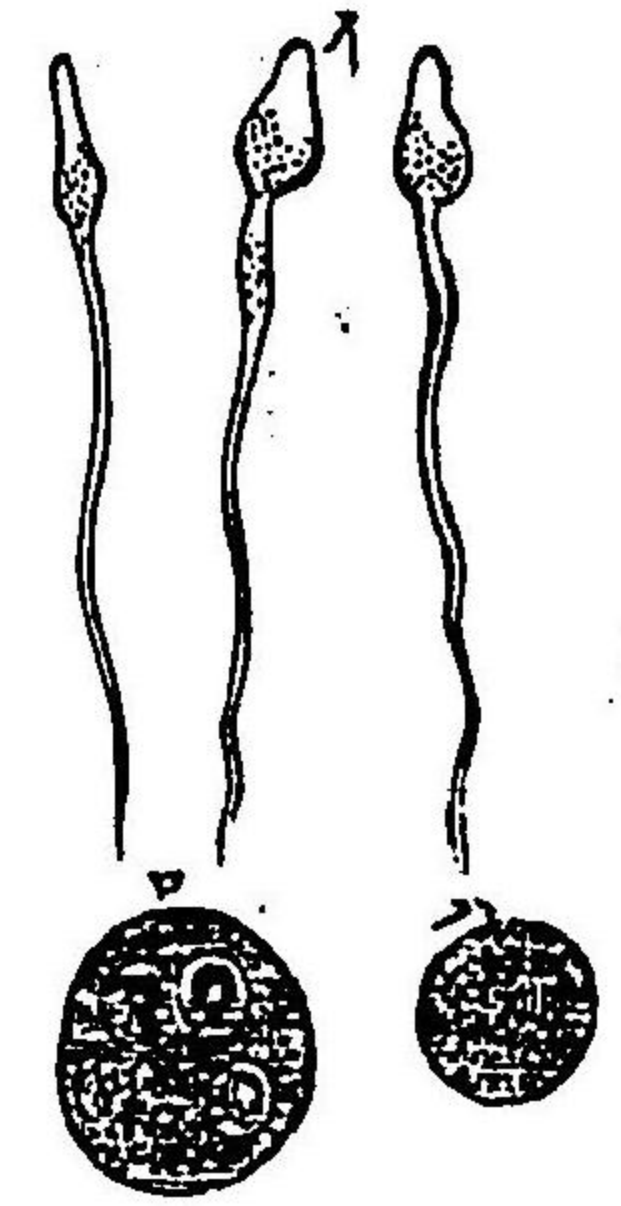
ヨリ成ル而シテ此顆粒ハ大小同シカラス大ナル者ハ周邊ニ  
アリテ尋常ノ脂肪球ニ類シ小ナル者ハ中邊ニ位シテ色素  
顆粒ニ似タリ 胚胞ハ蛋質中ニ位シ其直徑ハ大約七百二  
十分應ノ一ニシテ極メテ薄キ膜ヨリ成リ内ニ澄液ヲ貯ヘ  
其面ニ黄色ノ小點ヲ有ス之ヲ胚點ト謂フ其直徑ハ二千五  
百分應ノ一乃至三千五百分應ノ一アリ  
卵子將ニ生セントスルキハ卵巢ノ外邊ニ於テ許多ノ細胞  
集簇シ尋テ其周圍ニ透明ノ薄膜ヲ生ス蓋シ此膜ハ漸ク肥  
厚シテ「グラーフ」氏胞壁ト成リ其細胞ハ專ラ融化シテ流體  
トナレ其内更ニ一個ノ小球體ヲ生ス是レ即チ卵子ナリ  
但シ此卵子ハ「グラーフ」氏胞ヨリ生スル手將々之ニ先ツテ  
生スル手今猶疑團ノ中ニ在リ「グラーフ」氏胞ノ破綻シテ



○精液

卵子ノ喇叭管中ニ入ルノ方法ハ已ニ論述セシヲ以テ茲ニ  
 略ス 月經條下  
 (精液) ハ翠丸ヨリ分泌スル者ニシテ輸精管ニ由テ精囊ニ  
 入り交媾ノ時ヲ俟テ腔中ニ射出セラル、白色粘滑ノ液ニ  
 シテ一種ノ臭氣ヲ放ツ者ナリ 此液ハ透明ノ蛋白樣液及  
 一種異形ノ小體即チ所謂精系ト稱スル者ヨリ成ル 精系  
 ハ頭尾二部ヲ具ヘ頭ハ扁平ニシテ卵圓形或ハ梨子形ヲ呈  
 シ尾ハ纖糸ノ如クニシテ尖端ニ終ル而シテ全體ノ長サ五百  
 分應ノ一乃至至六百分應ノ一アリ 精系ハ一種走蛇狀ノ活  
 動ヲ爲シ十五分時間ニ大約一應ノ距離ヲ進行シ女體ニ在  
 テハ大約七日間活動シ體外ニ出ルモ長ク其運動ヲ持續ス  
 ル者トス 又精液中ニ圓形ノ小體アリ之ヲ精球ト謂フ三

(第二十二圖)



精系及精球ヲ  
 示ス  
 (イ)三個ノ精系  
 (ロ)五個ノ精球相集  
 テ外圍ニ薄膜ヲ  
 被フ者  
 (ハ)精球内ニ精系ア  
 ルヲ示ス

個乃至七個相集リ更ニ薄膜ヲ以テ  
 包裹セラル精系ハ此球内ニ生スル  
 者トス而シテ既ニ十分ニ成長スレハ  
 自ラ球内ヨリ出テ液中ニ入り始メ  
 テ自己ノ運動ヲ爲ス 時トシテハ  
 精系己ニ精球ヲ出ルモ包膜未タ破  
 レサルカ故ニ其内ニ蟠居スルヲ見  
 ルヲアリ

上文ノ如キ精系發生ノ順次ヲ見  
 ト欲セハ宜シク翠丸及輸精管ヨリ  
 精液ヲ取テ之ヲ檢スベシ 時トシテハ精液中精系ヲ含マ  
 ザルヲアリ是レ疾病或ハ年老ニ因ル者ニシテ設令交媾ス



ルモ受胎セシムルヲ能ハス  
 (受胎) 交媾或ハ他ノ媒介ニ由テ精液一タヒ腔中ニ入レハ  
 其精糸ハ專ラ自己ノ運動ニ由テ上行スト雖ヒ亦タ子宮及  
 喇叭管ニ存スル茸毛上皮ノ作用ト両器ノ蠕動機トニ由テ  
 助ケラル、カ如シ而シテ精糸ノ卵子ト相會ヒ相觸ル、位置  
 ハ何處ニ在ルヤ未タ確定セサレト通常喇叭管ノ外半或ハ  
 卵巢ニ在ルカ如シ何トナレハ獸類ニ於テハ其交媾スルノ  
 後卵巢ノ表面ニ精糸アルヲ發見シ加之人體ニ於テハ罕シ  
 ニ子宮外妊娠ノ腹腔妊娠、卵巢妊娠及喇叭管妊娠  
 一説ニ據レハ卵子下リテ喇叭管ノ内端ニ至レハ受胎ス  
 ヘキ性力ヲ失フ者トセリ「スミス」氏ハ卵子下テ子宮下部ニ  
 ルヲ信  
 セリ

○孕卵发育

精系既ニ卵子ニ達スレハ管ニ透瑩膜ノ外面ニ粘着スルノ  
 ミナヲス其内ニ透入シテ蛋質ニ直接シ或ハ之ト融化スル  
 カ如シ而シテ其透入スル方法ノ如キハ下等動物ノ卵子ニ在  
 テハ一個ノ細孔アルカ故ニ之ヨリ入ルト雖ヒ人類及諸他  
 ノ動物ニ在テハ其卵子ニ斯ノ如キ細孔アルヲ見ス故ニ精  
 糸恐クハ透瑩膜ヲ穿テ其中ニ入ルカ如シ而シ一旦卵中ニ  
 入レハ速ニ消滅シテ復タ其痕跡ヲ見サルニ至ル

○第五章

孕卵发育

卵子一タヒ精糸ト觸接スレハ成形ノ機直ニ萌起シ速ニ入



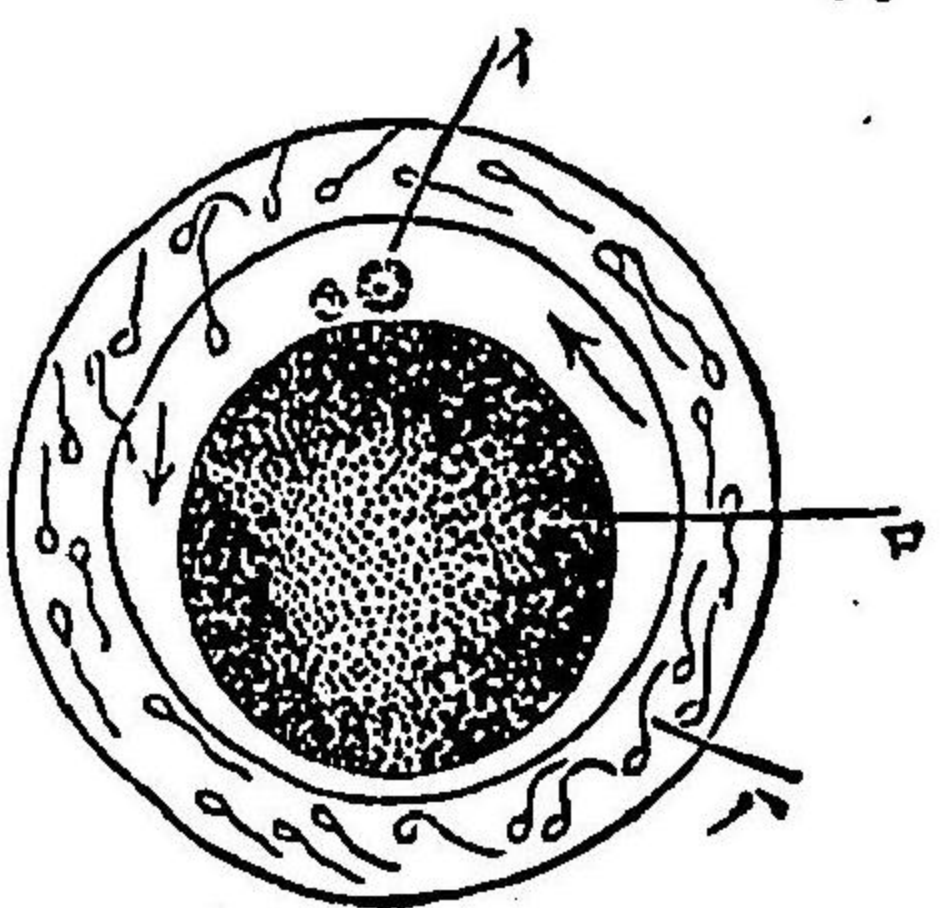
身ノ原體ヲ生ス之ヲ胚胎ト謂フ胚胎ハ尙ホ發育シテ止マ  
ズ遂ニ完然タル身體ヲ成ス之ヲ胎兒ト謂フ受胎後通常二  
百八十日ヲ經テ母體ヲ去ル之ヲ分娩ト謂フ 但シ人卵子  
ニ就テハ其發育ノ變化ヲ親シク實檢セシ者アルヲ聞カス  
然レモ方今胎生學家ノ論定スル所ニ據レハ人卵子ノ發育  
スルヤ猶ホ他ノ動物ニ於ケルカ如ク敢テ異ナルコトナシト  
云フ

○最初ノ變化

(孕卵子最初ノ變化) 孕卵子ハ喇叭管ノ外半ニ於テ早ク已  
ニ變化ヲ受ク 胚胎自ラ消失シ 但シ胚胎ノ消失ハ敢テ孕  
トシハ「グラーフ」氏胞ノ破綻ニ 精系ハ透瑩膜ニ穿入シ蛋白質  
先テ已ニ之ヲ消失スルコトアリ 即チ蛋白質ト透ニ空隙ヲ生  
ハ稍縮小シテ廻轉ヲ極メ其外圍 瑩膜トノ間ニ 空隙ヲ生  
シ其中ニ一二ノ透明球ヲ生ス之レヲ分裂球ト謂フ 上圖ニ

(第二十三圖)

家兔ノ孕卵  
子ヲ示ス



- (イ) 分裂球
- (ロ) 蛋白質
- (ハ) 透瑩膜

消滅シ之ニ代テ新ニ蛋白質ノ一層ヲ透瑩膜ノ外面ニ生シ  
白兔ノ卵子ニ在テ 蛋白質ハ漸ク分裂シテ無數ノ小球ト爲ル  
ハ殊ニ著シトス 之ヲ蛋白質ノ分裂蕃殖ト云フ

(分裂蕃殖) 蛋白質將ニ分裂セントスル時ハ先ツ其周圍ニ一  
溝ヲ生シテ全體ヲ環繞ス此溝漸ク深入スルヲ以テ蛋白質分  
ソテ同等ノ二體トナリ次テ各半復タ分ソテ二體トナリ次

○分裂蕃殖

其用未ダ詳ナラスト雖モ一

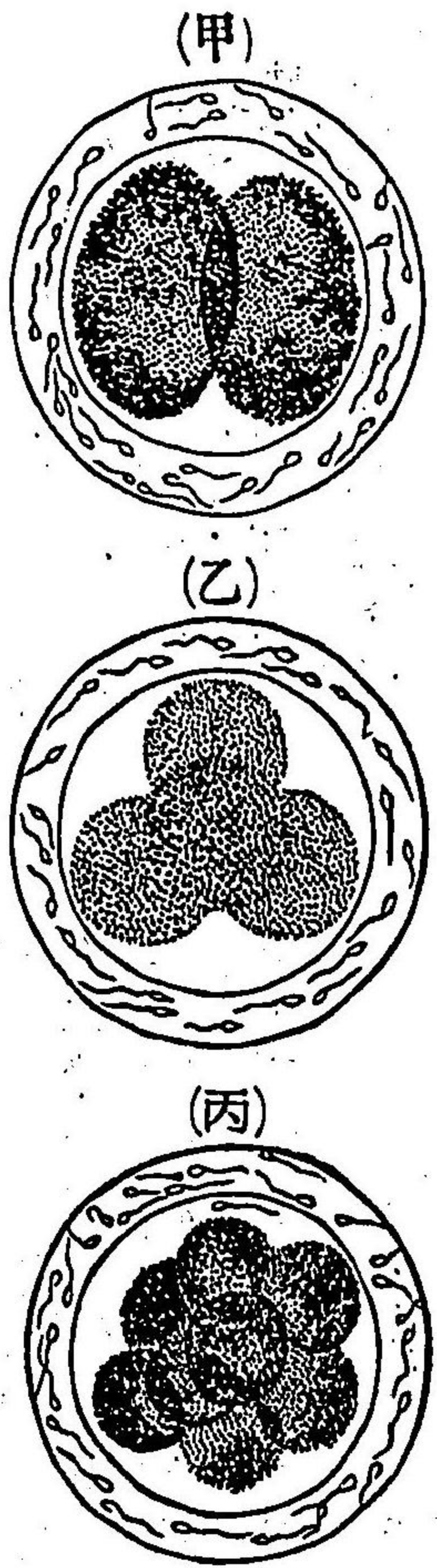
説ニ據レハ恐クハ蛋白質ノ分  
裂蕃殖ニ關係スル者ナラン

孕卵子既ニ喇叭管ノ内半ニ  
至レハ外圍ノ顆粒「グラーフ」  
粒膜ヨリ來ル者ニシハ全ク  
テ第二十一圖ニ示ス



(第二十四圖)

孕卵子中蛋質ノ分裂蕃殖ヲ示ス

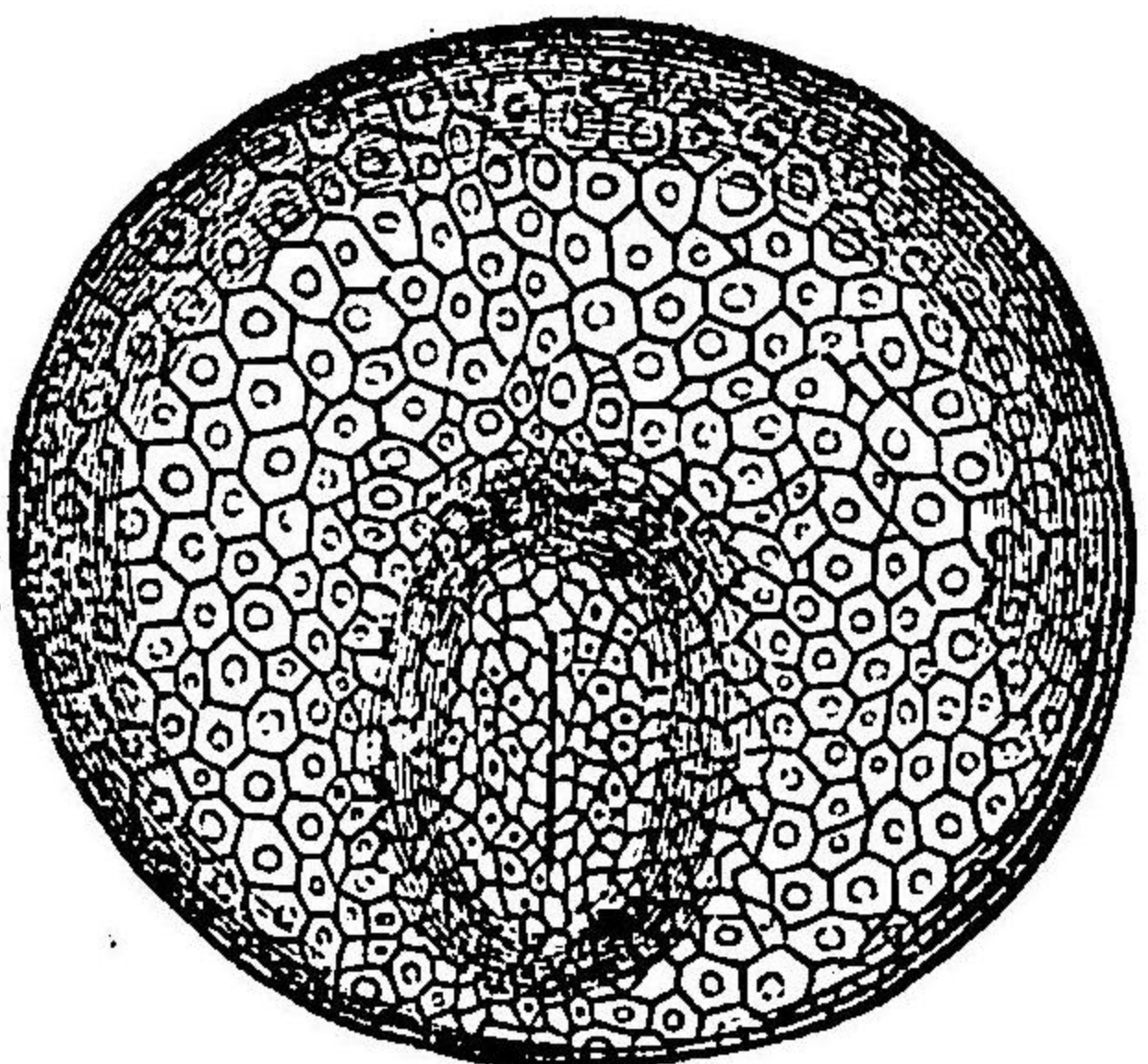


ニ分レテ四體トナリ次ニ分レテ八體トナリ次ニ分レテ十六體トナル斯ノ如ク蛋質ハ反復分裂シテ止マヌ故ニ下テ喇叭管ノ内端ニ達スル比ニハ無數ノ小體トナリ其狀恰モ桑實ノ如シ此小體ヲ名ケテ胚球ト謂フ而シテ其胚球ハ各中

央ニ透明ノ圓胞ヲ含メ且未ダ膜壁ヲ有セサルヲ以テ尋常ノ細胞ト異ナリトス

(第二十五圖)

孕卵子ノ外面特ニ胚斑ヲ示ス



卵子既ニ子宮ニ達スレハ彼喇叭管中ニ於テ新ニ得タル所ノ蛋白質ヲ失ヒ且ツ透壁膜モ亦非薄トナリ其面ニ許多ノ小突起ヲ生ス是ニ於テ前名ヲ改稱シ之ヲ原脈絡膜ゾリミチウツゴリキト名ク加之卵子全體ハ漸ク増大シ蛋質ヲ胚球ヨリ成ルハ廻轉シテ止マス胚球ノ少數ハ消失溶滅シテ液體トナ



リ其多數ハ各周圍ニ膜壁ヲ生シ彼透明ノ圓胞ハ化シテ核トナリ是ニ於テ始メテ眞ノ細胞ニ變シ漸ク表面ニ集積シ交互ノ厭迫ニ由テ五角形或ハ六角形ヲ呈シ其狀恰カモ第二十五圖ニ示スカ如シ

○胚膜

(胚膜) 上文ニ示スカ如ク胚球ハ眞ノ細胞ト爲リ漸ク蛋白質ノ表面即チ原脈絡膜ノ内面ニ相集リ疊々重積シテ遂ニ一層ヲ成ス名テ胚膜ト云フ、此膜速ニ分裂シテ内外二層ト爲ル而シ其内層ヲ内胚膜ト云ヒ外層ヲ外胚膜ト云フ、次ニ内外二胚膜ノ間ニ於テ更ニ一層ヲ生ス之ヲ中胚膜ト謂フ此膜ノ發生方法ニ至テハ但シ此膜ハ唯胚斑後ニ詳ニ限局シテ他ノ二膜ノ如ク蛋白質ノ全體ヲ圍擁セス、今ヤ試ニ卵子ヲ横斷シテ其剖面ヲ檢スレハ其壁ノ四層ヨリ成リ内

空ニシテ澄液ヲ充テ許多ノ胚球ヲ含ムヲ見ル而シ其四層ハ一ニ曰ク原脈絡膜二ニ曰ク外胚膜三ニ曰ク中胚膜四ニ曰ク内胚膜是ナリ就中外中内ノ三胚膜ハ胎兒ノ原基ト爲リ身體ノ諸器及附屬器皆チ之ヨリ生ス、各胚膜ヨリ發生スル所ノ組織ハ大約左ノ如シ

(一)外胚膜ハ腦脊髓中樞、眼ノ網膜、耳ノ膜、樣、腮、鼻ノ粘膜、表皮、皮腺、毛髮、爪甲、乳腺、臍胞ノ外層及羊膜ノ内層ヲ形成ス

(二)中胚膜ハ骨格、隨意筋、筋膜、諸神經、循環系、血球、真皮、漿膜、消食管ノ纖維層、尿管、生殖器、羊膜ノ外層、臍胞ノ外層、脈絡膜及胎盤ノ内部ヲ構造ス

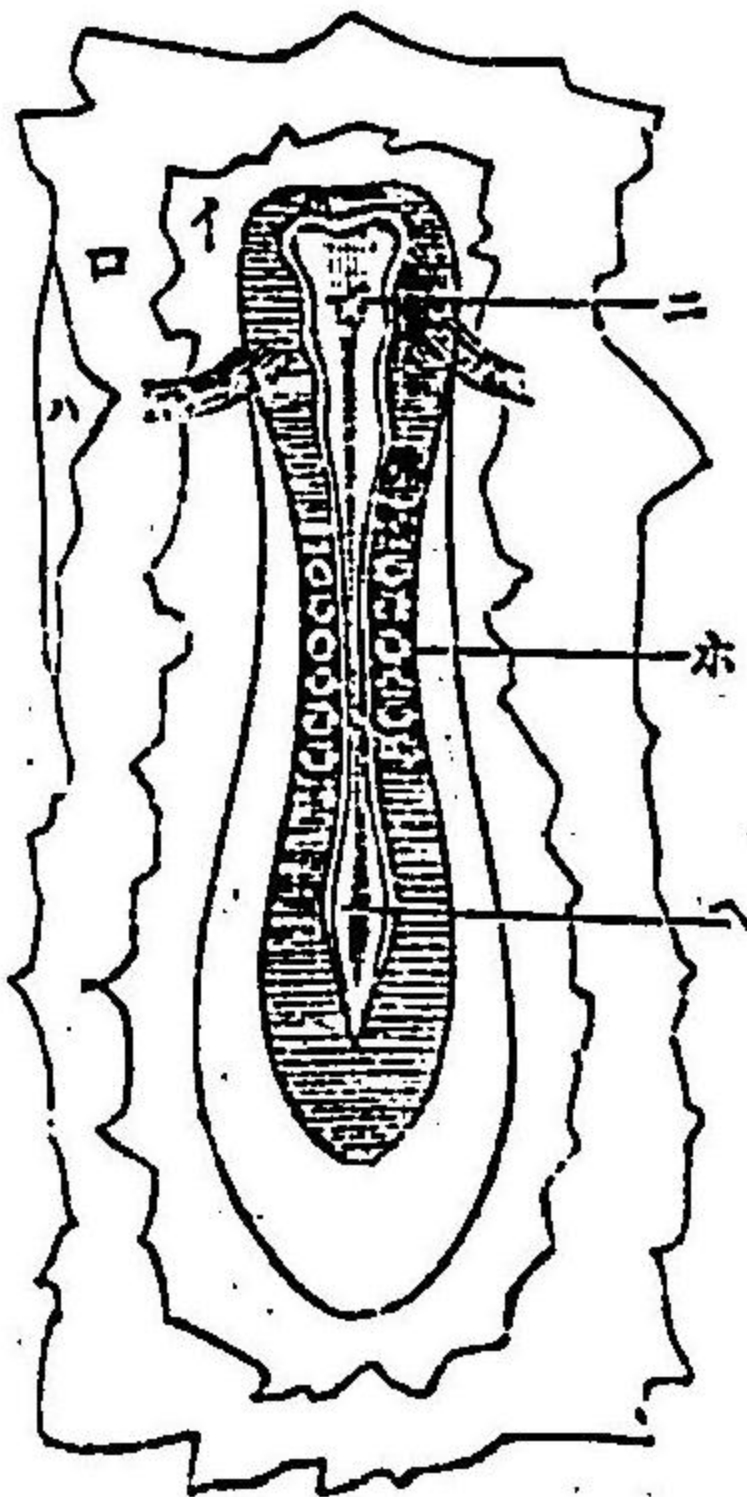
(三)内胚膜ハ消食管ノ粘膜、同諸腺、肺臟ノ粘膜、肝臟、脾ノ排







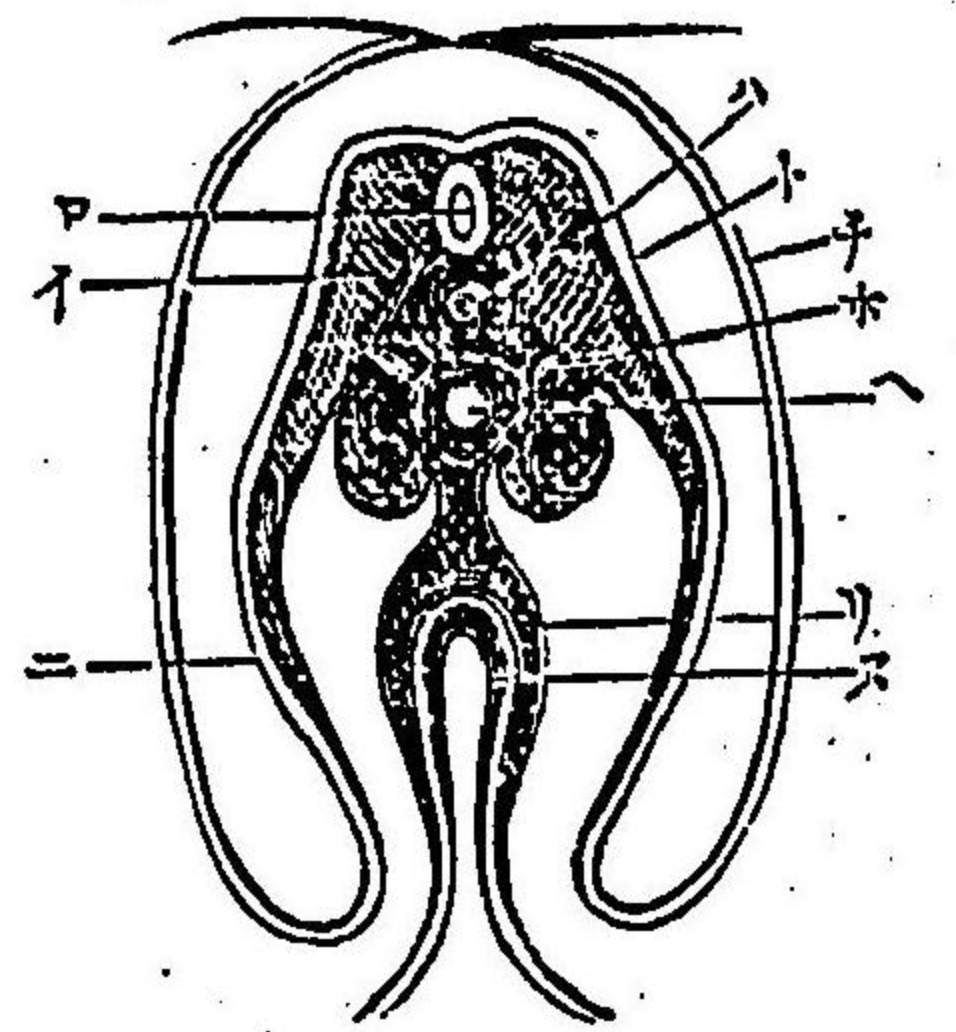
リ外面ハ薄膜ヲ以テ  
 被ハル 椎索ノ各側  
 ニ一簇ノ細胞アリ述  
 ニ横線數條ヲ生シ分  
 レテ數枚ノ方板トナ  
 ル之ヲ原椎板ト謂フ  
 椎骨之ヨリ生ス 第十七  
 圖ニ中胚膜ノ側部ハ原椎板ノ發生ト同時ニ内外二層 第十六  
 圖ノ乙ニ分裂ス外層ヲ胴板ト謂ヒ内層ヲ腸纖維板ト謂フ  
 (チリ)ニ存スル空隙ヲ助腹膜腔ト云フ而シテ胴板ハ  
 内外二層ノ間ニ存スル空隙ヲ助腹膜腔ト云フ而シテ胴板ハ



(第二十七圖) 狗胎子ノ髓管及原椎ヲ示ス  
 イ 外胚膜  
 ハ 内胚膜  
 ホ 原椎  
 ロ 中胚膜  
 ニ 髓管上端  
 ハ 髓管下端

(第二十八圖) 鶏子ヲ横斷シテ其構造ヲ示ス  
 外胚膜ト俱ニ内方ニ變  
 入シ左右相癒閉シテ胴

イ 中胚膜  
 ロ 椎管  
 ハ 索  
 ニ 胴板  
 ホ 靜脈  
 ヘ 大動脈  
 ト 外胚膜  
 チ 羊膜  
 リ 腸纖維板  
 ス 内胚膜



壁ヲ形成シ腸纖維層ハ  
 内胚膜 同圖ノ(ハ)ト俱ニ  
 内方ニ彎入シテ消化管  
 ヲ構成ス尙ホ各板ノ關  
 係ハ宜シク上圖ニ就テ  
 見ル可シ

上文ニ述フル所ハ胚胎發生ノ大略ニ係ル其他各器ノ發生  
 ハ下章ニ論述セントス

○第七章

胚胎ノ附屬器即チ諸被膜



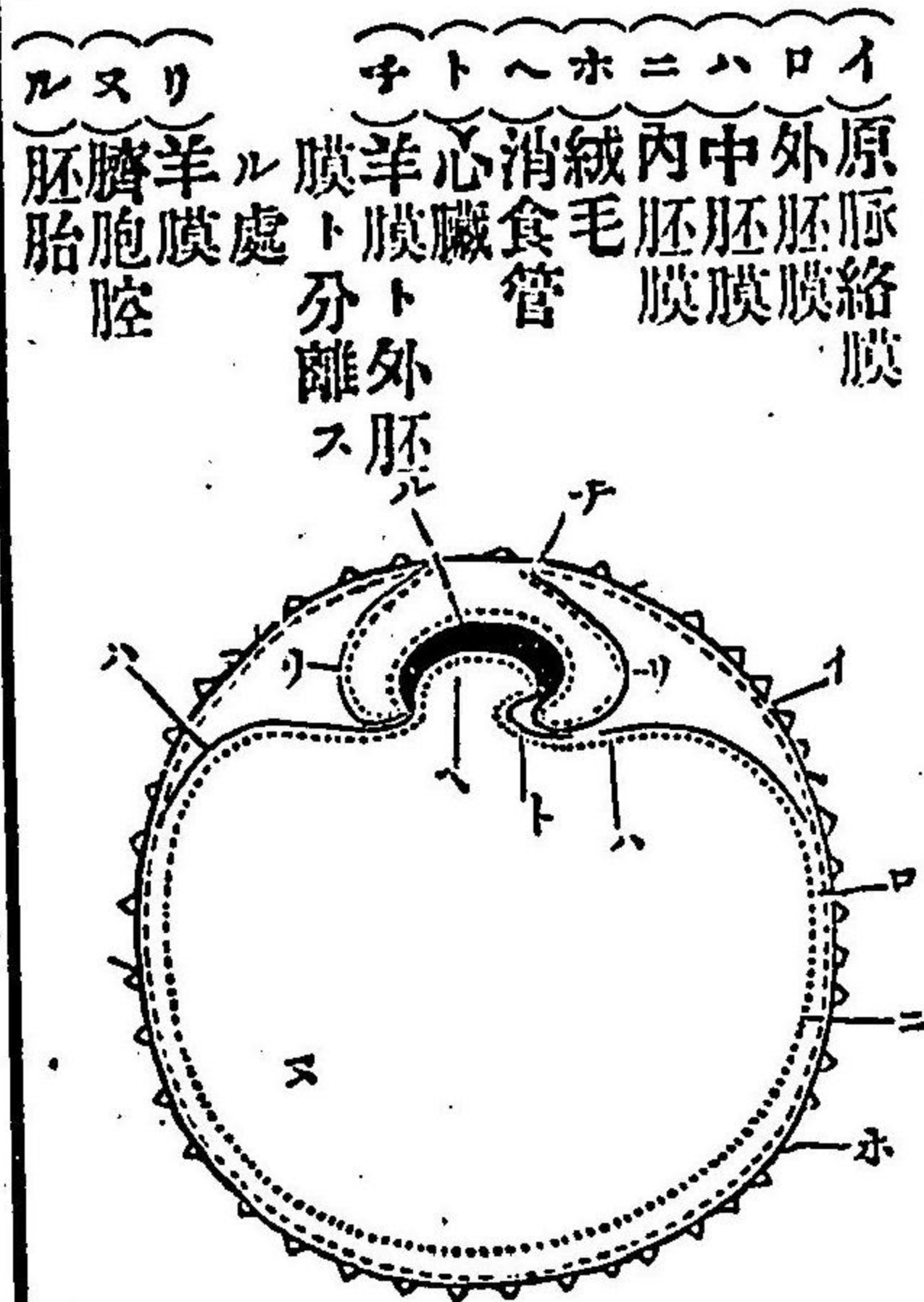
○臍胞

胚胎ハ數個ノ附屬器ヲ有ス即チ臍胞、羊膜、尿囊及脈絡膜是ナリ左ニ各器ノ發生ヲ述フ

(臍胞) 胴壁及消食管ノ發生ハ前既ニ之ヲ述フ之ト同時ニ(第二十九圖)

孕卵子ノ縦割シテ臍胞及羊膜嚢ノ發生ヲ示ス  
ノ一部縮窄シ其内腔分

内胚膜(第二十八圖ノ(ス))  
ノ内面ヲ被ヒ(第二十九圖ノ(ハ))  
外部ハ廣クシテ胚胎外ニ在テ囊狀ノ(ス)ヲ成ス  
之ヲ臍胞ト云フ而シテ其  
窄縮部ハ管狀ヲ成ス(第三



○羊膜

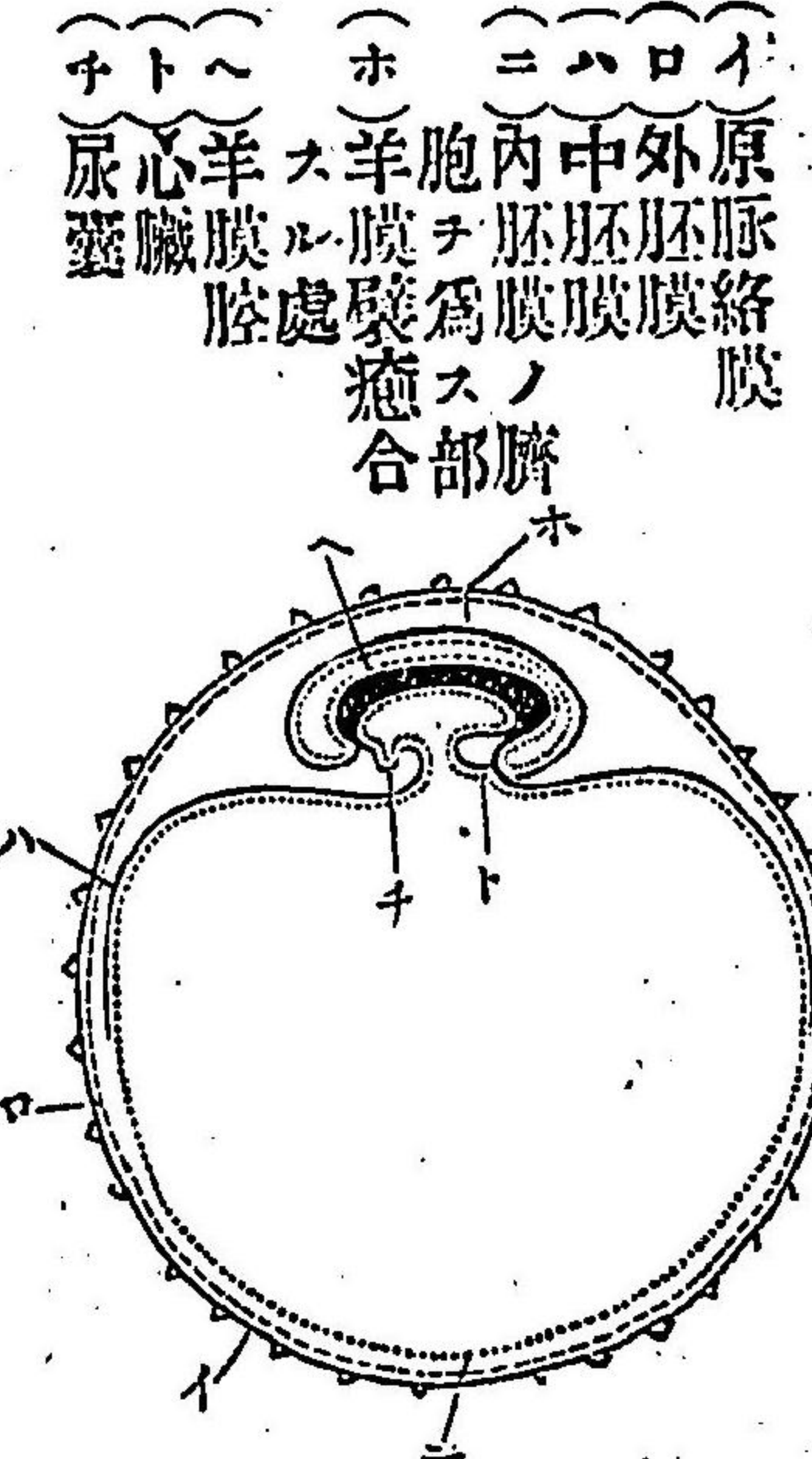
十一圖ニ最之レヲ蛋質管ト謂フ 臍胞ハ蛋質ヲ含ミ最初モ明ナリ  
ハ胚胎ノ榮養ニ充ツルト雖モ尿囊(第二十九圖)ニ詳ニ發出スルニ至レハ漸ク萎縮シテ臍帶中ニ遺存ス 臍胞ハ其面ニ血管ヲ生ス之ヲ臍腸間膜血管ト云ヒ門脈ノ原始トス

(羊膜) 胚胎ノ發育スルニ從ヒ外胚膜ト中胚膜ノ外板トハ其前後兩端及兩側ヨリ複襞(第二十九圖)ヲ成シ後方ニ向テ膨出スルカ故ニ胚胎ハ自ラ此襞ノ間ニ沈没ス(第二十九圖ノ(ル)) 此襞ハ漸次ニ突出シテ其縁漸ク相近キ遂ニ胚胎ノ背部ニ於テ連接癒合シテ内外二枚ニ分レ(第三十圖ノ(ホ)) 其内層ハ胚胎ヲ包裹ス之ヲ眞羊膜ト云ヒ以下單ニ羊膜ト云フ 内ニ清液ヲ充ツ外層ノ(ロ)ヲ假羊膜ト云ヒ原脈絡膜ノ内面ニ密着シ脈絡膜ノ一層トナル 羊膜ハ澄明ノ液ヲ分泌シテ其内ニ貯フ之ヲ羊膜液



(第三十圖)

羊膜襞已ニ癒合シ尿囊將ニ發セントスル者ヲ示ス



ト謂ヒ其内ニ胚胎ヲ深フ 満月ニ至レハ其量八号乃至十六号

アリ 此液ノ重量初メハ胚胎ヨリ重ク中比ハ同量ニシテ満月ニ至レハ胎兒重量ノ六分一乃至十二分ノ

一ニ等シ 妊娠中子宮ノ後屈スル者ニ在テハ此液ヲ抽出シテ子宮ノ容積ヲ減シ以テ其位置ヲ整復スルコトアリ 羊膜液ハ初メ透明ナレトモ時月ヲ經ルニ從テ不透明ニ變ス 此液ノ成分ハ專ラ水ヨリ成レトモ蛋白質、ケラチン、磷酸石灰、

鹽化會實母及「アノモニア」ヲ含ミ「アルカリ」性ノ反應ヲ呈ス 此液ノ作用ハ種々一ナラス左ニ其大略ヲ舉グ

(一) 妊娠ノ初期ニ於テハ胚胎ヲ榮養スル者ノ如シ何トナレハ養分ヲ含ムコト末期ニ於ケルヨリモ多クレハナリ

(二) 兒體ヲ保護シテ外來ノ壓迫或ハ擊動ヲ避ケシム

(三) 胎兒ヲシテ直ニ子宮ヲ壓迫スルノ勢力ヲ減シ且ツ之ヲ平等ナラシム

○尿囊

(四) 分娩時ニ在テハ胎膜ヲ緊張シテ子宮口ノ擴張ヲ助ケ且ツ其破綻スル後ハ産道ヲ滋潤粘滑ナラシム

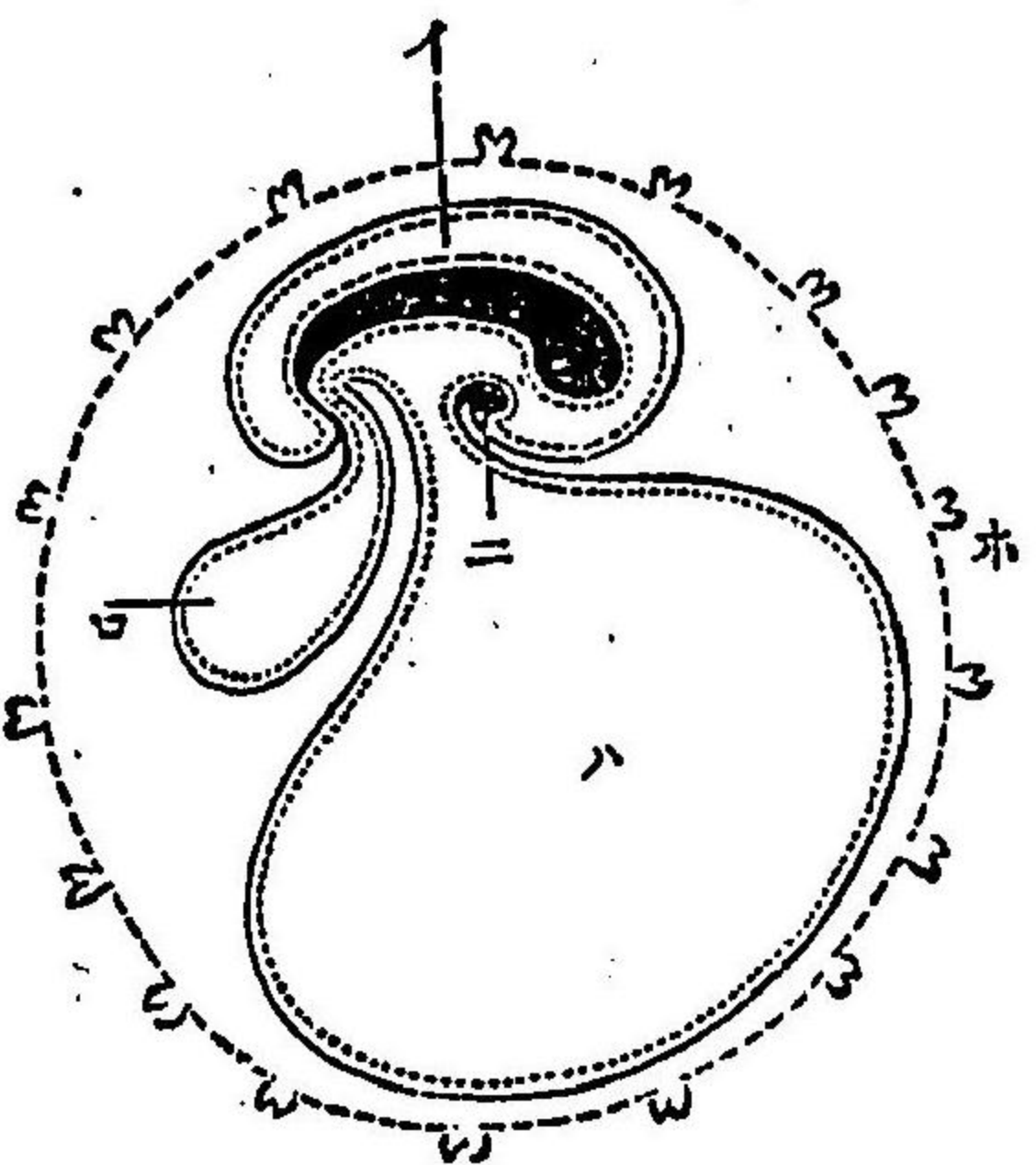
(尿囊) 消食管ノ下部ヨリ梨子形ノ小囊ヲ生ス 第三十一之ヲ尿囊ト謂フ内胚膜ト中胚膜ノ内層ヨリ成ル 此囊漸次ニ増大シテ眞假ニ羊膜ノ間ニ入りニ示ス 第三十二圖 假羊膜ニ密



(第三十一圖)

假羊膜ハ原脈絡膜ニ癒合シ尿管ハ臍胞ト眞羊膜ノ間ニ突出ス

(イ)羊膜 (ロ)尿管 (ハ)臍胞 (ニ)心臓 (ホ)原脈絡膜ト假羊膜ト癒合スル者



後ハ腹壁内面ノ中線ニ在リテ膀胱底ヨリ臍ニ達ス 尿管ハ初メ「ウオルフ」氏體 第四十七

着シテ延長シ許多ノ血管ヲ生ス之ノナ臍帶血管ノ原始トス 尿管ハ胚胎ノ發育スルニ從ヒ化シテ胎盤ノ一部ト成ル 胚胎ノ腹壁即チ胴板ノ癒合スル時ニ當ツテ尿管ハ内外二部ニ分レ一部ハ腹内ニ在リ一部ハ腹外ニ位ス 甲部ノ下端ハ膀胱トナリ上端ハ縮小シテ索狀ヲ成シ膀胱ノ繫鞅帶即チ所謂「ユラカス」ト成リ出產

○脈絡膜

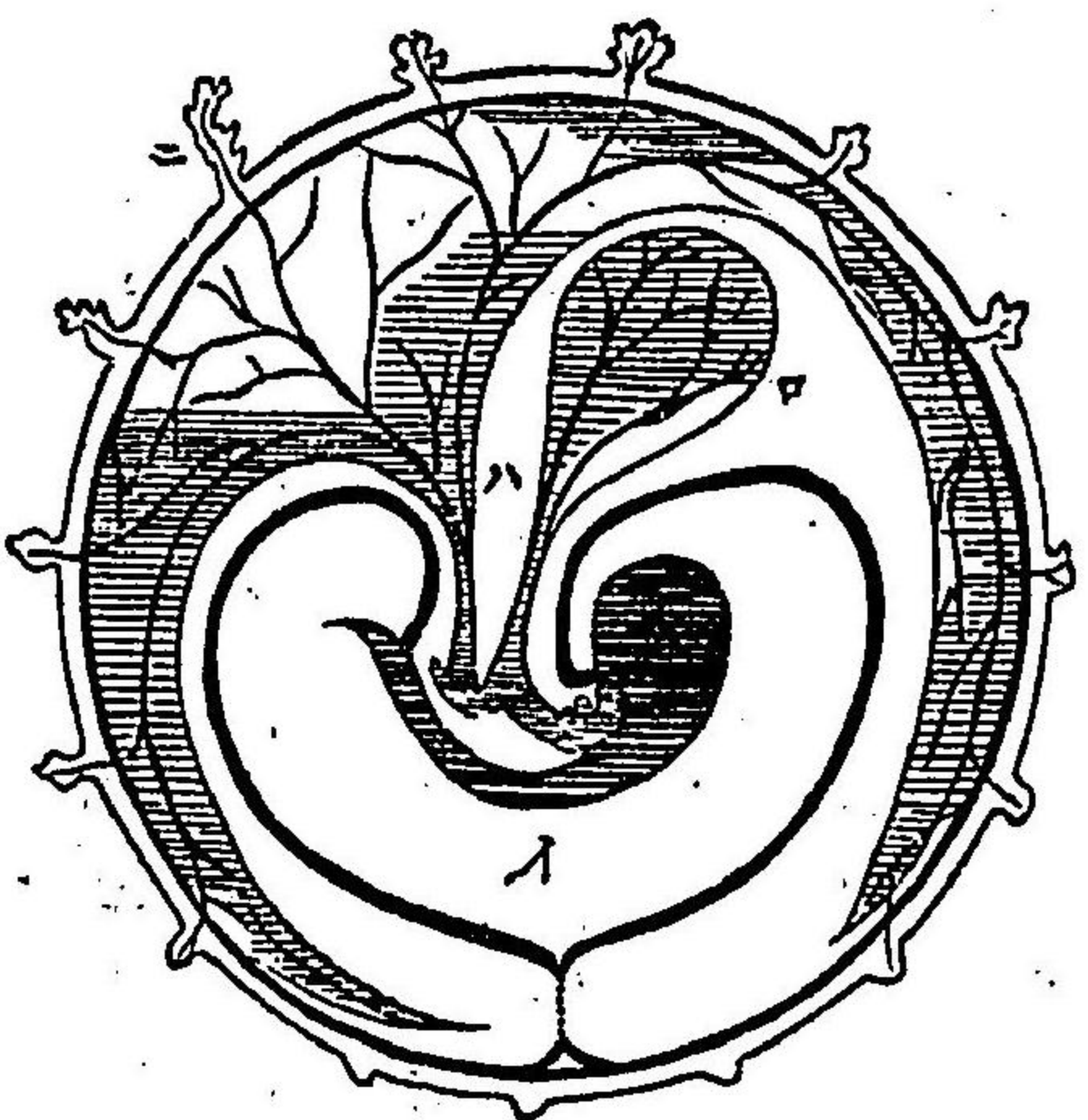
圖ニ分泌液ヲ受クレテ腎臟既ニ發生スルニ至レハ其分泌物ヲ納ル

(脈絡膜) 孕卵子ノ最外膜即チ透瑩膜ハ元來透明ナレト卵

(第三十二圖)

尿管延長シテ血管ヲ生シ其末梢已ニ絨毛ニ入ルヲ示ス

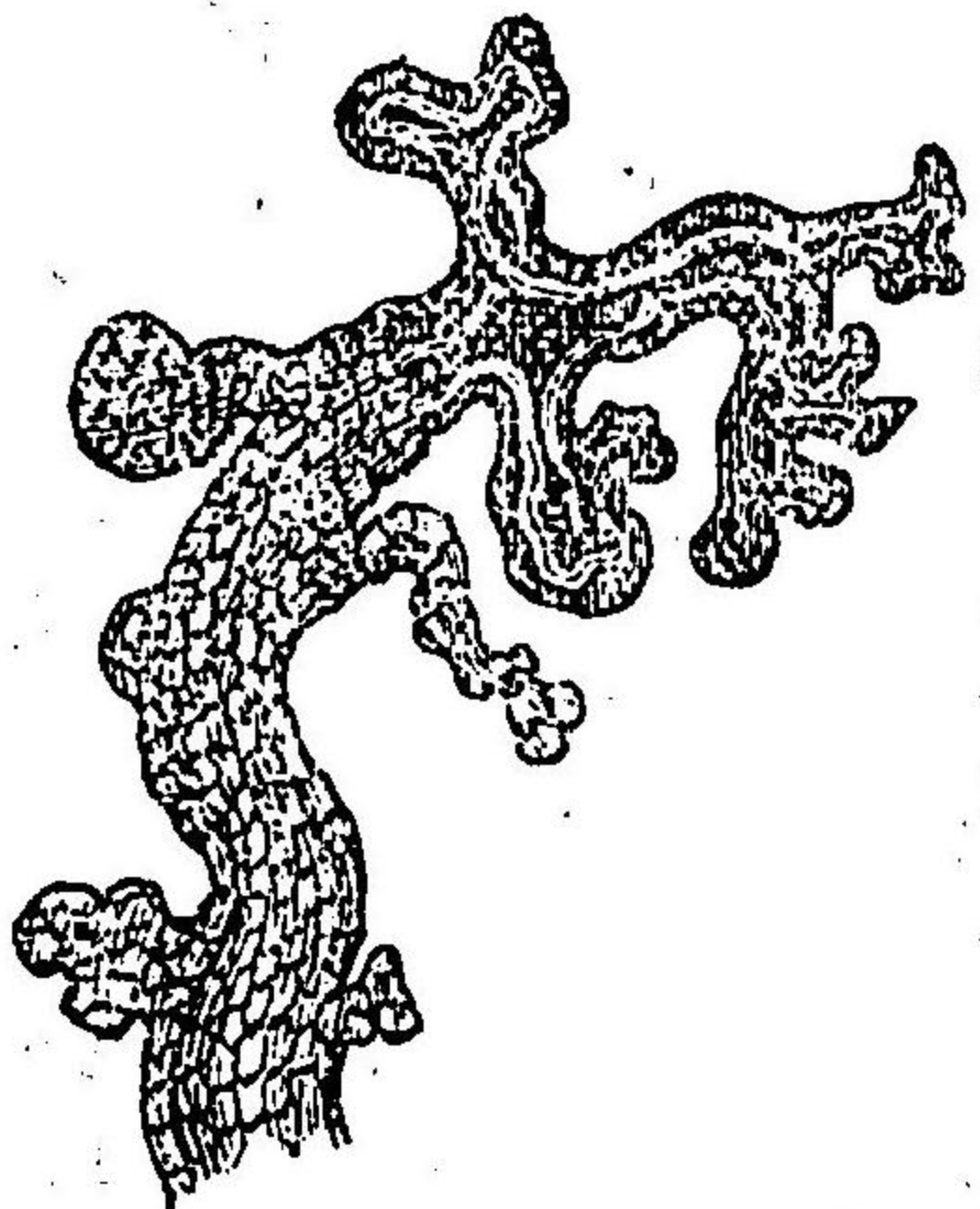
(イ)羊膜 (ロ)臍胞 (ハ)尿管 (ニ)絨毛





毛ト云フ 此時ニ至レハ透瑩膜ト稱セスシテ之ヲ原脈絡膜ト謂フ 胚胎ノ發育スルニ從ヒ假羊膜及尿囊ハ原脈絡膜ノ内面ニ密接シ一枚ノ厚膜ト爲ル名テ脈絡膜ト云フ 絨毛ハ許多ノ細胞ヨリ成リ管狀ヲナシテ盲端ニ終レハ漸ク長シテ漸ク枝チ生シ尿囊ノ血

絨毛中血管ノ係蹄狀ヲ呈スル狀ヲ示ス



脈漸ク延長シテ其内ニ入り係蹄狀ヲ成ス 第三十三圖ニ示ス 絨毛ハ初メ養分ヲ子宮内ヨリ吸收スレハ已ニ血管チ生シテ子宮血管ト近接スルニ至レハ胎盤條下直ニ之チ母血ヨリ攝取シテ胎兒ニ運送ス 絨毛ハ初メ卵子ノ全面ニ存スレ

ハ胚胎ノ發育スルニ從テ過半ハ消滅シ殘餘ハ愈發生シテ遂ニ胎盤ノ一部ヲ形成ス 第三十六圖ヲ參觀スヘシ

○第八章

子宮粘膜炎ノ變化

○子宮粘膜炎ノ變化

胚胎ト母體トノ連絡ハ子宮粘膜炎ノ變化ニ因テ始テ之ヲ完了ス 夫レ孕卵子降リテ子宮ニ入ルニ先チ子宮粘膜炎ハ早シ己ニ變厚軟化シテ海綿狀ヲ成ス是レ專ラ粘膜炎上皮下ノ増殖スルト子宮腺ノ變大スルトニ因ル 本文ノ變化ハ子宮外一ナ 斯ノ如キ變厚軟化セル粘膜炎ヲ名ケテ脱落膜ト謂フ 蓋シ分娩時ニ於テ剝離脱出スルカ故ニ此名アリ 脱落膜



○眞脱落膜

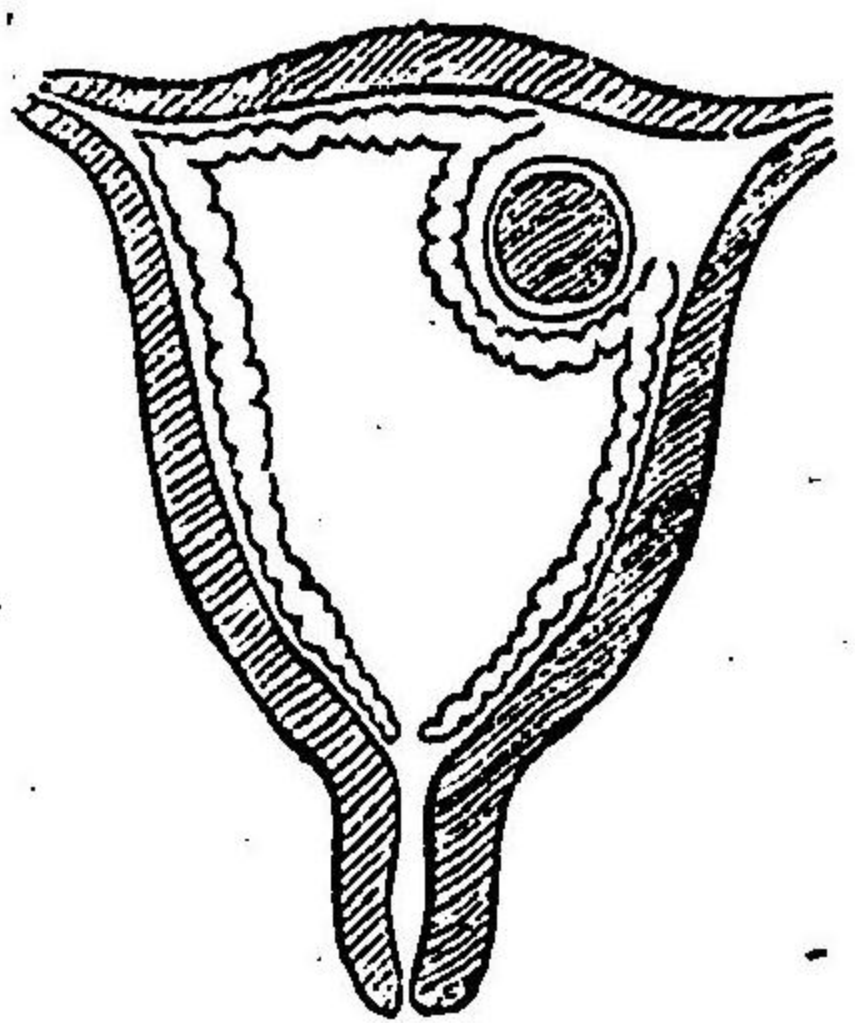
チ二部ニ區分ス曰ク眞脱落膜曰ク翻轉脱落膜是ナリ  
 (一)眞脱落膜 一ニ子宮脱落膜 第三十六ト名ク子宮體腔管  
 ヲ除ク被ヒ外面ハ粗糙ニシテ許多ノ糸狀突起ト小圓隆起  
 トチ有ス甲ハ斷破セル蜂巢織ノ纖維ニシテ乙ハ子宮腺ノ  
 底部ナリ内面ハ上皮ヲ具ヘ滑澤ナレヒ許多ノ皺襞アリテ  
 紆曲廻轉シ其狀恰モ腦髓ノ表面ニ似タリ加之此面ニハ無  
 數ノ細孔アルヲ見ル之ヲ子宮腺口トス

○翻轉脱落膜

(二)翻轉脱落膜 一ニ卵子脱落膜 第三十六ト名ク子宮粘膜  
 ノ延長シテ卵子ヲ包裹スル者ニシテ外面ハ前膜ノ内面ト  
 異ナルコトナク内面ハ許多ノ細窩チ有ス即チ子宮腺口ニシ  
 テ絨毛ヲ啣ム者ナリ 此膜ノ發生方法ニ就テハ古來諸説  
 紛々タリ ウヰリアム、ホントル氏ハ卵子喇叭管チ下テ子

(第三十四圖)

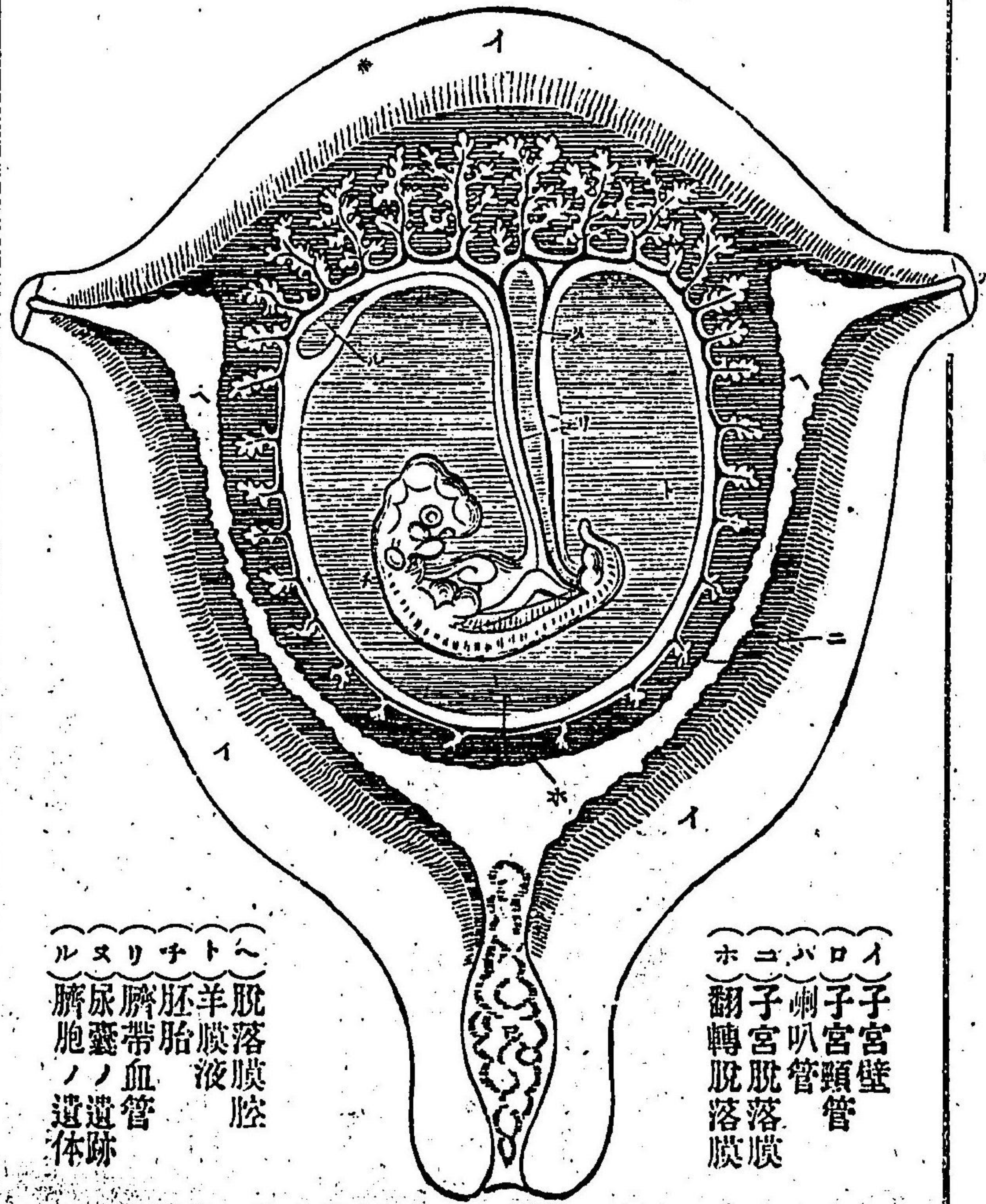
翻轉脱落膜ノ發生ヲ  
 示ス ホントル氏ニ從フ



宮ニ入ル時ニ當テ其粘膜チ厭迫  
 シ之ヲ子宮壁ヨリ剝離シテ其下  
 ニ舍ルニ由テ成ル者トシ 第三十  
 四圖ニ  
 示ス フアルレ氏ハ 卵子降テ子宮ニ  
 達シ其腺口ニ入り漸ク發育スル  
 ニ從ヒ變厚軟化セル粘膜チ周圍  
 ヲ引シテ其面ヲ被フニ由テ  
 成ル者トセリ然レヒ方今世人ノ  
 最モ信用スル所ノ説ハ全ク前ノ二説ト異ナリ 其説ニ據  
 レハ卵子降テ子宮ニ入レハ先ク粘膜皺襞ノ間ニ舍リ 下圖  
 (甲)  
 次ニ其皺襞漸ク發育成長シテ遂ニ卵子ノ全體ヲ包裹スル  
 者トス 下圖  
 (乙)(丙) 翻轉脱落膜ハ斯ノ如ク已ニ全ク卵子ヲ圍



(圖六十三第)



イ 子宮壁  
ロ 子宮頸管  
ハ 喇叭管  
ニ 子宮脱落膜  
ホ 翻轉脱落膜

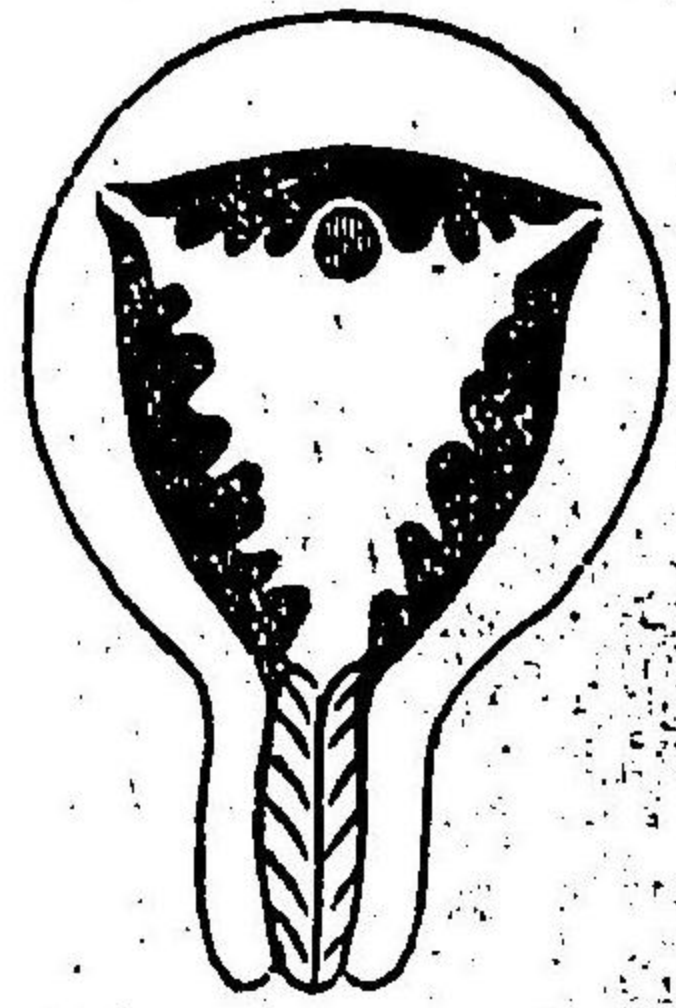
イ 子宮壁  
ロ 子宮頸管  
ハ 喇叭管  
ニ 子宮脱落膜  
ホ 翻轉脱落膜

百十五

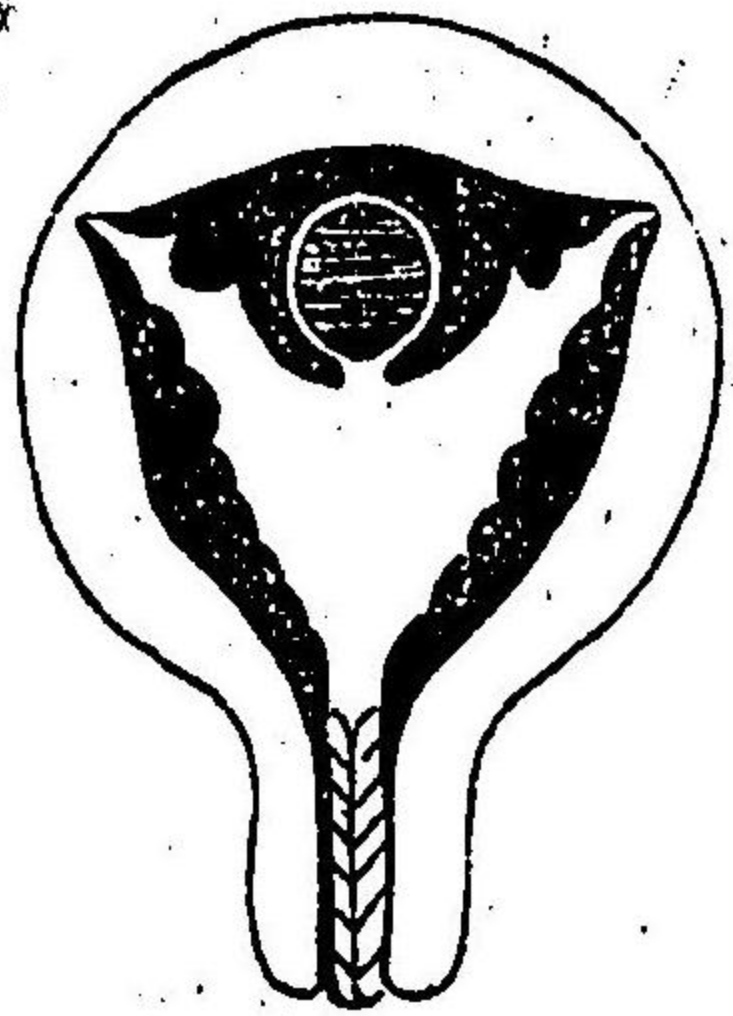
(第三十五圖)

脱落膜ノ發生  
順次ヲ示ス

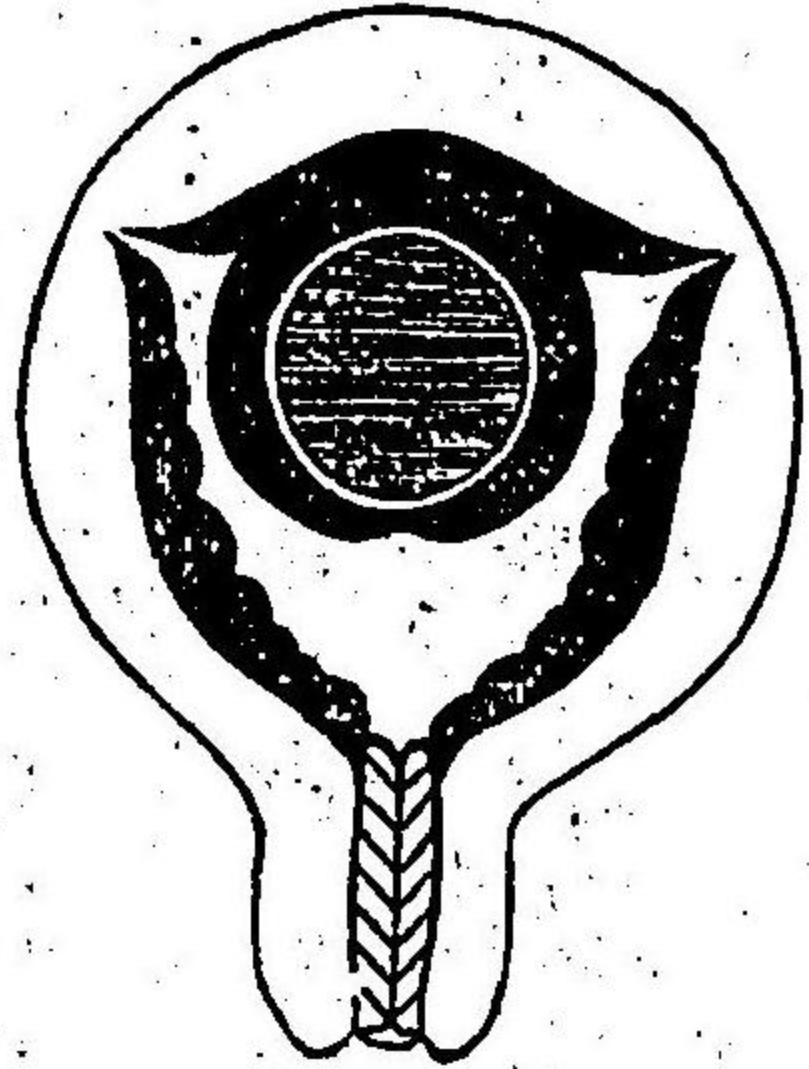
(甲)



(乙)



(丙)



攤スレハ  
子宮ノ内  
腔分レテ  
二部トナ  
ル即チ一  
ハ卵子ヲ  
包藏シ一  
ハ翻轉脱  
落膜ト子  
宮脱落膜

トノ間ニ在リ之ヲ脱落膜腔第三十六ト云フ而シテ卵子ノ發育スルニ從テ甲ハ漸ク擴大シ乙ハ漸ク狹隘ト爲リ受胎

百十四



第五六個月ニ至レハ兩膜全ク密接シテ復タ空隙ナキニ至ル  
 上文既ニ脱落膜ノ發生方法ヲ述ヘ了タレハ次ニ母體ト卵  
 子トノ連絡方法ヲ論セントス 夫レ孕卵子ハ其外面ニ偏  
 シ絨毛ヲ布キ且ツ血管延テ其内ニ入ルコトハ前ニ既ニ之ヲ  
 論セリ而シテ此絨毛ハ子宮腺内ニ入テ營養分ヲ吸収スルコ  
 恰モ樹根ノ地中ニ在テ養液ヲ攝取スルカ如シ 上圖ニ就テ  
 然レハ卵子漸ク發育スルニ從テ此絨毛ノ過半ハ自ラ萎縮  
 消滅シ殘餘ハ愈發育シテ愈枝別ヲ生シ遂ニ胎盤ノ内部ヲ  
 造成ス 尙ホ胎盤條下  
 ヲ參考スヘシ

○胎盤

○第九章

胎盤及臍帶

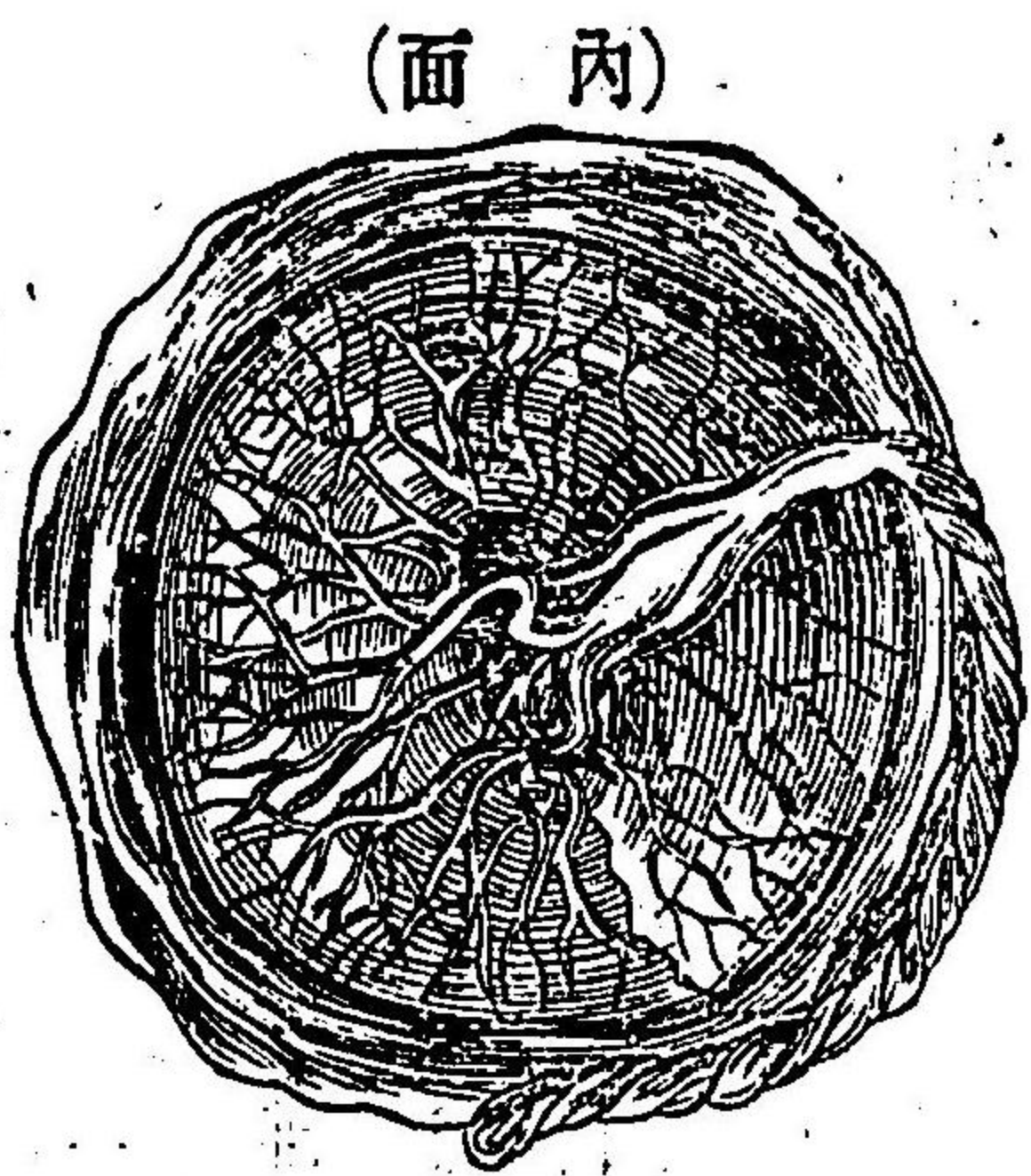
胎盤ハ胎生ノ要器ニシテ肺胃ノ作用ヲ兼備シ母血ト兒血  
 トノ間ニ行ハル、物質ノ交換ヲ主ル者ナリ 受胎第二月  
 ノ末ニ其發生ヲ始メ爾後漸ク增長シ滿月ニ至ルマテ止メ  
 胎盤ハ妊娠滿月ニ達スレハ橢圓形ニシテ長サ八應乃至  
 九應幅六應乃至七應厚サ一應乃至二應半重サ十五弓乃至  
 三十弓ト爲ル但シ胎盤ノ厚薄輕重ハ專ラ其含ム所ノ血液  
 ノ多少ニ關ス 胎盤ハ通常子宮ノ上後部ニ附着スレトモ時  
 トシテハ子宮底ノ左方或ハ右方ニ偏シテ附着シ 殊ニ右方  
 ト多シ 又罕ニ前壁或ハ後壁ニ附着シ或ハ直ニ子宮口ノ内  
 部ニ横居スルコトアリ 胎盤ハ内外二面ヲ有ス内面即チ胎



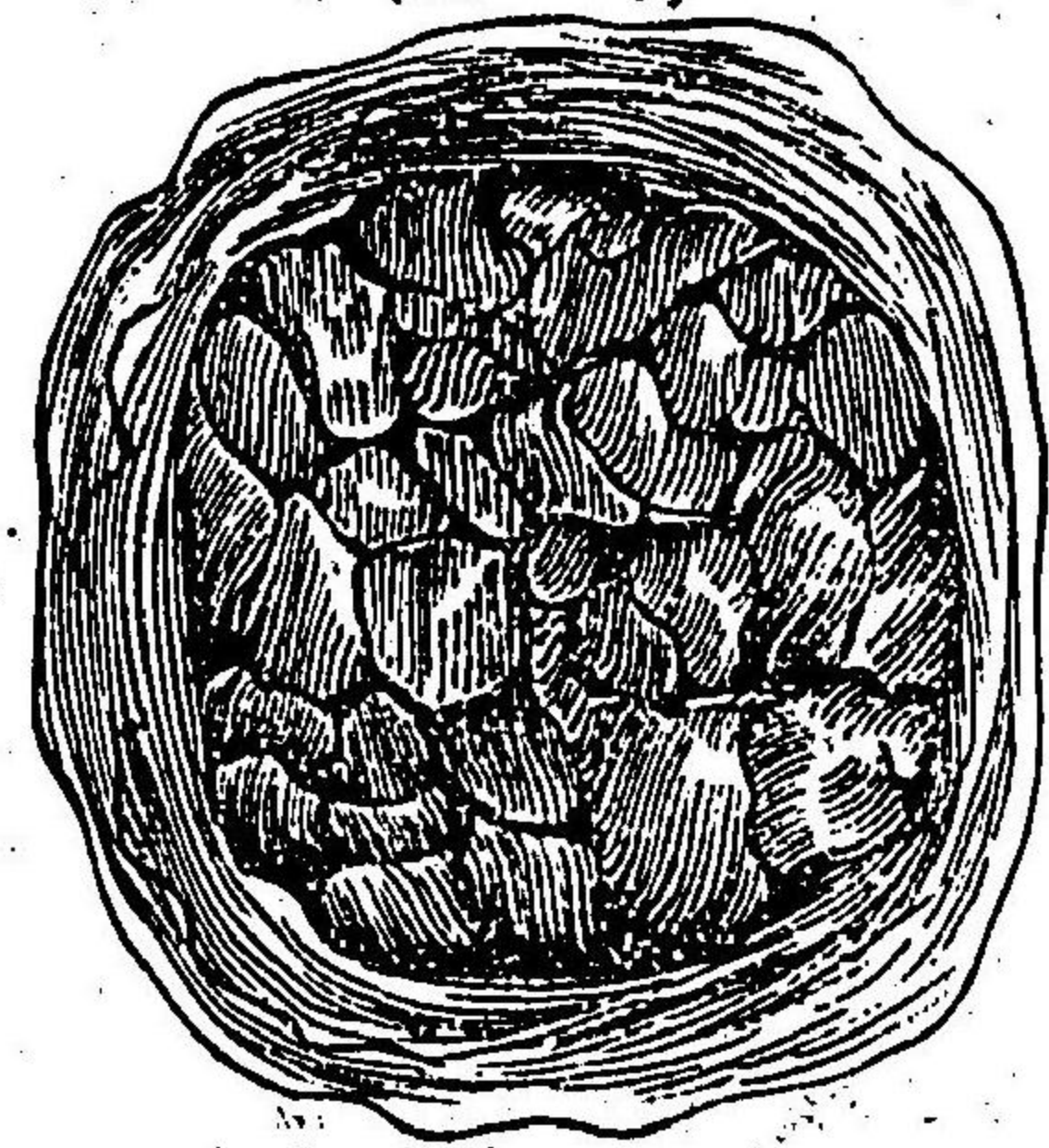
兒面ハ羊膜ヲ被フカ故ニ平滑ニシテ光澤アリ中央ニハ臍帶ヲ附着シ全面ニ臍帶血管ノ放線狀ニ布蔓スルアリニ示

(第三十七圖)

胎盤ノ内外二面ヲ示ス



(面内)



(面外)

ス 外面即チ子宮面ハ粗糙ニシテ不齊ノ數葉ニ區分セラレ且ツ許多ノ小孔アリ之ヲ子宮血管ノ斷口トス胎盤ハ分レテ二部トナル即チ胎兒部及母體部是ナリ而シテ初メハ二部ノ限界判然見ルヘシト雖モ其發生スルニ從ヒ兩部互ニ密着スルヲ以テ遂ニ復タ區別ス可ラサルニ至ル胎兒部ハ脈絡膜絨毛及臍帶血管ノ分枝ヨリ形成セラレ而シテ臍帶動脈ハ二條アリ臍帶ニ由テ胎盤ノ中央ニ達スルノ後反復分岐シテ其内面ニ布蔓シ鳥翅管大トナリ始テ脈絡膜ヲ穿テ胎盤質中ニ入り更ニ反復分岐シテ其末梢ハ絨毛ニ入り係蹄狀ヲ成シニ示ルニシテ變シテ臍帶靜脈ノ起原トナリ絨毛ヲ出ルノ後反復相合シテ先ツ十六條トナリ更ニ漆合シテ一條ノ大幹ヲ成シ臍帶ヲ經テ再ヒ兒體ニ還



ル胎兒ノ血液循環條 母體部ハ子宮粘膜即チ脱落膜及ヒ  
 子宮血管或ハ子宮脱落膜血管ト名ク ヲ成リ不齊ノ數葉ニ區分セラル  
 而シテ子宮動脈ハ胎盤質中ニ於テ分岐吻接スルコト少ナク廻  
 旋シテ螺旋狀ヲ呈シ遂ニ所謂胎盤竇ニ開口ス 靜脈ハ胎  
 盤竇ヨリ起リ頻ニ吻接シテ許多ノ大管トナリ盤中チ直行  
 シテ子宮壁ニ還ル  
 胎盤固有ノ組織ハ斯ノ如ク專ラ臍帶血管ト子宮血管トヨ  
 リ成リ内面ハ羊膜外面ハ脱落膜ヲ以テ被ハル、者ナリ而  
 シ此二膜ハ胎盤ノ周縁ニ於テ相近ツキ其間ニ脈絡膜チ狹  
 ミ以テ一枚ノ厚膜トナリ延長シテ一大盲囊チ造ル之チ胞  
 膜トス其内ニ羊膜液チ充テ胎兒チ浮フ  
 胎盤質中ニ於ケル母兒血管ノ關係如何ニ就テハ古來衆說

紛々タレトモ兩血管ノ直ニ交通セサルハ諸家ノ疑ハサル所  
 ナリ 輒今諸大家ノ所說ニ據レハ胎盤質中ニハ許多ノ不  
 齊ナル大竇アリ名テ胎盤竇ト云フ此竇ハ互ニ交通シ其壁  
 ハ極メテ薄ク母體血管ノ内膜延長スルニ由テ成ル者ニシ  
 テ彼螺旋狀動脈ハ此竇ニ開口シテ動脈血チ輸入シ靜脈ハ  
 此竇ヨリ起リ靜脈血チ輸出シテ子宮靜脈ニ輸送ス然リ而  
 シ脈絡膜ノ絨毛ハ係蹄狀血管チ含ミ此竇壁チ壓迫シテ俱  
 ニ其中ニ突出シ母血中ニ浮フ者トス 一說ニ據レハ絨毛ハ  
 出スト 斯ノ如ク母兒ノ血液ハ管ニ相混淆セサルノミナ  
 ラス三枚ノ膜層即チ係蹄狀血管壁絨毛壁及胎盤竇壁チ以  
 テ相隔タルカ故ニ兒血ヨリ游離スル炭酸及爾他老廢物ノ  
 排泄ト母血ヨリ供給スル酸素及養分ノ吸収トハ總テ滲出

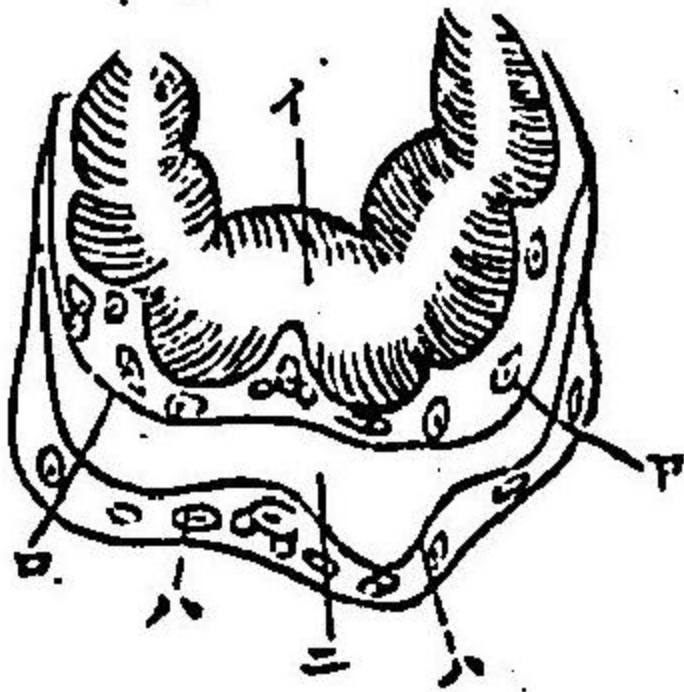


滲入ノ作用ニ由ル者ニシテ必ス此三枚ノ膜壁ヲ貫透セザルハナシ 輒今ニ至テ母血ト兒血トノ間ニ存スル物質交換ハ左ノ組織アルニ由ル者トス即チ母體血管ト胎兒血管トノ間ニ甲乙二様ノ細胞アリ甲ハ母體ニ屬シテ母體血管ノ外面ニ在リ其用恐クハ母血ヨリ養分ヲ泌別スルヲ主

(第三十八圖)

絨毛ノ末端ヲ示ス

- (イ) 絨毛中ノ血管
- (ロ) 胎兒ニ屬スル細胞
- (ハ) 母體ニ屬スル細胞
- (ニ) 間隙



トル者ナラン乙ハ胎兒ニ屬シテ絨毛血管ノ外面ニ位シ其用恐クハ甲ノ細胞ヨリ泌別セル養分ヲ吸収シテ之ヲ兒血ニ輸送スル者ナラン而シテ以上二種ノ細胞間ニ空隙アリ蓋シ一側ノ細胞ヨリ泌別セル養分ヲ受ケ他側細胞ノ吸

○臍帶

収コ供スル者トス 以上ノ機能アルカ故ニ畜コ母體ヨリ養分ヲ兒體ニ分與スルヲ得ルノミナラス兒體ノ老廢物モ亦母體ニ歸入スルヲ得ルナリ

臍帶ハ胎兒ト胎盤トノ間ニ涉リ一端ハ胎兒ノ臍ニ附着シ他端ハ通常胎盤ノ中央ニ附着ス然レトシテハ一方ニ偏シテ附着スルヲアリ 満月ニ至レハ十八應乃至二十應ノ長サトナル者ナレトシテハ過短ニシテ僅ニ四五應ナルヲアリ又時トシテハ過長ニシテ四五十應ナルヲアリ 臍帶ハ二條ノ動脈一條ノ靜脈臍胞及尿囊ノ遺體ヨリ成リ傑列乙様物ヲ以テ圍擁セラレ外面ハ羊膜ヨリ成ル所ノ管狀鞘ヲ以テ被ハル 受胎後三週ハ未タ臍帶ノ痕迹ヲ見ス唯胎胎ノ下部ニ尿囊ノ附着スルヲ認ムルノミ 受胎後



五六週ニ至テ始テ短大ナル臍帶ヲ生シ其内ニ血管アリ胚胎ヨリ起テ外方ニ直行ス 受胎第二月ノ末ニ至レハ臍帶ハ漸ク延長シ且ツ同時ニ其血管ハ左方ヨリ右方ニ向ヒ捻轉シテ螺旋狀ヲ成ス 動脈ハ二條アリ内腸骨動脈ヨリ起テ胎盤ニ達シ靜脈血ヲ運輸ス靜脈ハ一條アリ胎盤ヨリ起リ肝臟下面ヲ經テ下行靜脈ニ連リ辨膜ヲ有セズ動脈血ヲ運輸スルヲ以テ尋常ノ靜脈ト異ナリ 臍帶ハ神經ヲ有セズ輓今ニ至リ始テ水脈ヲ含ムヲ發見セリ 臍帶ハ通常羊膜液中ニ浮游スレドモ間々胎兒ノ頸圍或ハ四肢ヲ纏繞スルコトアリ

○第十章

各器ノ發育

○各器ノ發育  
脊椎

(脊椎) 椎索ハ前章ニ述ルカ如ク原溝ノ前ニ位シテ索狀ヲ呈シ上下ハ尖端ニ終リ上ハ頭蓋底ヨリ下ハ尾端ニ至ル其質ハ細胞ヨリ成リ表面ハ薄膜ヲ以テ被ハル然レモ椎骨ハ椎索ヨリ生スルニ非スシテ別ニ其周圍ヨリ發生ス 抑中胚膜ハ椎索ノ各側ニ於テ分離シテ原椎板第二十六圖乙ノ(ヌ)ヲ生シ速ニ數條ノ横線ヲ發シテ數個ノ方形板第二十七圖ノ(ホ)ニ分ル之ヲ原椎ト謂フ 原椎ハ左右俱ニ漸ク増大シテ椎索ヲ圍擁シ同時ニ後方ニ突出シテ髓管第二十六圖乙ノ(ニ)ヲ周匝ス 如斯椎索及髓管ハ原椎ノ爲ニ圍匝セラル而シテ原椎ノ軟骨ニ化スルハ受胎後第六週ヨリ第八週ノ間ニ在リテ其化骨點ヲ發ス



ルハ第二月ノ末乃至第三月ノ初ニ在リトス。斯ノ如ク原椎既ニ軟骨ニ化スルニ至レハ椎索ハ漸ク萎縮シテ遂ニ消滅スル者トス。但シ椎索ハ椎間部ニ於テハ消滅スルヲ遲シ。

○頭蓋

(頭蓋) 頭蓋モ亦原椎板ヨリ生ス。初メ此板ハ椎索上端ノ前部ヨリ上後方ニ延長シテ腦髓ヲ圍擁シ其上部ニ於テ左右相合シテ膜囊ヲ形成シ受胎後第二月ニ至レハ頭蓋底ニ於テ膜質中ニ軟骨ヲ生シ漸ク增長シテ側部ニ達スレハ上部ハ久シク腔質ヲ存ス而シテ頭蓋ノ化骨ハ受胎後第九週ニ至テ基底部ニ始リ生後數年ヲ經テ之ヲ完了ス。

(腦脊髓) 原溝第二十六圖甲ノ(ニ)ノ上端ハ胎生第三週ニ至レハ三個ノ擴張部ヲナシ後部ハ鎗鋒狀ヲ呈ス而シテ髓板漸ク突出シテ左右相合シ原溝化シテ髓管第二十六圖乙ノ(ニ)トナレハ第二十七圖ノ(ニ)

其内面ニ髓質物ヲ生シテ漸ク狹隘トナリ且ツ其上端ハ前方ニ屈曲シ彼三個ノ擴張部ハ自ラ分レテ三個ノ別腔トナル之ヲ前中後ノ腦胞ト云フ。前腦胞ハ左右ノ側房及第三腦房ト爲リ其壁ハ漸ク發育シテ大腦球線狀體視神經床及此等ノ諸部ニ關係ノ諸器例之胼胝體腦穹窿等ノ如キヲ生シ中腦胞ハシルヅユース氏導水管トナリ其壁ハ四疊體及大腦脚ヲ發生シ後腦胞ハ第四腦房トナリ其壁ハ小腦リアロリ氏氏橋延髓及第四腦房底ノ諸部ヲ生ス。髓管ノ後部モ亦々其内面ニ髓質ヲ發生シテ脊髓ヲ形成シ内管ハ漸ク狹隘トナル彼脊髓中管ハ則チ其痕迹ナリ。脊髓ハ初メ椎管ニ充滿スレハ胎生第四月以後ハ椎管速ニ發育スルヲ以テ自ラ脊髓ノ周圍ニ間隙ヲ生ス。脊髓ハ受胎後第四週ニシ







○眼球

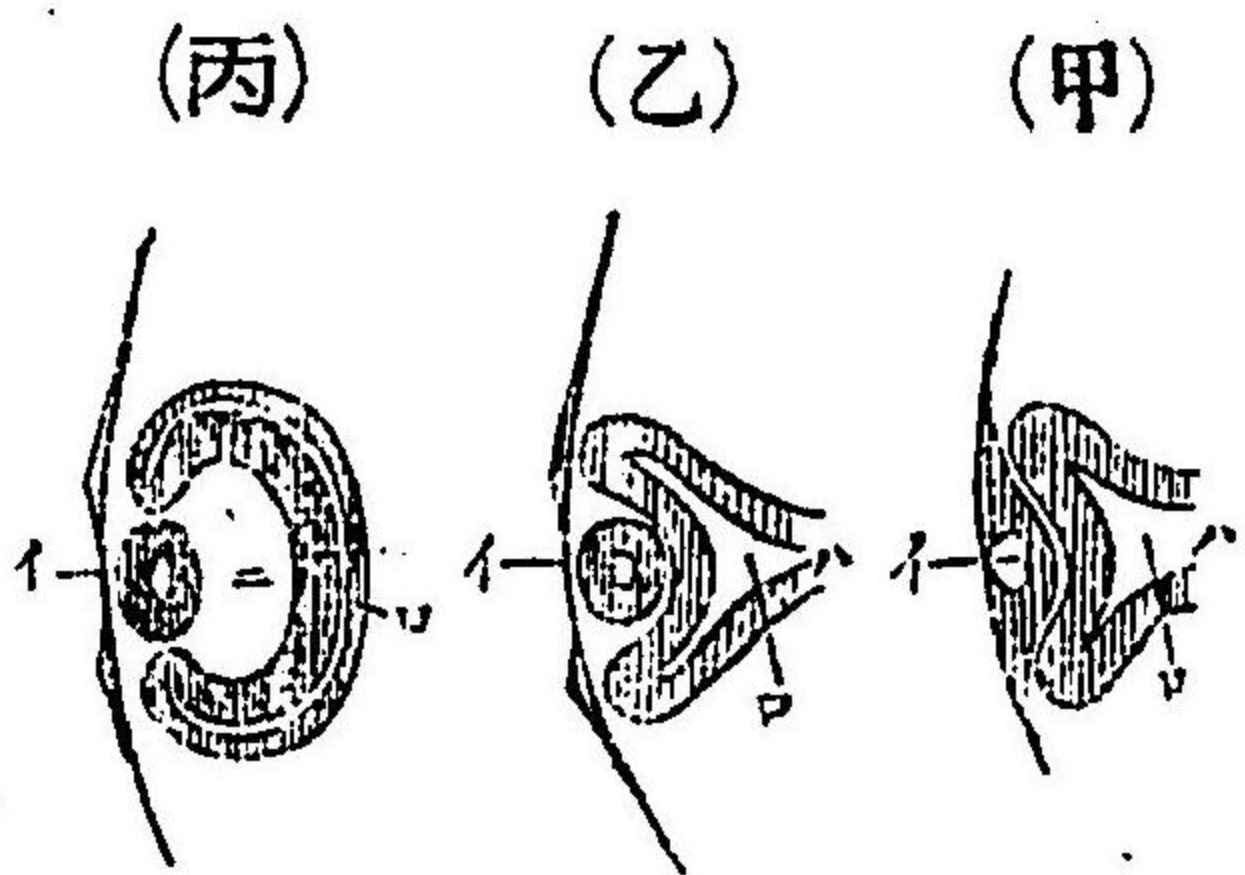
骨、同筋、鼓室柱狀突起、顛顛骨ノ莖狀突起、同韌帶及舌骨ノ小角ヲ生ス。第三顔面弓一名甲狀舌骨弓（全圖甲）ハ舌骨體及其大角ヲ生ス。第四顔面弓一名舌骨下弓（全圖甲）ハ頸ノ軟部ヲ生ス。又各顔面弓ノ下ニ罅裂アリ第一裂ハ外聽道、鼓室及歐氏管ニ化シ爾他ハ胎生第四週ニ至レハ盡ク消失ス。

（眼球） 眼球ハ前腦胞壁及外中二胚膜ヨリ形成セラル即チ網膜及ヒ視神經ハ前腦胞壁ヨリ生シ水晶體及結膜上皮ハ外胚膜ヨリ生シ角膜、鞏膜、脈絡膜、虹彩、水晶囊、硝子體及瞳子膜ハ中胚膜ヨリ生ス。眼球ノ將ニ生セントスルヤ前腦胞ノ前下部自ラ隆出シテ圓胞ヲ成ス之ヲ第一眼胞ト云フ。内空ニシテ管狀ノ莖（次圖甲）ヲ以テ腦腔ノ内腔ト交通ス。第一眼胞ノ前下部ハ水晶體胞ノ發生スルニ從ヒ（後ニ詳漸次）

（第四十圖）

眼球ノ發生ヲ示ス

- （イ）水晶體胞
- （ロ）第一眼胞
- （ハ）同前ノ莖
- （ニ）第二眼胞



ニ陷入シテ盃狀ヲ呈ス之ヲ第二眼胞ト云フ（上圖）。此胞漸次ニ深入スルニ從テ第一眼胞ノ内腔（上圖）ハ狹隘トナリ遂ニ二胞（上圖）互ニ近接シ且ツ彼管狀莖モ亦縮小ス但シ此二胞壁ニ就テ内層ハ網膜ノ神經纖維層トナリ外層ハ其色素層トナル。水晶體ハ外胚膜ヨリ生ス抑此膜ノ第一眼胞ヲ被フ部ハ自ラ肥厚シ第二眼胞ト俱ニ陷入シテ初メ盃狀ヲナシ次テ其周緣漸次ニ集合連着シテ小球ヲ成ス之ヲ水晶體胞ト云ヒ外胚膜ヨリ離レテ第二眼胞ニ入ル（以上ノ變化ハ）。水晶體

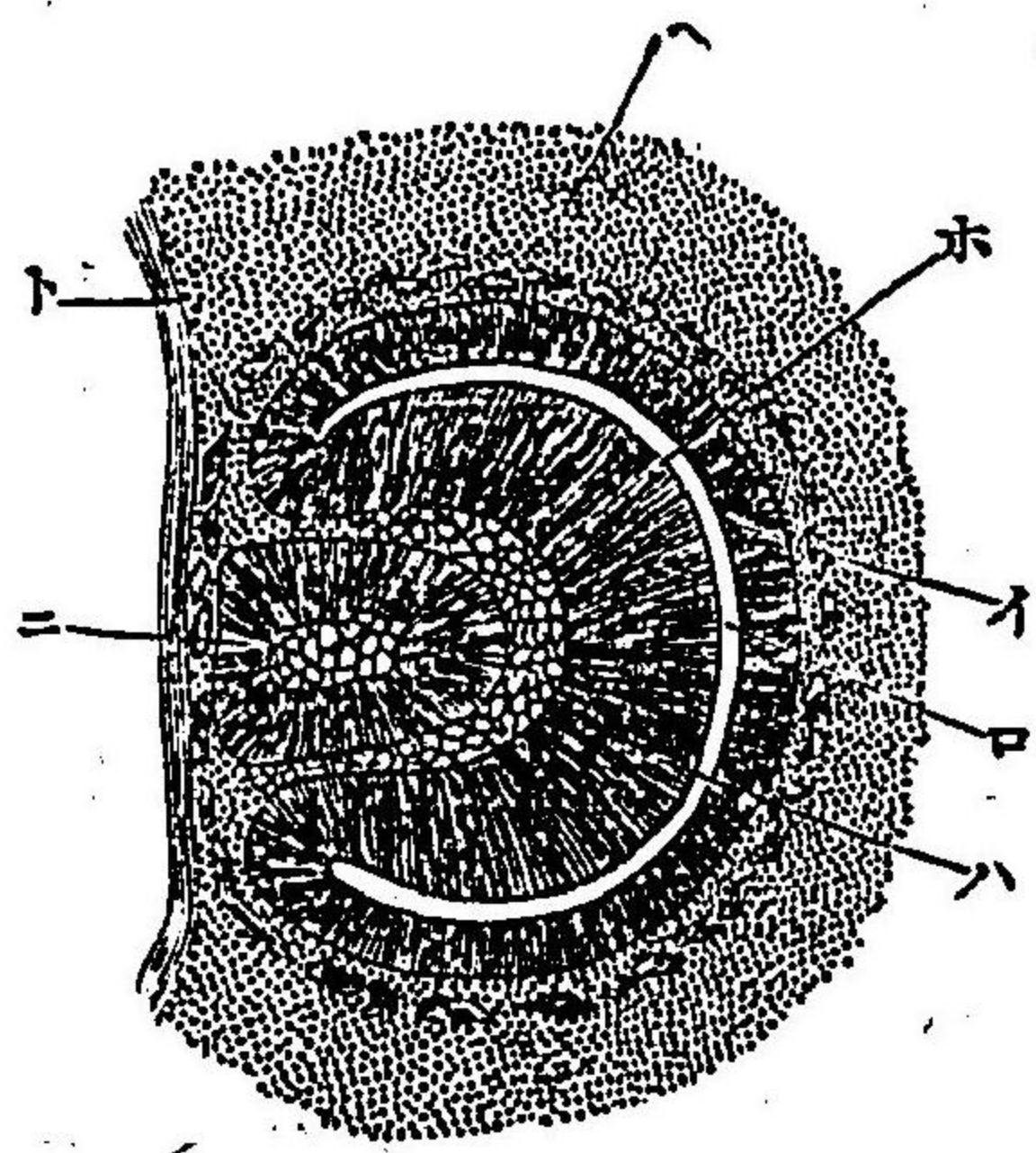


體胞ハ初メ内空ニシテ許多ノ細胞ヲ含ムト雖此細胞ハ  
漸次ニ發育シテ遂ニ水晶體纖維ニ化ス 水晶體胞ト第二

(第四十一圖)

又眼球ノ發生ヲ詳示ス

- (イ) 第一眼胞 (ホ) 中胚膜
- (ハ) 第二眼胞 (ニ) 外胚膜
- (ロ) 二胞間空隙 (ト) 外胚膜
- (ニ) 水晶體胞



眼胞トノ間ニ存スル空隙(上圖(ホ)ハ  
中胚膜ヨリ來ル所ノ細胞ヲ充ツ  
此細胞一部ハ化シテ硝子體トナ  
リ一部ハ水晶體ト外胚膜トノ間  
ヲ領スル細胞ト俱ニ膜囊ヲ作り  
水晶體ヲ圍擁ス之ヲ瞳子膜ト云  
フ網膜中央動脈ハ硝子體ヲ過キ  
此膜ニ達シテ分布ス 瞳子膜前  
面ノ周縁ハ虹彩ニ附着シ胎生第  
七月以後ハ漸次ニ消滅シテ分娩

時ニ至レハ全ク其痕迹ヲ見ス 視神經ハ初メ管狀ヲ爲シ  
第一眼胞ト前腦胞トノ間ニ涉レテ大脳ノ發育スルニ從テ  
眼胞ト俱ニ後下方ニ移轉シ遂ニ中腦胞ニ連リ同時ニ索狀  
ニ變ス 角膜及鞏膜ハ但ニ中胚膜ヨリ生ス 此胚膜ノ細  
胞ハ外胚膜ト水晶體胞トノ間ニ入り二層ニ分レ外層ハ厚  
クシテ角膜ト爲リ内層ハ薄クシテ瞳子膜ト爲ル 前ニ  
二層ノ間ニ存スル空隙ハ化シテ前房ト爲ル又中胚膜ニ屬  
スル細胞ニシテ第一眼胞ヲ圍擁スル者モ(上圖(ハ)内外二層ニ  
分レ内層ハ脈絡膜ニ化シ外層ハ鞏膜ニ變ス 眼瞼ハ皮膚  
ノ皺襞ヲ以テ始リ上下二個アリ漸次ニ發生シテ眼球ノ前  
面ニ於テ癒閉ス然レモ胎生末期ニ至レハ再ヒ離開スル者  
ナリ



○聽器

(聽器) 耳ハ受胎第四週ニシテ第一顔面裂ノ後部ニ現ル  
 外胚膜ノ一部ハ初メ腦胞ノ壁中ニ陷入シテ盃狀窩ヲナス  
 漸次ニ深入シテ其周縁自ラ収合癒閉シ胞狀ヲナス之レヲ  
 耳胞ト云フ 耳胞ハ中胚膜ノ質中ニ埋没シテ膜様廻郭ノ  
 原基ト爲ル 耳胞ノ壁ハ種々ニ膨脹シテ蝸牛殼前庭導水  
 管及半規管ヲ形成ス 骨様廻郭ハ耳胞ヲ圍擁スル中胚膜  
 ノ細胞ヨリ成ル蓋シ初メ先ツ軟骨ニ化シ次テ硬骨ニ變ス  
 ル者ナリ 外聽道鼓室及歐氏管ハ第一顔面裂ヨリ成リ錐  
 骨ハ「メケル」氏軟骨ヨリ生シ砧骨鐺骨及鐺骨筋ハ第二顔面  
 弓ヨリ生ス 耳翼ハ第一顔面裂後縁ノ隆起挺出スルニ因  
 テ成ル

○嗅器

(嗅器) 鼻モ亦外胚膜ノ陷入スルニ由テ其發生ヲ始ム 此

○心臟

陷入部ヲ名テ嗅溝ト云ヒ内外鼻突起ノ間ニ在リ 第三十九圖ニ詳ナリ  
 而シテ此二突起及第一顔面弓ノ發生ヲ以テ鼻孔ノ周縁ヲ  
 形成ス 鼻孔ハ初メ口腔ニ通セカレ其周縁ノ發成スル  
 ニ從ヒ漸次ニ之ト交通ス然レモ口蓋ノ發生ニ從テ上腔復  
 タ遮隔セラレ但シ成人ノ鼻孔蓋孔ハ胎兒ニ於ケル鼻孔交  
 通ノ痕跡ニ依ル

(心臟) 此器ハ消食管上端ノ前際ニ於テ中胚膜ヨリ發生ス  
 ル者ニシテ初メ此部ニ細胞ノ一塊ヲ生シ次テ其中部ノ細  
 胞ハ血液ニ化シ周圍ノ細胞ハ纖維織ニ變シ始メテ一管ヲ  
 生ス之ヲ管狀心臟ト云フ其發育スルニ從テ後端ハ臍腸間  
 膜靜脈ノ總管ニ通シ前端ハ分歧シテ二管ト爲ル之ヲ原大  
 動脈ト云フ 管狀心臟ハ一旦發生スレハ速ニ彎曲シテS

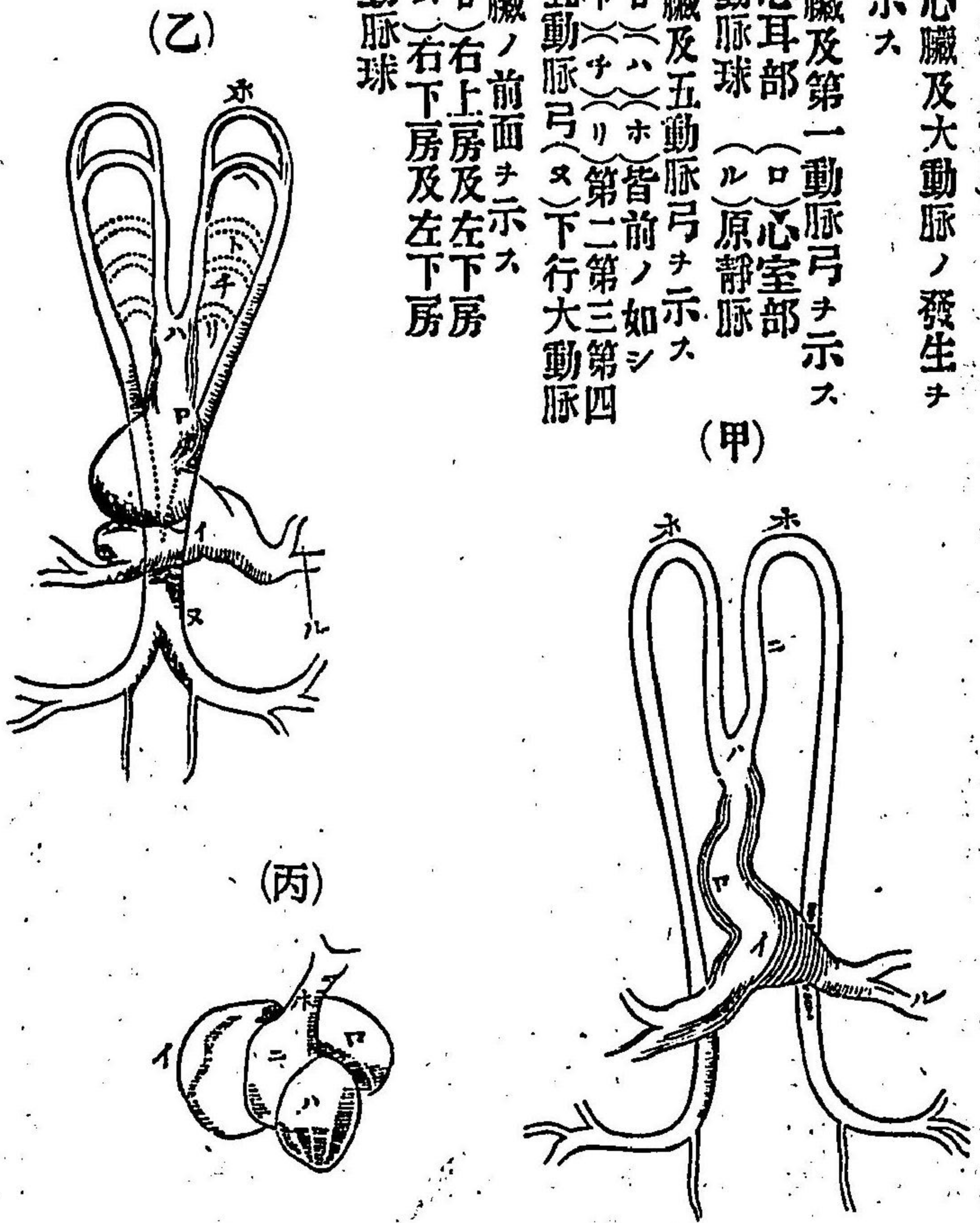


字形ヲ呈シ且ツ二處ニ狹窄ヲ生シテ心耳心室及動脈球ノ  
 三部ニ分ル 心耳部ハ後方ニ在テ最モ廣シ臍腸間膜靜脈  
 之ニ連リ心室部ハ大キ心耳部ニ亞キ動脈球ハ管狀ヲ有シ  
 テ前部ヲ領シ二條ノ原大動脈ヲ着シ 心臟ハ愈發育スレ  
 ハ愈彎曲シ心耳部ハ二個ノ囊狀ヲ呈シ動脈球ニ近ツキ其  
 兩側ニ膨出シ心室部ハ專ラ横ニ擴張スルヲ以テ全體ノ形  
 狀ハ次圖ニ示スカ如シノ殊ニ(丙) 心耳部心室部及動脈球ハ  
 初メ互ニ交通スレトモ第四週ヨリ第八週ニ至ル間ニ於テ各  
 部ニ中隔ヲ生シテ二部ニ分ル即チ心耳部ハ左右二上房ニ  
 分レ心室部ハ左右二下房ニ分レ動脈球ハ大動脈根及肺動  
 脈根ニ分ル 心室部ノ中隔ハ下方ヨリ起リ上方ニ向テ進  
 進ニ遂ニ全ク内腔ヲ左右二房ニ分ツ 心耳部ノ中隔ハ前壁

(第四十二圖)

心臟及大動脈ノ發生ヲ示ス

- (甲) 心臟及第一動脈弓ヲ示ス
- イ 心耳部
- ロ 心室部
- ハ 動脈球
- ル 原靜脈
- (乙) 心臟及五動脈弓ヲ示ス
- イ 心耳部
- ロ 心室部
- ハ 動脈球
- ル 原靜脈
- ヘ ト (チ) 第二第三第四第五動脈弓(ヌ) 下行大動脈
- (丙) 心臟ノ前面ヲ示ス
- イ 右心房及左心房
- ロ 右心房及左心房
- ハ 動脈球





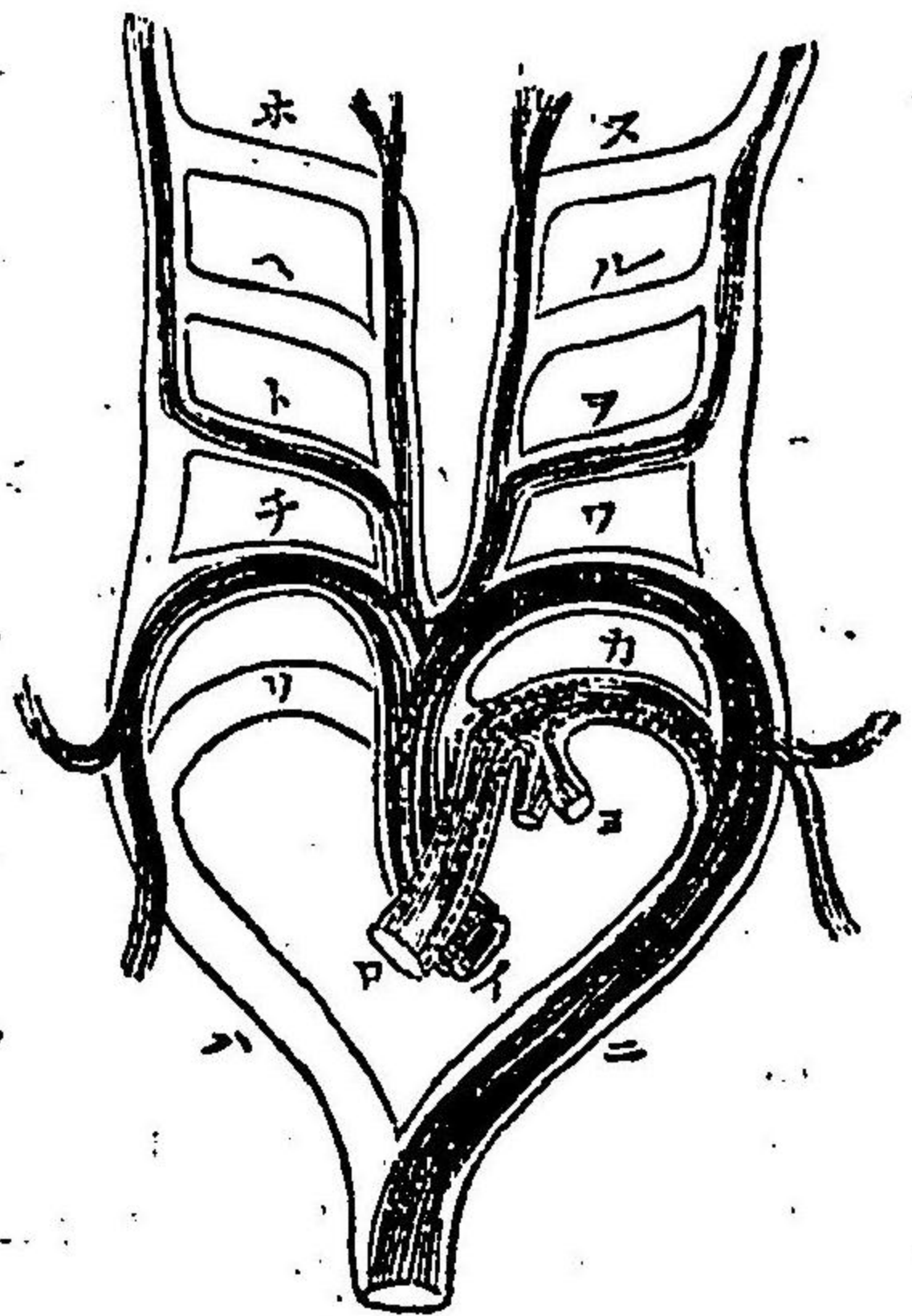
○動脈

及心室部ノ中隔ヨリ起リ後方ニ向テ進ムト雖ヒ完全ノ隔膜ヲ成サズシテ一個ノ孔ヲ貽ス之ヲ卵圓孔ト云フ生後數日ヲ經テ全ク閉鎖ス動脈球ノ中隔ハ兩壁ヨリ内膜ノ皺襞ヲ以テ起リ心室部ノ中隔ニ向テ進ミ遂ニ之ト癒合シテ内管ヲ二道即チ大動脈根及肺動脈根ニ分ツ

(動脈) 胚胎ハ初メ先ツ二個ノ弓狀動脈(前圖甲)ヲ生ス之ヲ原大動脈弓ト云フ管狀心臟ノ前端ヨリ起テ弓狀ヲ呈シ其下行部ハ左右相合シテ一幹トナル之ヲ原下行大動脈トス(前圖乙)此脈ハ再ヒ分岐シテ二條トナリ各五六枝ヲ生ス即チ臍腸間膜動脈ニシテ臍胞ニ分布スル者ナリ 各原大動脈弓ハ更ニ四脈弓ヲ生ス之ヲ第二弓第三弓第四弓及第五弓トス然レヒ同時ニ存在スルニ非ス故ニ第一弓及第二

(圖三十四第)

(イ)大動脈根  
(ロ)肺動脈根  
(ハ)左右原大動脈就中(ニ)ハ胸大動脈トナル  
(ホ)ヘト(チ)リ及(ヌ)ル  
(ル)チ(ワ)カ左右五動脈弓就中(ト)チハ外頭動脈(チ)リ鎖骨下動(カ)ハ動脈道トナル  
(ヨ)左右肺動脈



弓ハ第三弓以下ノ發生ニ先ツテ消滅スルナリ 左右ノ第三弓(第四十三圖)ハ化シテ左右ノ頸動脈トナリ右第四弓(全圖)ハ化シテ無名動脈及右鎖骨下動脈トナリ左第四弓(全圖)ハ大動脈弓及左鎖骨下動脈ト爲リ左第五弓(全圖)ハ肺動脈及動脈道トナリ右第五弓ハ全ク消失ス 永久大動脈弓ノ

永久動脈ノ發生ヲ示ス

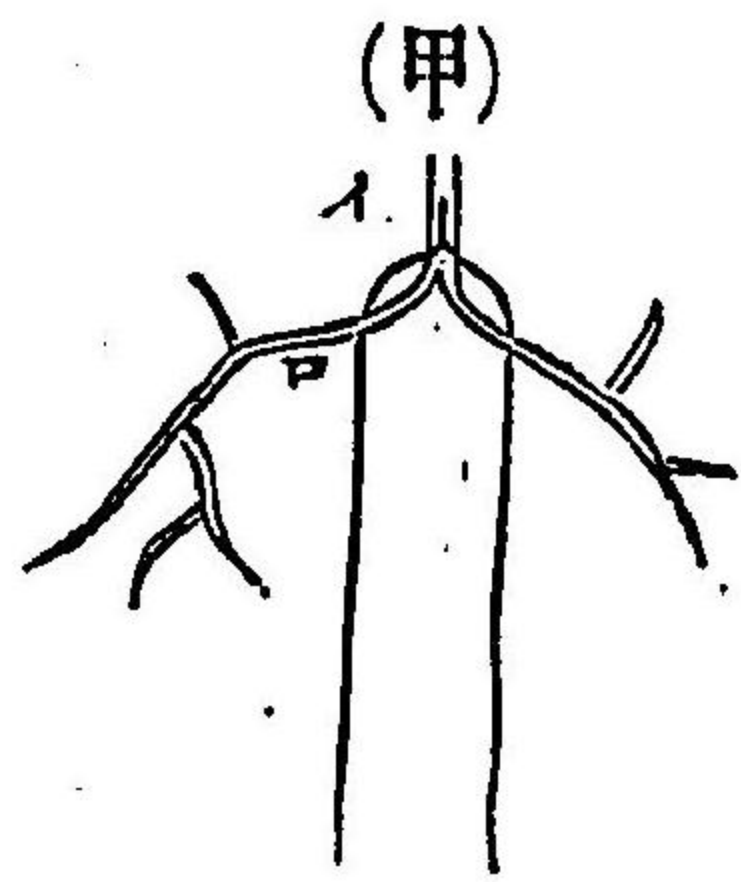


上行部及肺動脈根部ハ共ニ動脈球前ニヨリ生ス 下行大動脈ハ左右原大動脈ノ相合スルニ因テ成ル 臍腸間膜動脈ハ殆ト消失シ只一幹ノミ永存シテ腸間膜動脈トナル 臍帶動脈ハ原大動脈ニ連リ半ハ消失シ半ハ永存シテ腸骨動脈トナル

(靜脈) 胚胎ハ初メ二條ノ臍腸間膜靜脈ノ次圖甲ヲ生ス此靜脈ハ左右相合シテ總管トナリ心臟ノ心耳部ニ連ル 又受胎第四週ニ至レハ更ニ二條ノ臍帶靜脈ヲ生ス是亦相合シ

(第四十四圖)

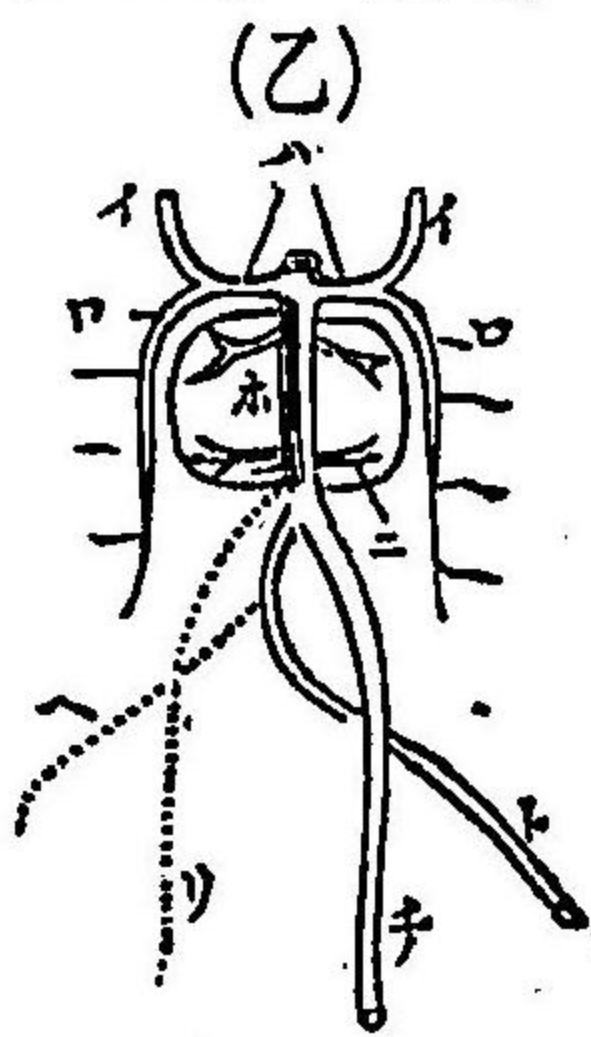
胚胎靜脈ノ發生ヲ示ス



テ一管トナリ臍腸間膜靜脈ノ總管ニ連ルヲ以テ今ヤ此管ハ俄ニ變大ス次ニ右側ノ

(甲)ノイ臍帶靜脈  
(ロ)臍腸間膜靜脈

(乙)ノイ原頸靜脈  
(ロ)原下靜脈  
(ハ)キユヅイル氏管  
(ニ)門脈ノ靜脈道  
(ト)左臍帶靜脈  
(チ)左臍腸間膜靜脈  
(リ)右臍帶靜脈及右臍腸間膜靜脈ノ遺跡



臍腸間膜靜脈及臍帶靜脈ハ漸次ニ萎縮シテ遂ニ消滅スルニ至ル上圖乙ノ點線(ハ)肝臟既ニ發生スレハ此

總管ハ二種ノ靜脈ヲ發ス即チ一ハ門脈枝ノ上圖乙トナリ一ハ肝靜脈上圖ニトナル而シテ此二脈ノ中間部ハ靜脈道ノ全圖トナリ肝靜脈根本ノ上部ハ下大靜脈ト相合シテ同脈ノ上端トナリ臍腸間膜靜脈及臍帶靜脈ノ接合部ヨリ門脈枝ニ至ル間ハ門脈幹トナル 又腸間膜靜脈及脾靜脈ハ右側ノ臍腸間膜靜脈ニ連ル 又臍帶靜脈ニ先ツテ別ニ上下二對ノ靜脈ヲ生ス上ナル者

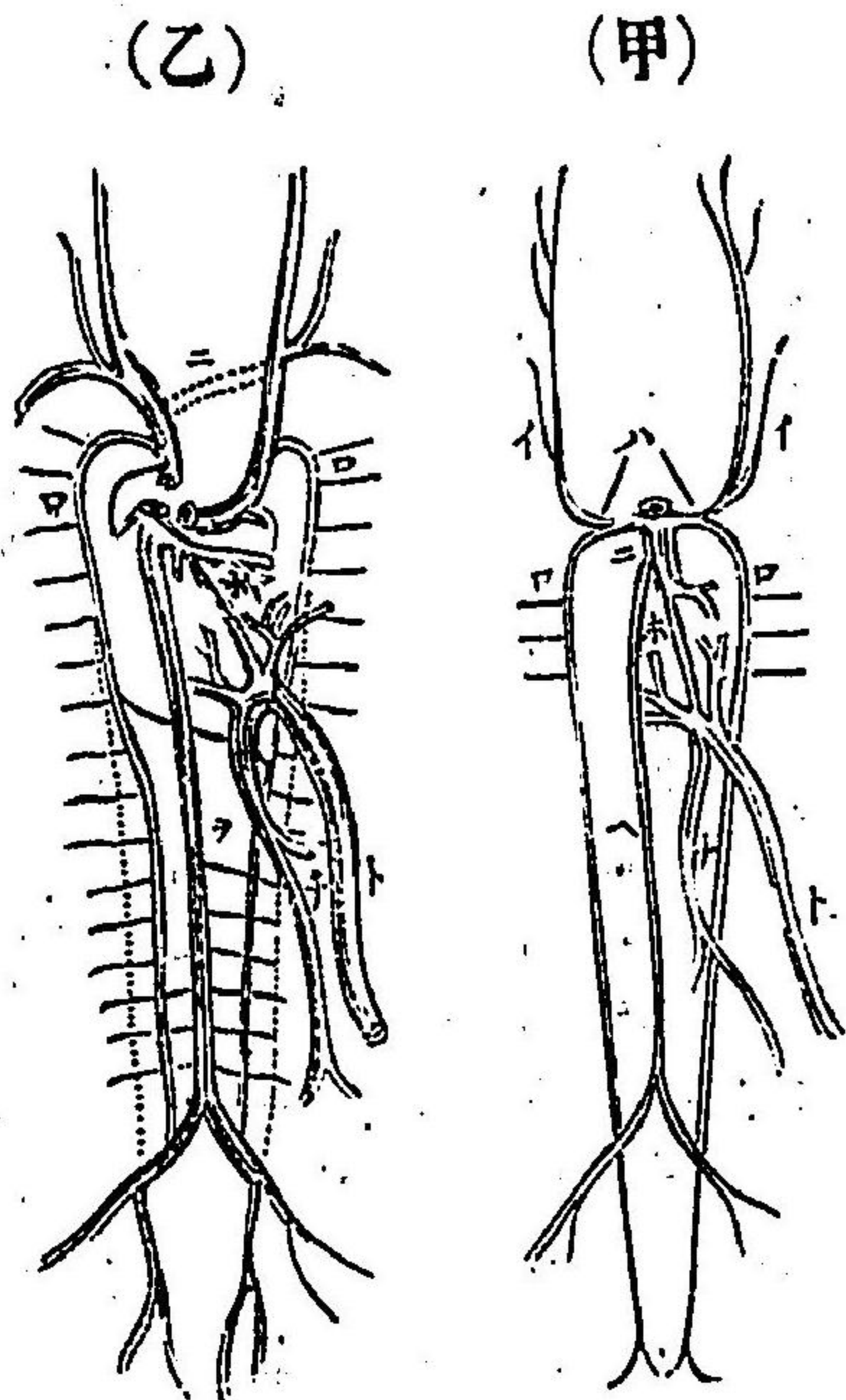


前圖乙次「キユヅキール」氏管前次兩ト云ヒ心耳部ニ開口ス而シテ左右原頸靜脈ハ一條ノ橫枝ノ次圖乙ヲ以テ互ニ交通ス  
 以上ノ靜脈ハ胚胎ノ發育スルニ從テ左ノ變化ヲナス即チ

(第四十五圖)

永久靜脈ノ發生ヲ示ス

- イ 原頸靜脈
- ロ 原下靜脈
- ハ 「キユヅキール」氏管
- ニ 橫枝
- ホ 靜脈道
- ヘ 下大靜脈
- ト 左臍帶靜脈
- チ 門脈



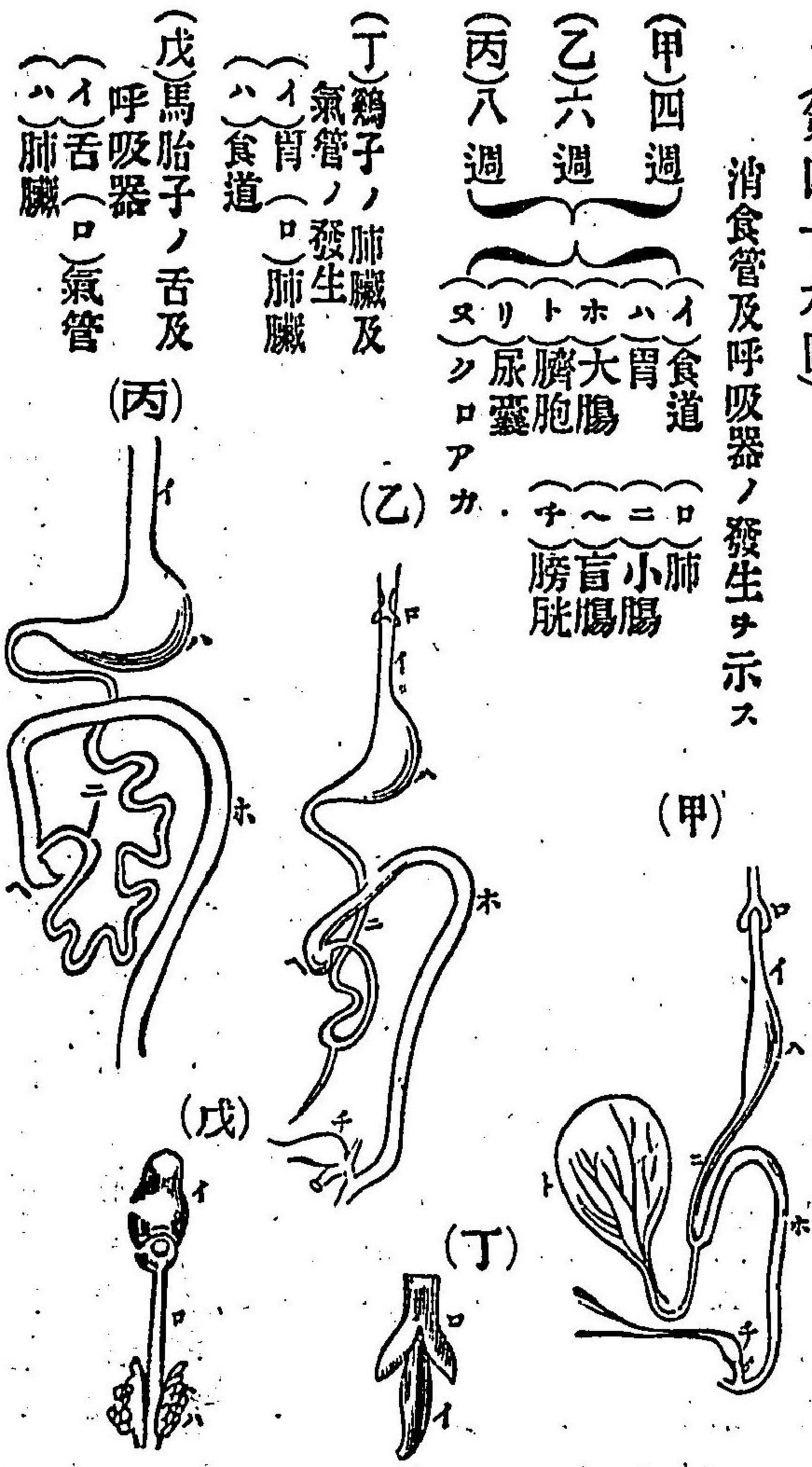
○消食管

左側ノ「キユヅキール」氏管ハ殆ト消滅シ唯其内端ノミ遺存シテ冠靜脈竇トナリ右側ノ「キユヅキール」氏管ハ永存シテ上大靜脈トナリ左右原頸靜脈間ノ橫枝ハ左側ノ無名靜脈トナリ右側ノ原頸靜脈ハ同側ノ無名靜脈トナル  
 原下靜脈ハ「ウオルフ」氏體ニ始リ上行スルニ從テ胸腹壁ヨリ血液ヲ受ケ之ヲ心臟ニ輸送ス 下大靜脈(前圖)ハ受胎第四五週ニシテ始メテ發生シ左右「ウオルフ」氏體ノ間チ上行シ肝臟ノ後チ過キ臍腸間膜靜脈及臍帶靜脈ノ總管ニ連リ心臟ニ達ス但シ此脈ハ小枝ヲ以テ原下靜脈ト交通ス 原下靜脈ノ下部ハ腸骨靜脈トナリ上部ハ孤靜脈トナリ中部ハ消失ス  
 (消食管) 中胚膜ノ内層即チ腸纖維層及内胚膜ハ兩側ヨリ



内方ニ彎入シテ先ツ溝狀ヲ成シ次テ左右適合シテ一條ノ長管ヲ爲ス之ヲ原消化管ト云ヒ蛋質管ニ由テ臍胞第四十六圖六圖甲

消化管及呼吸器ノ發生ヲ示ス



○肝臟

(ト)ト交通ス但シ此蛋質管ノ遺體ハ成人ニ於テ間々存スルヲ見ル 原消化管ノ上部ハ咽喉食道前圖甲乙及ヒ胃腑前圖丙ノイノトナリ下部ハ速ニ延長シテ紆曲廻轉シ且ツ其一部ハ膨脹シテ盲腸前圖乙丙ノハト爲リ全管爲ニ大小腸ノ二部ニ分ル 消化管ハ初メ口腔ト交通セス口腔ハ消化管ヨリ生セスシテ腦胞ノ前下部ニ於テ外胚膜ノ陥入スルニ由テ成ル第三十九圖ヲ見是レ兩腔ノ間ニ中隔アレハナリ然レモ此中隔ハ漸次ニ消滅シテ兩腔遂ニ交通スルニ至ル

(肝臟) 受胎後第三週ニ至テ消化管上部ノ前面ニ細胞ノ一塊ヲ生ス是レ即チ肝臟ノ原基ニシテ消化管壁ハ速ニ膨出シテ其中ニ進入シテ膽管トナリ且ツ其一部ハ更ニ囊狀ニ膨出シテ胆嚢ヲ形成ス 肝臟ノ發育ハ最モ速ニシテ



受胎後第五週ニ至レハ胚胎全量ノ半ニ及フ  
(脾腺) 此腺ハ消食管壁ノ膨出シテ管狀ヲ呈シ次テ反復分岐スルニ由テ成ル者トス  
(脾臟) 此腺ハ脾ニ後レテ發生シ通常受胎後第十二週ニシテ中胚膜ヨリ生ス

○肺臟

(肺臟) 消食管上部ノ前面ニ二個ノ隆起ノ(ロ)ヲ生シ速ニ内空トナリ消食管ニ通ス之ヲ肺臟ノ原始トス胚胎ノ發育スルニ從テ兩肺ハ一管(前圖戊)ヲ以テ消食管ニ通ス之ヲ氣管トス氣管ハ反復分岐シテ細管トナリ盲端ニ終リ以テ氣管枝及氣胞ヲ形成ス

○生殖泌尿器

(生殖泌尿器) 此器ノ發生ニ先ツテ二個ノ腺體及二條ノ管狀體ヲ生ス甲ヲウオルフ氏體ト云ヒ乙ヲミユルレル氏管

○ウオルフ氏體

○ミユルレル氏管

ト云フ 此二體ハ永久生殖泌尿器ノ發生ニ緊要ナル關係ヲ有スルカ故ニ左ニ其造構ヲ概記ス「ウオルフ氏體」(イ)ハ胎生第三週ニシテ消食管ノ各側ニ於テ細胞ノ集積ヲ以テ現レ第六週ニ至レハ發生ヲ完了ス 此體ノ十分ニ發成スル者ハ許多ノ横管ヲ以テ成リ更ニ其外縁ニ一條ノ排泄管ヲ有ス之ヲウオルフ氏管ト云フ 横管ハ稍彎行シ内端ハ盲端ニ終リ血管ヲ分布シ腎臟ノ「マルビキ」體ニ類シ外端ハウオルフ氏管ニ開口ス「ウオルフ氏管」ハ本體ノ外縁ニアリ内側ニハ横管ヲ接シ下端ハ「クロアカ」(次圖甲)ニ通ス 此體ハ一種ノ液ヲ分泌シ胎生ノ腎臟ニ當ル然レハ永久腎臟トハ其關係少キ者トス「ミユルレル氏管」(次圖甲)ハ一對ノ長管ニシテ左右ウオルフ氏體ノ前面ニ位シ上端ハ肋

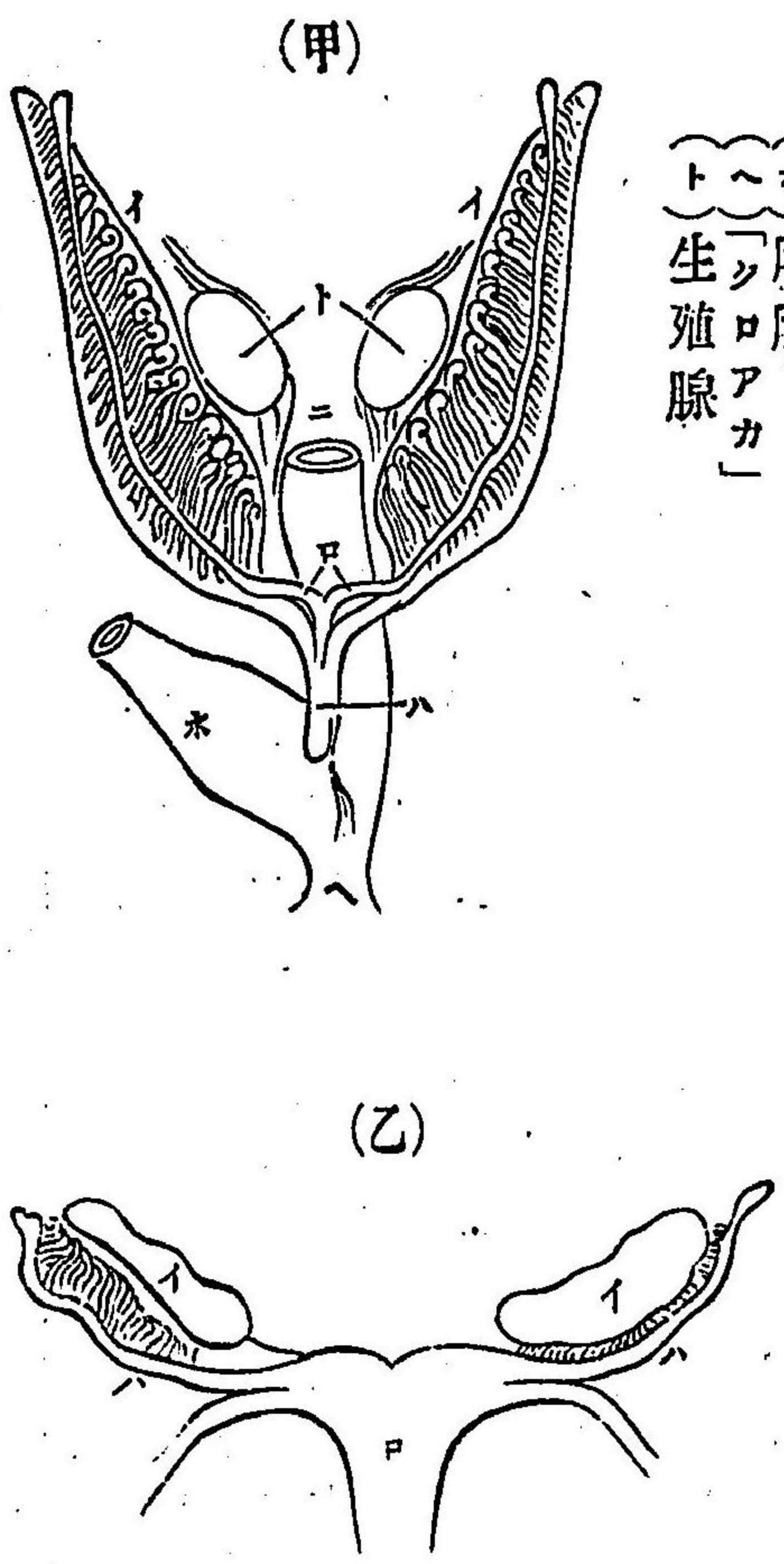


(第四十七圖)

生殖泌尿器ノ發生ヲ示ス

(甲) イ「ウオルフ」氏体  
 ロ「ミユル」氏管  
 ハ生殖索  
 ニ消化管  
 ホ膀胱  
 ヘ「シロアカ」  
 ト生殖腺

(乙) イ卵巢  
 ロ子宮  
 ハ喇叭管及「ウオルフ」氏体ノ遺跡



腹膜腔ニ通シ後チ喇叭管剪線ニ化シ中部ハ喇叭管ニ變シ  
 下端ハ左右相接シテ生殖索ノ中央ヲ領ス 尙ホ後ニ 腎臟  
 ハ受胎後第七週ニシテ「ウオルフ」氏體ノ後ニ現レ初メ數葉  
 ヨリ成レニ漸次ニ結合シテ一體ト爲ル 副腎ハ初メ腎臟  
 ト同形ヲ有スレニ受胎第六月以後ニ至リ甲ハ縮小シ乙ハ  
 増大スルカ故ニ遂ニ其容積ヲ異ニスルニ至ル 膀胱ハ尿  
 囊ノ莖部ニ即チ腹腔内ヨリ成ル蓋シ此莖ノ上部ハ縮小シテ  
 索狀ヲ成ス之ヲ「ユラカス」ト云ヒ下部ハ擴張シテ膀胱ト爲  
 リ其下端ハ更ニ狹窄シテ尿道トナリ生殖尿管ニ通ス  
 左右ノ「ウオルフ」氏管及「ミユル」氏管ノ下端ハ相集テ索  
 狀ヲナス之ヲ生殖索ノ(前圖甲ト云フ)索中甲管ハ兩側ニ位シ  
 乙管ハ中央ニ在リ左右相合シテ一管トナル子宮及膈ハ此



管ヨリ成ル 胎生第六週以内ニ於テ左右ウオルフ氏體ノ  
 内側ニ於テ細胞集積シテ一個ノ腺體ヲ生ス之ヲ生殖腺前  
 甲ノト云フ男子ニ在テハ睪丸ニ化シ女子ニ在テハ卵巢ニ  
 變ス 卵巢ハ生殖腺ノ稍延長シ且ツ斜位ヲ取ルニ因テ成  
 リ初メウオルフ氏體ノ前内側ニ位スレモ同體ノ萎縮スル  
 ニ從テ鼠蹊部ニ下リ妊娠滿月ニ近ツキ骨盤ニ入ル 「グラ  
 ー」氏胞及卵子ハ生殖腺ノ表面ニ存スル細胞ノ管狀ヲナ  
 シテ其實質中ニ没入スルニ由テ生ス 睪丸ハ卵巢ノ如ク  
 生殖腺ヨリ生ス初メ圓形ニシテ厚ク縦位ヲ占メ發育スル  
 ニ從テ許多ノ細管ヲ生ス此管漸次ニ紆曲廻轉シテ細精管  
 ニ化ス 副睪ノ體其小頭輸精管ハウオルフ氏管ヨ  
 リ成リ副睪大頭ギラルデス氏機關 許多ノ細管ノ紆曲廻轉  
 スル者ニシテ副睪ノ上

部ニ及ハルレシ氏迷走管 一細管ノ彎廻スル者ニシテ下端  
 盲端ニハウオルフ氏體ヨリ成ル睪丸ハ胎生第七月ニシテ  
 鼠蹊管ニ入り第八月ノ末ニ至レハ陰囊ニ達ス 喇叭管及  
 其剪線ハ「ミユル」氏管ノ上部ヨリ成ル「モルガク」氏胞  
 ノ外端ニシテ喇叭管ハ此管上端ノ遺跡ニシテ副卵巢一名「ロ  
 ミユル」氏體ト云フ廣靱帶 ハウオルフ氏體ノ遺跡ナリ  
 ノ層間ニ在リ第十五圖ノ「ス」子宮及膈ハ左右「ミユル」氏管下部  
 ノ接合シテ一管ト成ル者ヨリ生ス時トシテハ接合ノ不全  
 ナルヨリ或ハ双角子宮ヲ生シ或ハ中隔ノ消滅スルヲナク  
 シテ双膈双子宮ヲ成スヲアリ 男胎ニ在テハ「ミユル」氏  
 氏管縮小シ下部ハ化シテ攝護腺實トナリ其上部ハ細囊狀  
 ナ呈ス 外生殖器ノ發生ハ受胎五六週以後ニ在リ其以前



ニ在テハ胎兒ノ下端ニ一大孔アリ名テ「シロアカ」前圖甲ト云フ之ヲ腸管、泌尿器及生殖器ノ総門トス胎生大約十週ニ至レハ此総門ニ中隔ヲ生シ分レテ前後二部トナル即チ前部ハ泌尿器及生殖器ノ普通口ニシテ泌尿生殖竇ト云ヒ後部ハ腸管ノ下端ニ通ス之ヲ肛門トス 泌尿生殖竇ハ速ニ復タ分レテ泌尿部及生殖部トナリ且ツ其兩側ニ皺襞ヲ發シ其間ニ一個ノ結節樣體ヲ生シ下面ニ縱裂アリ即チ男子ニ在テハ陰莖トナリ女子ニ在テハ陰核トナル 又男子ニ在テハ二個ノ皺襞ハ中線ニ於テ癒着シテ陰囊トナリ縱裂ノ兩緣モ亦接合シテ尿道トナレト女子ニ在テハ兩カラ癒接セズシテ一ハ大陰唇トナリ一ハ小陰唇ト成ルナリ

○第十一章 胎兒ノ血液循環

○胎兒血液循環

胎兒ノ血液循環ハ成人ト同シカラス是レ胎兒ハ羊膜液中ニ生存シテ呼吸セサルカ故ニ肺臟ハ収縮シテ其質恰モ肝臟ノ如ク且ツ臍帶動脈、同靜脈、靜脈道、卵圓孔及動脈道ヲ具有スルニ由ルナリ 臍帶動脈ハ二條アリ各内腸骨動脈ヨリ起リ腹壁ニ沿テ上行シ臍帶ヲ經テ胎盤ニ達シ無數ノ細枝ヲ生シ其中ニ分布ス 臍帶靜脈ハ許多ノ細枝ヲ以テ胎盤ヨリ起リ漸次ニ湊合シテ遂ニ一管トナリ臍帶ニ由テ腹内ニ入り肝臟下面ニ達シ分岐シテ二枝トナル即チ一ハ門脈ニシテ肝臟ニ入り其内ニ分布シ一ハ靜脈道ニシテ直行シテ下大靜脈ニ連ル 臍帶動靜脈末梢ト胎盤竇ト 卵圓孔ハ關係ハ百十九丁ニ詳ナリ

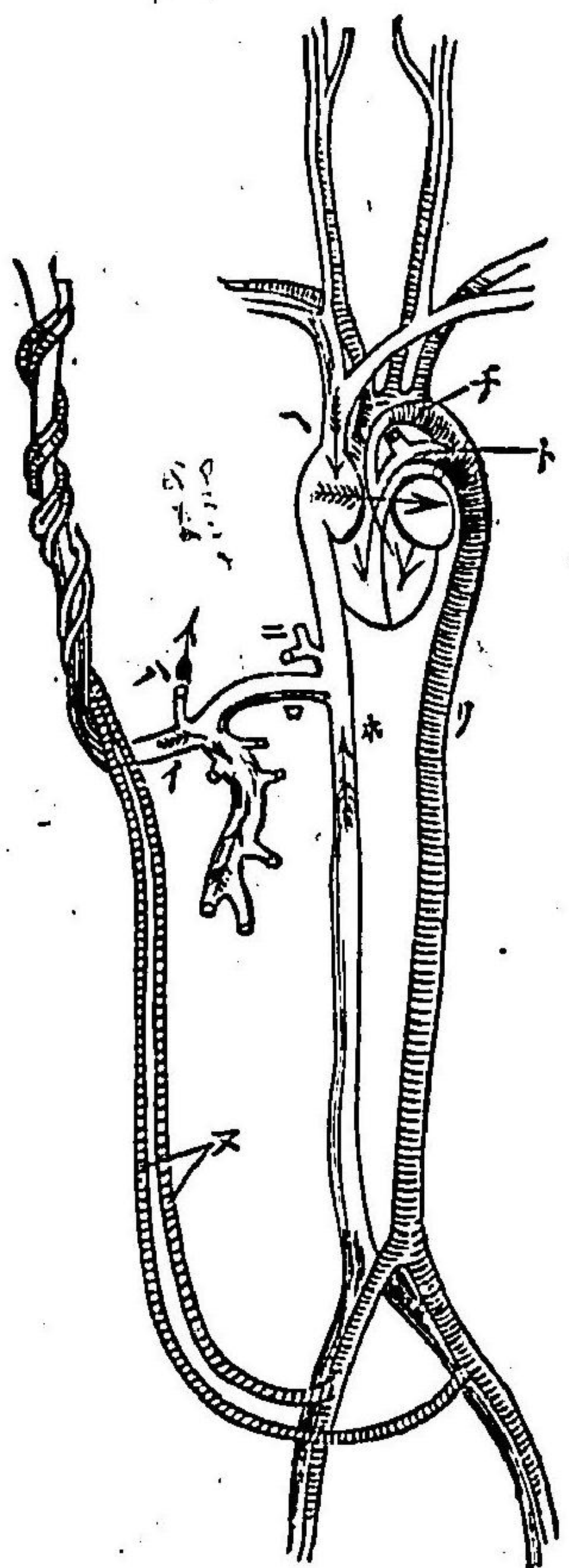


心臟ノ左右上房ノ間ニ在リテ卵形ヲ有ス故ニ此名アリ而  
 上房ハ此孔ニ由テ互ニ交通ス 動脈道ハ肺動脈ノ分岐部  
 通常左肺動脈ノヨリ起リ大動脈弓ノ下面左鎖骨下動脈根  
 ノ對部ヨリ少シク左方ニ偏スル部ニ連ル  
 胎兒ノ血液ハ左右臍帶動脈ニ由テ胎盤ニ入り其内ニ於テ  
 炭酸及他ノ老廢物ヲ驅除シ酸素及養分ヲ吸收シ臍帶靜脈  
 ニ由テ肝臟下面ニ至レハ二部ニ分レ一部ハ直ニ靜脈道ヲ  
 經テ下大靜脈ニ達シ一部ハ門脈ニ由テ肝臟ニ入り其内ヲ  
 循行スルノ後肝靜脈ニ由テ下大靜脈ニ達ス故ニ初メ肝臟  
 下面ニ於テ二部ニ分レタル血液ハ再ヒ下大靜脈ニ入テ混  
 合シ同脈ヲ經テ心臟ノ右上房ニ入り次テ卵圓孔ヲ過キテ  
 左上房ニ達シ遂ニ下テ左下房ニ入ル而シテ此血液ハ右上房

(第四十八圖)

胎兒ノ血液循環ヲ示ス

- (イ) 臍帶靜脈
- (ニ) 肝靜脈
- (ト) 動脈道
- (ヌ) 臍帶動脈
- (ロ) 靜脈道
- (ホ) 下大靜脈
- (ナ) 大動脈弓
- (ハ) 門脈
- (ヘ) 上大靜脈
- (リ) 下行大動脈





ヲ過クル時ニ當テ上大靜脈ニ由テ歸リ來ル所ノ血液ト混  
 淆セサルカ如シ即チ甲ハ歐氏瓣ノ作用ニ據テ悉ク左上房  
 ニ流入シ乙ハ成人ニ於ケルカ如ク三瓣膜ヲ排開シテ右下  
 房ニ下ル  
 斯ノ如ク上大靜脈ニ由テ歸リ來ル所ノ血液ハ右下房ニ達  
 シ下大靜脈ニ由テ歸リ來ル所ノ血液ハ左下房ニ入レハ兩  
 房俱ニ時一ニ収縮シテ右下房ノ血液ハ肺動脈ニ入り直チ  
 ニ分テ二部トナリ一部ハ肺中ニ入り一部ハ動脈道ヲ經テ  
 大動脈弓ノ下行部ニ達ス又左下房ノ血液ハ直ニ大動脈ニ  
 入り一部ハ頭頸及上肢ニ運行シ一部ハ動脈道ニ由テ右下  
 房ヨリ來ル所ノ血液ト混合シテ下行大動脈ヲ經テ骨盤ニ  
 達ス而シテ既ニ此所ニ至レハ復タ分レテ二部トナリ一部ハ

○初生兒循環  
 系ノ變化

○第十二章

初生兒循環系ノ變化

前章ニ陳述スル胎兒特異ノ血液循環ハ生後直ニ變換ヲ始  
 メ數日ニシテ成人ト同様ノ状態ヲ爲スニ至ル 抑初生兒  
 始テ呼吸スレハ肺臟ノ氣胞直ニ擴張スルカ故ニ其鬚細管  
 ハ大ニ口徑ヲ增加ス今ヤ多量ノ血液一時ニ肺中ニ進入ス  
 ルヲ以テ動脈道ハ自然ニ無用ニ屬シ其口徑漸次ニ縮小シ  
 遂ニ一滴ノ血液ヲモ通セサルニ至ル加之右上房ハ血液ヲ

下肢ニ循行シ一部ハ臍帶動脈ヲ經テ再ヒ胎盤ニ達スルナ  
 リ



悉ク右下房ニ輸送シ左上房ハ血液ヲ肺靜脈ヨリ受容スル  
 ナ以テ甚シク充滿シ爲ニ卵圓孔ヨリ入り來ル所ノ血液ヲ  
 壓迫スルカ故ニ此孔遂ニ閉鎖スルニ至ル 其他臍帶動脈  
 同靜脈及靜脈道ノ血行絶止スルヲ以テ皆漸次ニ縮小シテ  
 遂ニ索狀ニ變ス 左ニ各部變化ノ大概ヲ記ス  
 臍帶動脈ハ同靜脈ニ先ツテ縮小収閉シ二日ヲ經レハ其變  
 化甚シク進行シ三日ヲ經レハ殆ト内腸骨動脈ニ達ス 臍  
 帶靜脈及靜脈道口ノ縮小収閉スルヤ稍緩慢ニシテ生後三  
 日間ハ少シク収縮スルノミ四日ニ至レハ甚ク著明ニシテ  
 五日ニ至レハ完了ス但シ罕ニ尙ホ延期スルコトアリ 動脈  
 道ノ収縮スルヤ肺動脈端ヨリ始リ大動脈弓端ニ向テ進及  
 ス 此變化ハ生後直ニ始ルト雖モ數時或ハ數日ハ甚ク著

明ナラス七日ニ至レハ著シク収縮スルヲ見ル而シテ八日ニ  
 至レハ全ク収閉シテ血液ヲ通セサルヲ常トス然レモ時ト  
 シテハ九日或ハ十日ニ至ルマテ延期スルコトアリ 卵圓孔  
 ノ閉塞ハ一定セズ或說ニ據レハ初生兒百人中七十五人ハ  
 八日以内ニ閉鎖シ二十五人ハ尙ホ延期スル者トセリ

○第十三章

胎兒發育ノ度

○胎兒發育ノ度

胎兒發育ノ度ヲ鑑識スルハ當ニ産科ニ於テ緊切ナルノミ  
 ナラス裁判醫學ニ於テ最も重要ナル者ナレハ左ニ其大概  
 ナ記ス



(受胎三週乃至四週) 長サ三分應ノ一ニシテ重サ二十氏  
其形ハ大蟻或ハ大麥粒ノ如ク頭部ハ大ニシテ尾部ハ細ク  
其部ニ臍帶ノ原始ヲ着ク 口腔ハ缺裂ヲ成シ眼ハ黯點ヲ  
以テ現ル 四肢ハ乳嘴狀ヲ呈シ脈絡膜ノ外面ハ絨毛ヲ以  
テ被ハル

(受胎六週) 長サ半應乃至一應弱ニシテ重サ四十氏乃至七  
十五氏 頭部ト胸部トノ間ニ分界アリ以テ顔面ト頭部ト  
ヲ區別ス 眼耳鼻口ハ既ニ皆判然タリ 上肢ハ胚胎ノ中  
部ヨリ突出シテ手指將ニ萌出セントス 下肢ハ肛門ノ側  
部ニ在リ 臍帶ハ臍腸間膜血管「ユラカス」及臍帶血管ヨリ  
成リ胎盤將ニ生セントス 脈絡膜及羊膜ハ未タ連接セス  
(受胎二月) 長サ一應半乃至四應ニシテ重サ二錢乃至五錢

鼻梁口唇及眼瞼將ニ發生セントス 生殖器ハ已ニ認め  
ヘシ 肛門ハ黒點ヲ呈ス 肺臟脾臟及副腎ノ原始ヲ見ル  
盲腸ハ臍ノ後ニ位ス 消食管ハ腹腔内ニ收入ス 「ユラ  
カス」已ニ現ル 脈絡膜ト羊膜トハ已ニ觸接ス 臍帶血管  
ハ將ニ螺旋狀ヲ爲サントス

(受胎三月) 長サ二應乃至六應ニシテ重サ一匁乃至三匁  
頭部ハ甚ク大ニシテ口唇及眼瞼ハ各觸接シ瞳子膜已ニ著  
シク發生ス 手指ハ排開シ下肢ハ尾骶ヨリ長シ 陰部ハ  
隆出スレトモ男女未タ判然セス 胸腺及副腎已ニ現出ス  
心臓下房既ニ左右ニ分ル 翻轉脱落膜ハ已ニ子宮脱落膜  
ニ觸ル 臍帶ハ血管及傑列乙樣物ヲ含ム 臍胞尿囊及臍  
腸間膜血管ハ既ニ認め難シトス



(受胎四月) 長サ四應半乃至八應半ニシテ重サ二弓或ハ三弓乃至七弓或ハ八弓 皮膚ハ蔷薇色ヲ呈シテ厚シ 口ハ大ニシテ哆開ス 瞳子膜ハ最モ著明ナリ 爪甲將ニ生ゼントス 男女ノ別既ニ判然タリ 膽嚢ハ將ニ生ゼントス 胎糞ハ十二指腸ニ在リ 盲腸瓣已ニ認ムヘシ 臍帶ハ耻骨ニ接シテ附着ス 脈絡膜ト羊膜トハ已ニ全ク相接ス 受胎五月 長サ六應乃至十一應半ニシテ重サ七弓乃至一磅一弓 頭部ハ軀體ニ準スレハ大ナリ 爪甲判然トシテ認ムヘシ 頭皮ニ細毛ヲ生ス 皮膚ハ未タ皮脂ヲ有セス 心臟及腎臟ハ大ニシテ胆嚢ハ既ニ判然タリ 胎糞ハ帶黄綠色ニシテ大腸ノ上端ニ達ス 永久齒ノ萌芽已ニ顎骨中ニ現出ス

(受胎六月) 長サ八應半乃至十三應半ニシテ重サ一磅二弓 皮膚ハ纖維織狀ヲ呈シ細毛ヲ生シ皮脂ヲ有シ紅色ヲ帶フ 眼瞼ハ尙ホ癒閉シ瞳子膜未タ消失セズ 臍帶ハ少シク耻骨ヲ上方ニ距テ附着ス 胎糞ハ大腸ノ上部ニ在リ 肝臟ハ暗紅色ヲ呈シ胆嚢ハ粘稠液ヲ含ム 睪丸ハ腎臟ノ近部ニ位ス 全身ノ中央ハ胸骨下端ニ在リ

(受胎七月) 長サ十一應乃至十六應ニシテ重サ二磅乃至四磅五弓 皮膚ハ暗紅色ニシテ厚ク纖維織ヲ以テ成リ皮脂ヲ有ス 頭毛ノ長サ四分應ノ一 爪甲未タ指端ニ達セズ 胎糞ハ殆ト大腸全部ニ在リ 肝臟ノ左葉ハ殆ト右葉ト其容積ヲ同フシ胆嚢中ニ胆汁ノ痕迹アルヲ認ムヘシ 睪丸ハ少シク腎臟ヲ離テ下行ス 全體ノ中央ハ胸骨下端ニ



リ少シク下位ニアリ  
 (受胎八月) 長サ十四應乃至十八應ニシテ重サ三磅四弓乃至五磅七弓 皮膚ハ薔薇色ニシテ短毛ヲ生シ皮脂ヲ具フ  
 爪甲將ニ指端ニ達セントス 瞳子膜ハ已ニ消失ス 翠丸ハ下テ内腹輪ニ入ル 全體ノ中央ハ胸骨下端ヨリハ臍ニ近シ

○化骨ノ順次

(受胎九月即チ滿月) 長サ十六應乃至二十應ニシテ重サ四磅五弓乃至七磅 頭毛ハ大約一應 皮膚ハ皮脂ヲ具フ 翠丸ハ鼠蹊管或ハ陰囊ニ在リ 胎糞ハ直腸ヲ領ス  
 胎兒發育ノ度ヲ鑑識セント欲セハ兼テ化骨點ニ注意スルヲ要ス故ニ左ニ化骨ノ順次ヲ示ス 骨格中最モ早ク化骨點ヲ生スル者ハ鎖骨其次ハ下顎骨ナリ此骨ハ受胎六週ニ

シテ既ニ化骨ヲ始ム 此骨ニ次テ化骨スル者ハ諸椎骨ニシテ其次ハ上膊骨其次ハ肋骨其次ハ後頭骨ナリ 受胎三月ノ初ニ至レハ肩胛骨前額骨橈骨尺骨脛骨腓骨及上顎骨等化骨ヲ始ム 同月末ニ至レハ蹠骨掌骨指骨及數個ノ頭骨ニ化骨點ヲ生シ受胎四月中ニハ腸骨聽骨薦骨及胸骨上部ニ生シ受胎五月中ニハ篩骨耻骨坐骨及跟骨ニ生シ受胎五六月ニハ距骨ニ生シ受胎八月ニハ薦骨下片時トシテハ舌骨ニ生ス 受胎九月ニハ後頭骨ノ四片未タ癒合セス尾骶骨ノ末片膝蓋骨腕骨跗骨及諸長骨ノ培生突起尙ホ未タ化骨點ヲ生セス

産科學卷之一 畢



正誤

- 目次三丁 三行ノ (透明)ハ(透莖)ノ誤  
目次四丁 四行ノ (及唾腺)ハ贅字  
目次四丁 十行ノ (卵圓道)ハ(卵圓孔)ノ誤  
七丁八行及九行ノ (腸耻)ハ(耻骨)ノ誤  
二十九丁 表中 内腔ノ前後徑線(四應ト三分ノ一)ハ(四應ト三分ノ二)ノ誤  
十七丁 十一行ノ (ハ腔)ハ(腔ハ)ノ誤  
四十八丁 九行ノ (最モ厚ク)ハ(不齊ニ)ノ誤  
五十四丁 六行ノ (小角)ハ(小孔)ノ誤  
六十六丁 八行ノ (溶)ハ(溶)ノ誤  
八十八丁 二行ノ (透)ハ(遂)ノ誤  
八十八丁 圖解 (イ)下ノ(透巢)ハ(透莖)ノ誤  
九十八丁 三行ノ (厭)ハ(壓)ノ誤  
百十丁 四行ノ (盲端)ハ(盲端)ノ誤  
百十三丁 一行ノ (厭)ハ(壓)ノ誤  
百十九丁 八行ノ (鳥)ハ(鳥)ノ誤



百二十六丁八行ノ (腔質)ハ(膜質)ノ誤  
 百二十九丁 註中ノ(ハ)鍔)ハ本文ニ屬ス  
 百三十二丁 圖解(ホ)下ノ(細膜)ハ(細胞)ノ誤  
 百三十七丁 圖解(イ)下ノ(左下房)ハ(左上房)ノ誤  
 百三十九丁 圖解中十一行ノ(外頭動脈)ハ(外頸動脈)ノ誤  
 百四十一丁 十行ノ (右側)ハ(左側)ノ誤  
 百四十二丁 圖解乙(ハ)下ノ(及)ノ上ニ(脈)ヲ脱ス

產科學卷之二

目次

○第十四章

妊娠中子宮ノ變化

○容積ノ延大 ○子宮筋纖維ノ増殖 ○血管水脈  
 及神經ノ變化 ○體腔及頸管ノ擴張 ○形狀ノ變  
 化 ○位置ノ轉移

○第十五章

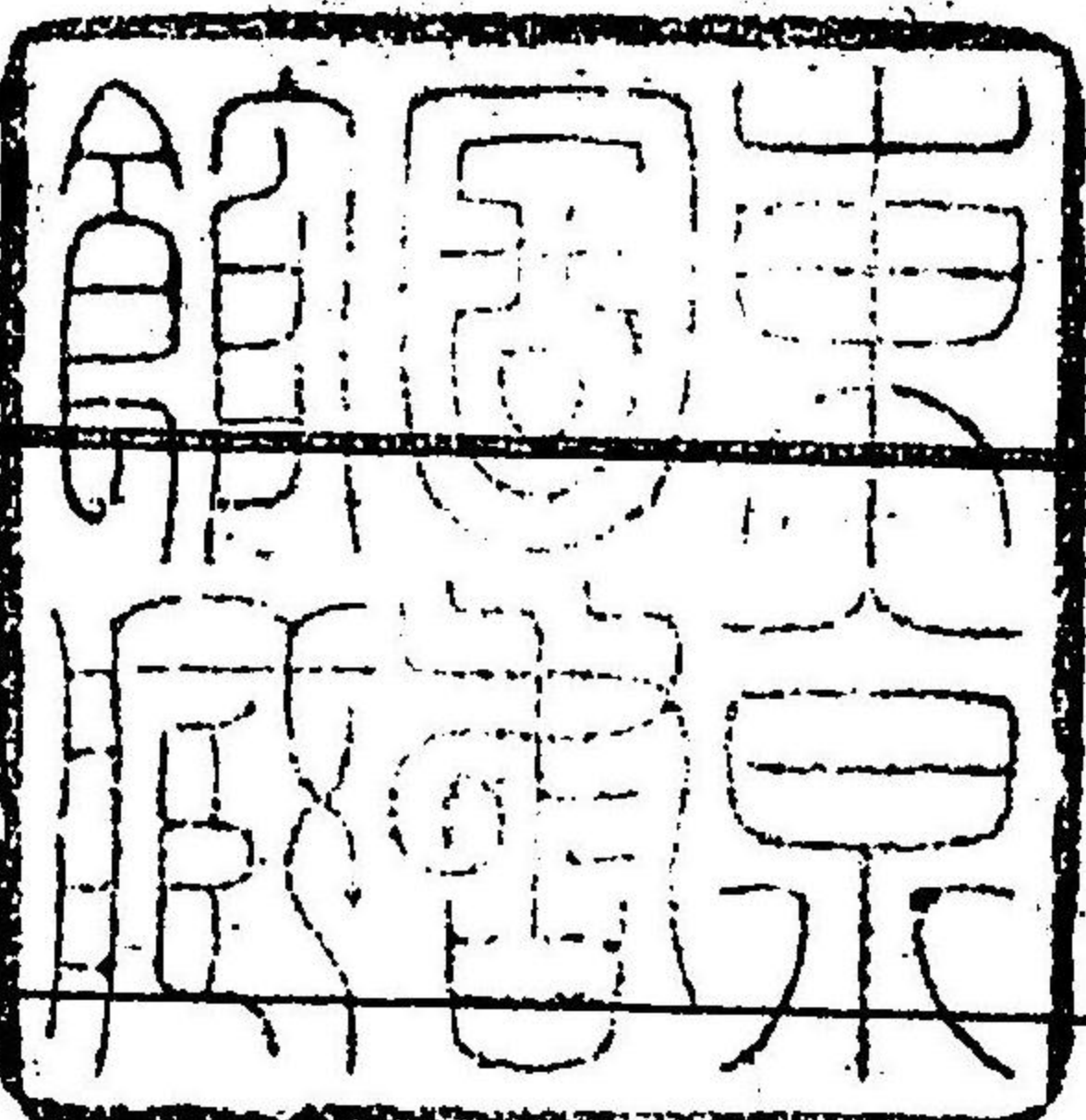
分娩后子宮ノ變化

○子宮ノ復常 ○筋纖維ノ脂肪性變質 ○新纖維  
 ノ發生 ○過度ノ縮小及不全縮小

○第十六章

妊娠ノ日數

○妊娠日數ノ算定法 ○分娩期ノ豫定法 ○早產  
 兒育長ノ運命









產科學卷之二

吉田顯三講述

門 人筆記

○第十四章

妊娠中子宮ノ變化

○妊娠中子宮ノ變化

妊娠中ハ子宮ニ著明ナル變化ヲ致ス者トス即チ容積延大重量増加位置轉移及組織變化是ナリ 子宮ノ重サ常時ニ於テハ大約十二錢長サ大約三應幅大約二應厚サ大約半應前後二壁ヲ合計ス然レモ妊娠中ハ漸次ニ増大シテ滿月ニ至スレハ長サ十八應幅九應重サ二磅餘ニ達ス 分娩後直ニ子宮ヲ檢スレハ能ク収縮シ其大サ初生兒頭ノ如クニシテ長



○子宮筋纖維ノ發生

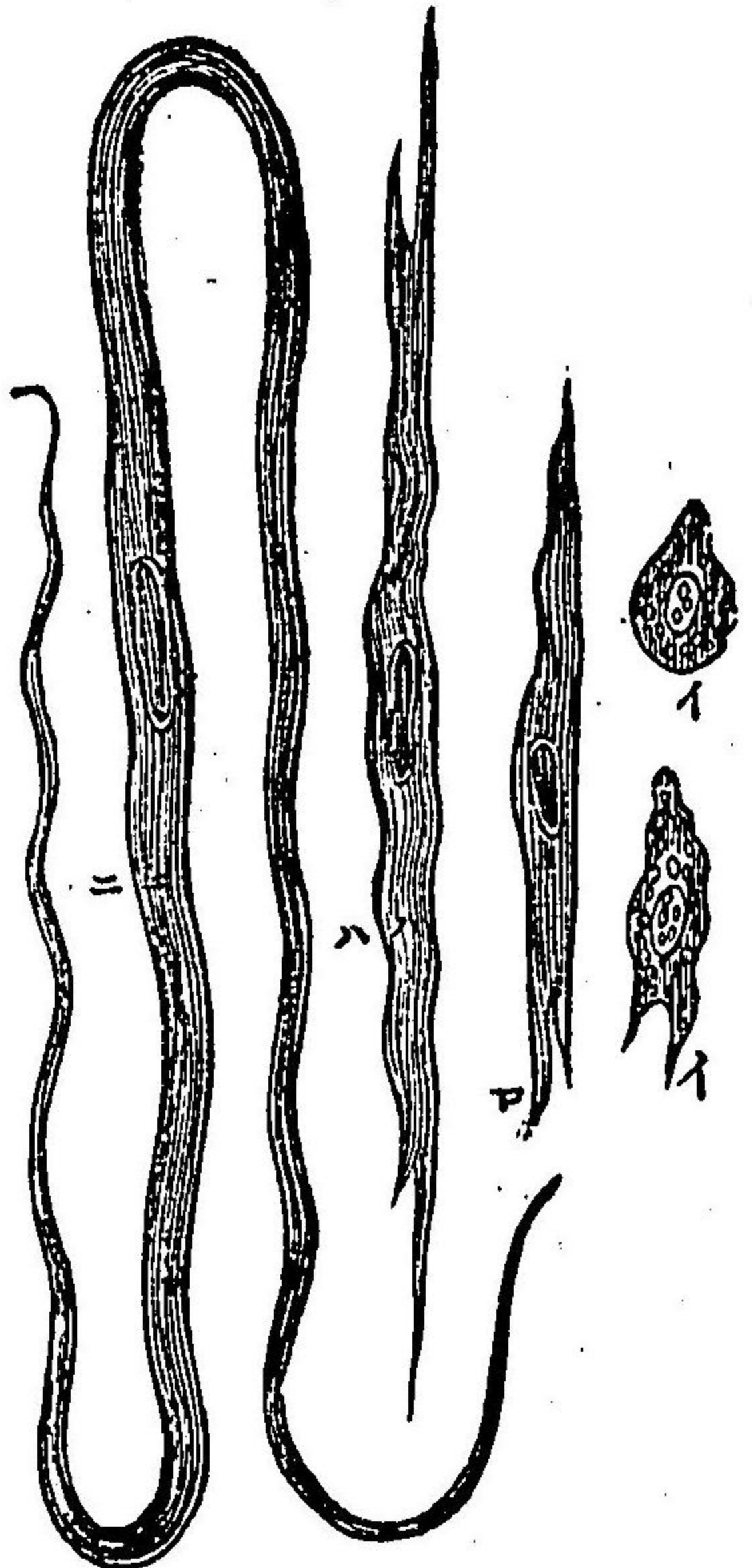
サ大約八應、厚サ大約一應、前後二壁ヲ合アリ、斯ノ如ク子宮ノ増大スルヤ其組織ノ一般ニ發育スルニ因ルト雖、特ニ在來ノ筋纖維ノ育長スルト新ニ筋纖維ヲ發生スルトヲ以テ最モ確著ナル者トス、子宮實體ハ專ラ紡錘狀筋纖維ヨリ成リ其組織間ニ許多ノ遊離核アリテ散在スル者ナリ而シテ此筋纖維ハ常時ニ在テハ長サ百分應ノ一ナレド、妊娠末期ニ在テハ四十分應ノ一ニ至ル、一説ニ據レハ子宮筋纖維ハ七倍乃至十一倍ヲ増シ、幅加ニ遊離核ハ漸次ニ發育成長シテ新ニ筋纖維ト成ル、但シ受胎六月ニ至レハ此新纖維又發生自ラ止ム者トス、子宮ノ筋纖維ハ常時ニ在テハ甚タメ認難ク、妊娠末期ニ至テ始テ分明ニ之ヲ檢シ得ベシ、而シテ前章ニ述ルカ如ク、内、中、外ノ三層ニ分レ各層ニ於テ其方

(第四十九圖)

妊娠中子宮筋纖維ノ發生ヲ示ス

(イ) (イ) 常時子宮ノ有核筋纖維ヲ示ス

(ロ) (ハ) (ニ) 妊娠中子宮筋纖維發生ノ順次ヲ示ス

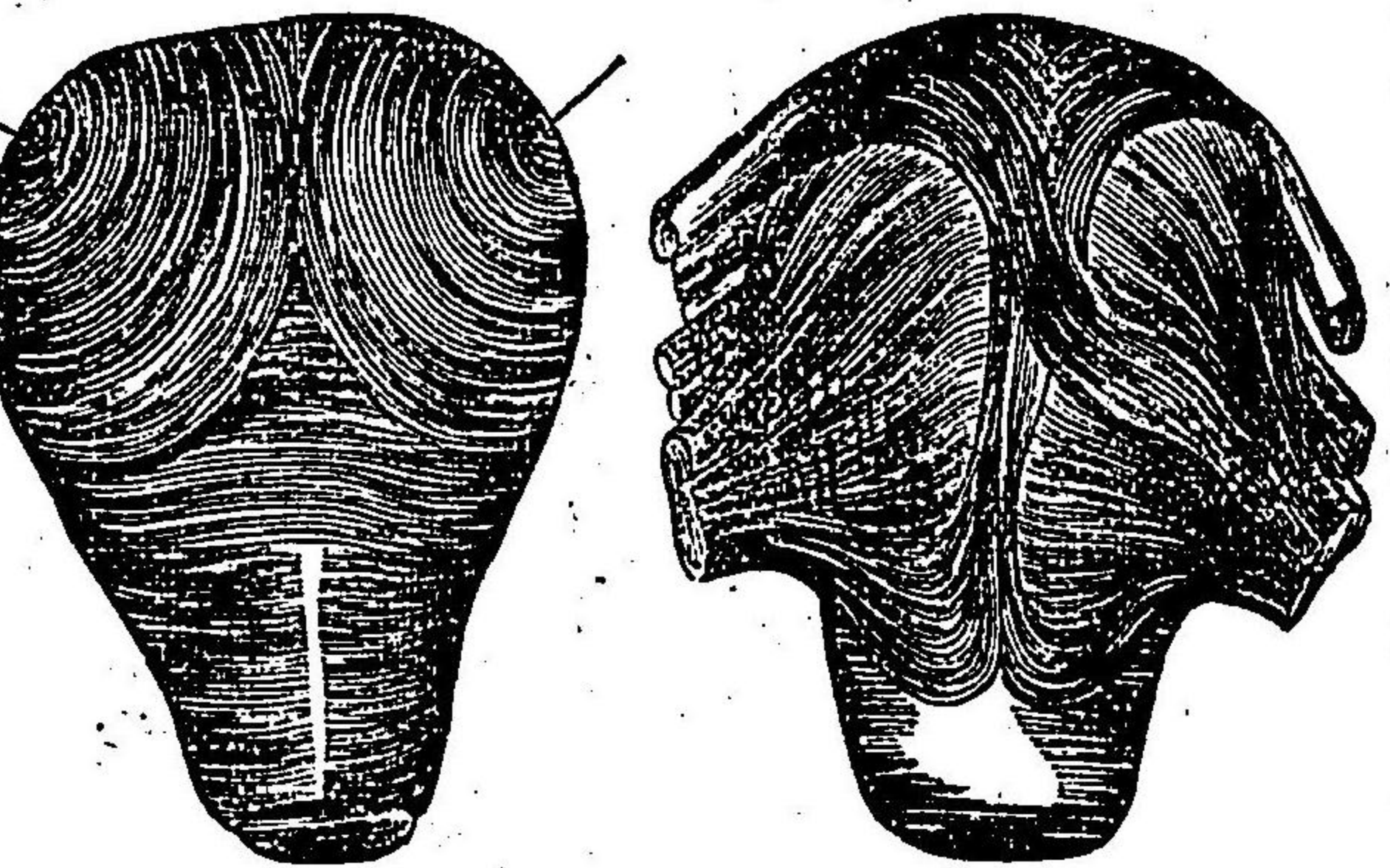


向チ異ニス、即チ外層ハ甚タ薄ク其纖維ハ側傍ヨリ起リ、專ハラ横走シテ中線ニ於テ對側ノ纖維ト交叉スル、後一部ハ上行シテ底部ニ達シ一部ハ下行シテ頸部ニ至ル、但シ此層



(第五十圖)

妊娠子宮ノ筋纖維ヲ示ス



(甲) 外層

(乙) 内層

ノ筋纖維ハ側傍ニ在テ  
 ハ喇叭管卵巢韌帶圓韌  
 帶及廣韌帶ニ累及ス  
 上  
 (甲) 内層ハ最モ厚シ其  
 纖維ハ輪狀ヲナシ喇叭  
 管ノ周邊體ノ下部及頸  
 部ヲ圍繞ス  
 上圖  
 (乙) 中層  
 ハ内外二層ノ間ニ在リ  
 其纖維ハ方向ヲ定メス  
 交互錯綜シテ血管ヲ周  
 繞スルカ故ニ若シ収縮  
 スレハ之ヲ壓迫シテ其

○動靜二脈水  
 脈及神經ノ  
 増大

口徑ヲ減ス乃チ分娩後血管ノ斷口ヲ壓迫シテ血液ノ漏出  
 ヲ止ムルノ効用アリ 斯ノ如ク子宮筋纖維ハ三層ニ區別  
 スト雖モ其各層ノ纖維ハ互ニ錯綜シ且ツ結締織ヲ以テ密  
 ニ連結セラレ、者トス  
 子宮動靜脈ハ妊娠中ニ増大且ツ延長ス 動脈ハ益々螺旋  
 狀ニ廻轉シ靜脈ハ管ニ膨大スルノミナラス胎盤質中ニ在  
 テハ所謂靜脈竇ヲ形成ス 水脈モ亦甚ク變大スル者トス  
 子宮ノ神經ハ專ラ交感神經ノ分枝ニシテ僅ニ腦脊髓神經  
 ヲ含有ス妊娠中ハ著シク増大スレモ其理論ハ未ダ一定セ  
 ス一説ニ據レハ子宮神經ノ増大スルヤ特リ其鞘ノ肥厚ス  
 ルニ因ルトシ他説ニ從ヘハ子宮神經ハ常時ニ在テハ發生  
 不全ナレモ妊娠中ハ其作用亢進スルヲ以テ髓質増加シ其

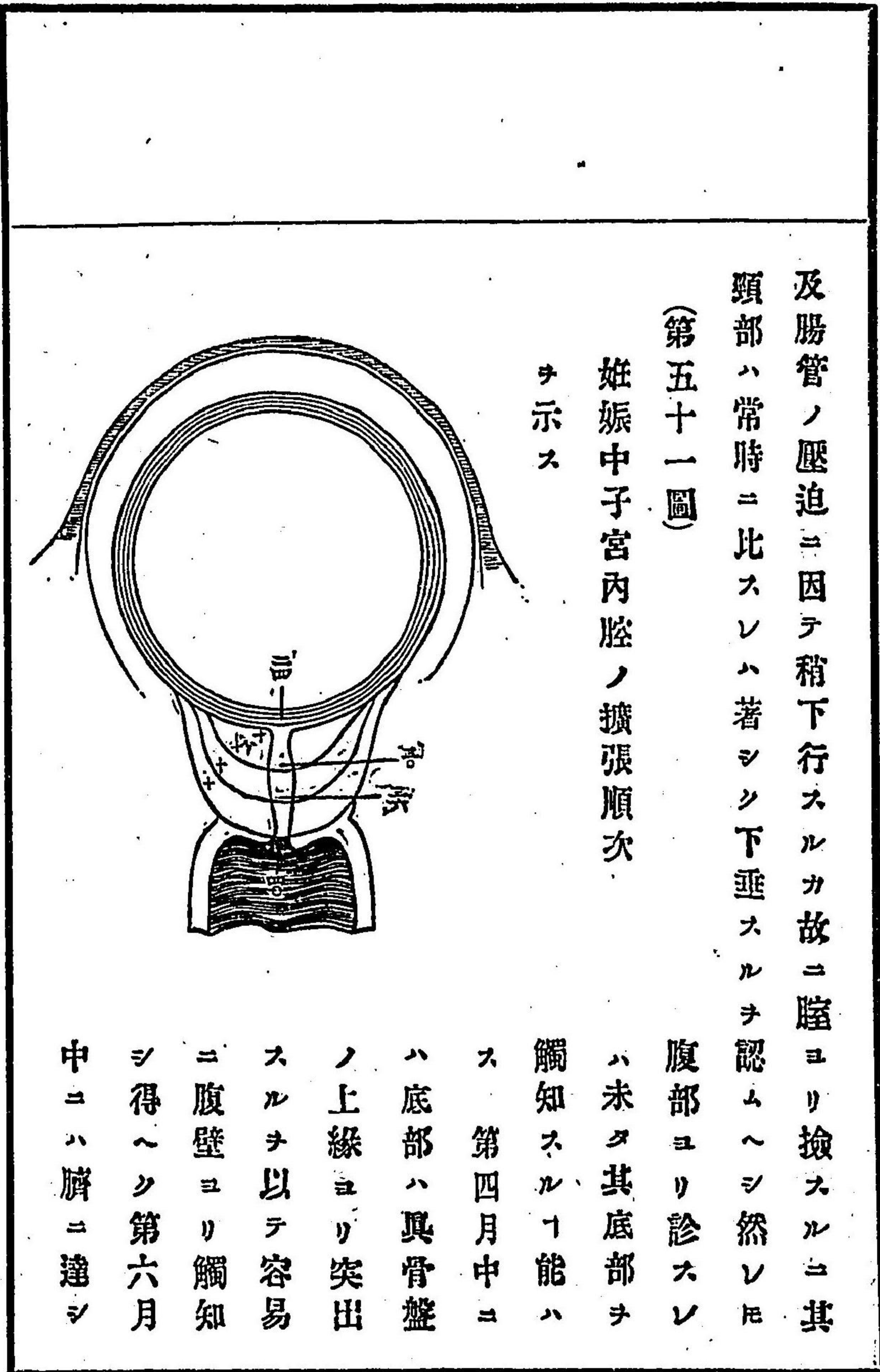


○子宮形狀ノ變化及內腔ノ擴張

轉移

○子宮位置ノ

鞘モ亦タ肥厚シテ之ヲ保護スル者トセリ  
 子宮ハ元來無花萼形ニシテ前後ニ扁平ナレド既ニ受胎ス  
 レハ其初期ヨリ形狀變シテ扁平ノ度ヲ減シ時日ヲ累スル  
 ニ從テ常形ヲ失ヒ殆ト圓形ヲ呈スト雖モ尙ホ多少扁平ヲ  
 存ス 受胎第十二週ヨリ二十四週ニ至ル迄ハ子宮內腔ハ  
 漸次ニ擴張シテ殆ト圓形トナリ爾後滿月ニ至ルマテ復タ  
 漸次ニ卵形トナル故ニ滿月ニ至レハ子宮ハ長サ十二應幅  
 九應前後徑八應アリ但シ圓形ヨリ卵圓形ニ變スルヤ頸管  
 ノ擴張スルニ因ル者ナリ 次圖ハ子宮體腔及頸管ノ擴張ヲ  
 ノ度ヲ表シ數字二四三〇三六及四〇ハ受胎以降ノ週數  
 ヲ示シ十號ハ子宮內口ノ舊位ヲ標スル者ト知ルベシ  
 子宮ハ形狀ノ變スルニ從テ其位置必ス轉移スルモノトス  
 受胎後十二週間ハ子宮漸次ニ增大スルニ從テ自體ノ重力



及腸管ノ壓迫ニ因テ稍下行スルカ故ニ腔ヨリ檢スルニ其  
 頸部ハ常時ニ比スレハ著シク下垂スルヲ認ムヘシ然レド  
 (第五十一圖)  
 妊娠中子宮內腔ノ擴張順次  
 ヲ示ス

腹部ヨリ診スレ  
 ハ未タ其底部ヲ  
 觸知スルヲ能ハ  
 ス 第四月中ニ  
 ハ底部ハ眞骨盤  
 ノ上縁ヨリ突出  
 スルヲ以テ容易  
 ニ腹壁ヨリ觸知  
 シ得ヘシ第六月  
 中ニハ臍ニ達シ